

(一)アリ
ウスの派の
解釋

第七章 教會の異端分派、コンスタンチン朝の教會國家の紛擾、異教の寛容 三六八

アリウス及其徒の假説に従へば、ロゴスは神父の意によりて烏有より創られし獨立自發のものなり。萬物を創造せし神子はあらゆる世界の前に生じ、天文学上の最長の時間も之を神子のそれに比すれば唯轉瞬時に過ぎずと雖も、而もその時間も無限には非ず、尙ロゴスの言説し難き時代の前に時ありき。この唯一の神子に萬能の神父は十分の精神を傳へ、燦爛たる己の光榮の印象を賦せり。眼に見へぬ完全の眼に見ゆる形像を以て彼は脚下の無量の距離に最輝ける天使長の寶座を認めしが、彼獨り反映の光を以て輝き、恰も亞皇若しくは皇帝アウグスツスの尊號を授けし羅馬の皇子の如く、神父神子の天意を承けて宇宙に君臨せり。二。第二の假説に従へば、ロゴスは宗教哲學が唯至上神にのみ歸し得る頒賦し得ざる生得の完全の總てを享有す。三種の各別の無限の心、則、物三種の相等相久の物ありて、チラインニツセンヌ神精を作し、その孰か存在せざりきまたは嘗て存在を止めたりきと爲すは誤れり。獨立の三神を立す可く見ゆる此組織の辯明者は、世界の計圖秩序に顯然たるる宇宙第一因の統一をその施設の永久の和合その意志の緊切の一致に

(二)三
神派の
解釋

よりて保持せんと力む。此統一的動作の幽けき類似は人間社會に見る可く、また動物社會にすら認む可し。その調節和合を破る原因はその能力の不完全不平等に在るも、無量の智と善とを以て進む大自在力は同じ目的の完成に向ひ同じ方法を用ひて悞つことなし。三。三者は自己存在の自發的必要によりて最完全なる程度のあらゆる神性を享有し、無量劫無邊際、に相互に至親に全宇宙に臨み、美と自然との學に於ては異りし形に顯じ差別ある姿に考へ得らるゝものから驚異せる心には不可抗力を以て同一者と見ゆ。此假説にては實在の物質的三位は唯之を觀る者の心に顯する名目と抽象的解釋と爲る。ロゴスは既に人にあらずして心格なり、そは唯太初以來神と與に存する永久的理性、その人によらず、その性によりて萬象を創始せる理性に神子の形容詞を與へきといふ譬諭のみ。ロゴスの肉體化は人なる耶穌の精神に充滿し行爲を指導せる神智の單なる感動に過ぎず。斯くして神學の範圍を回視、巡檢せる後、吾曹はエピオン派の始めし所にサペリウス派の終るを見、吾曹の崇敬の念を起さしめし測り難き秘密の終るに

第一節 基督教界の異端と三位論

吾曹の討究を逸脱し去るに愕く。

第二節 ニケア會議とアリウス派の消長

ニケア會議

ニケア會議(三二五年)の卑劣にして若し各自の本心の不偏の記録を許し
なば、アリウス及其その與黨は、當時基督敎界に最人望ある二大説に斯くまで
相反せる假説の多數の賛票を得んとは自期し難かりけむ。アリウス派は
直にその地位の危きを看取し、細心にも政敎の論争に於て弱黨の外殆んど
實行せずまた賛成せざる謙徳を示せり。乃ち基督敎的仁慈温厚の實行を勸
め、争議の測り難き性質をいひ、福音書に用ひし外の辭句定義を用ふるを避
け、自説の正大を撤せずして尙其寛大なる讓歩によりて敵黨の満足を買は
んとせり。捷黨は乃疑ひながらも誇りて此提案を受けしが、アリウス派に
して峻拒せば異端外道に陥る可き異見の相容れざる點を極力搜索せり。
恰もよし、その派の擁護者ニコメチアのユセビウスが既にプラトン派に慣
用されしホモオウシオン 則 同體の語を許すはその神學組織の主義と相

ホモオウ
シオン

容れずと公言せる一書牘を得、之を公開朗讀し之を破棄せり。會議の決定
を支配する卑劣は此好機を執へぬ、アムプロスの生寫の句を假れば、異端の
徒が悪む可き怪物の頭を刎ねんと翰を脱せし利刀は卑劣に用ひられき。
神父神子の同體はニケア會議にて決定し、希臘羅旬東方さては後の抗抵派
教會の賛同を得て、基督敎信仰の根本的信條として一齊に迎へられき。然
れども同語にして異端別派に烙印を與へ加持力派を統一し得ざらんには
之を正教信條に加へし多數黨の目的に合せざる可し。この多數黨は三神
敎派とザベリウス派との感情の疎隔によりて兩派に別れしが、自然敎天啓
敎の孰の根柢をも顯す可く見ゆる他の極端派に對しては力を發せて當る
に一致し、共同の利害の爲にその衆を合し、その差見を掩ひ、相互の讐怨は寛
容の商議を以て緩和し、彼此の争議は不思議なるホモオウシオンの語を各
その特殊の説によりて自由に解釋することとして停止せり。五十年前ア
ンチオク會議にこの有名なる語の禁止を逼りしザベリウス派は、今や名義
上三位説に秘密ながら偏愛を懐ける神學者に之を許せり。然れどもアリ

第二節 ニケア會議とアリウス派の消長

ウス時代の更に有力なる諸聖徒、則、卒直なるアサナシウス、博學なるグレゴリー、ナジアンゼン、その他才能と成功とを以てニケーア會議を支持せし教會の柱石は體の語を性のそれと異辭同義に見たるが如く、共同種族に屬する三個人は相互に同體なりホモオウシオンなりとして解釋せり。この明白なる均等は、一方には神格を固く合一する内部的連合精神的感動により、他方には神子の獨立と相容るゝかぎり神父の卓越を認識するによりて調和さる。正教派の殆んど認め難き震動的球丸は此局限中を彷徨し、隠に不幸なる彷徨者を襲はんとし喰はんとする異教徒と惡魔とは此限界の外に飛翔せり。然れども神學的憎惡は爭議の必要よりも寧戰闘の精神に在れば、神子の格を無視せる者よりも之を蔑如せし者は更に峻烈の待遇を受く。アサナシウスの一生はアリウス派の不敬虔なる狂妄に對し飽くまで反對せしが、アンキラのマルセルスのサベリウス派は二十年以上も保護し、その終に隱退せし時もなほ曖昧の笑を以て尊敬す可き友人の誤謬を記し續けたりき。

アリウスの信條

アリウス派を屈せし宗教會議の權威は正教黨の旌旗にオモオウシオンなる一語の不可思議の記號を印せしが、それは若干の些末なる爭論に拘らず、信仰少くとも言語の統一を謀る可く若干の夜戰を要しき。捷利によりて加特力の名に適しその名を得し同體論者は、自家信條の簡明鞏固を誇り、何等信仰の一定の條規なき對敵の動搖を嘲れり。アリウス派領袖の熱誠若しくは講詐、法律若しくは民衆の畏怖、その基督に對する尊敬、そのアサナシウスに對する憎惡、神學爭議を左右し攪擾せし神人百般の原因は、分離教徒中に紛擾分裂を惹起し、數年の間に十八異流を立て、教會の威權に報復せり。自己の地位の特に危殆なるより、東洋僧侶の誤謬を増大せんよりは寧減少せんとせる熱心なるヒラリーは、その放謫されし亞細亞十州の廣域に、眞神の知識を有するものは寥々たりと公言す。その蒙りし壓制、その見つ且自犠牲となりし紛擾は少時の間その忿恚の情を和げ、次に抄録する數行にポアチエーの卑涉が基督教哲學者の辭句に迷ひしを見ん。ヒラリー曰く、人間所説あるが如く幾多の信條あり傾向あるに従ひ幾多の教義あり過

失あるまゝに幾多の冒瀆ありて任意に信條を作り任意に之を解釋せんは、悲しむ可く且危し。神父神子の部分的若しくは總合的同似はこの不幸なる時代の平案たり。毎年否毎月吾曹は不可見の不思議を論ずる新信條を作る。吾曹は自爲せし所を悔ひ、悔ひし者を庇し、庇ふ所を咀ふ。自他の教義を罵り他に自己のそれを罵られ相互に破碎して相共に破滅を來すと。殆んど皆教主アリウスの忌む可き名に背ける十八派の信條を仔細に列舉せんことは吾曹の期せざる所にして、また恐らく耐ゆる所ならず。一草木の形體を誌し成長を説くは十分に興あるも、花なき葉なき枝の詳を悉くさんは、忽ち多勞の學生の忍耐を盡くし好奇を失望せしめん。されどアリウス爭議より漸く起りし一問題の看過し難きは、唯共にニケア會議のホモオウシオンに反抗するにのみよりて合一せる三派の興起と其區別なり。一。若し人ありて神子は神父に肖たりやと問はゞ、創世主とその創出せる人間の最優者との間に無限の差別を立つ可く見ゆるアリウスの門流を汲み若しくは哲學に志す異教徒は、決然として之を否定せむ。此明白

なる結果を主張せしは、敵黨より無神論者の絆號を受けしエチウスなり。エチウスは不撓向上の精神を以て殆んど人生の所有職業を試みき。奴隸否少くとも耕奴たり、遍歴の補鑊匠たり、冶工たり、醫師たり、學校教師たり、神學者たり、而して最後にその門下生ユノミウスの能力に頼りて興隆せし新教會の使徒たりき。聖典の辭句とアリストルの論理より得し好争の三段論法とを武器として、エチウスは默せしめ得ず論破し得ざる無敵の論客たる名聲を得たり。この技倆はアリウス派の卑劣をして、理議の構を盡くしてその教義を民間に誤り傳へ最敬虔なる教徒の敬神を犯する危険なる與黨として己を排斥且處罰せしむるに至れり。二。創世主の自在力は、神父神子の肖似の明白なる解釋を推想せしめ、信徒は至上天神は無限の完全を授けて己にのみ肖たる一生人を創造し得るを拒むに足る何等の理由なしとせり。此種のアリウス派を支持せるは、ユセビウス派の處置に成効し東方の主要なる地位を占むる領袖の威力と能力とに頼れり。此徒のエチウスの不敬を嫌ふには恐らく若干の虚飾あらむ。此徒は聖典に従ひ

明白に、神子は總ての他の生物と異りて唯神父に類すと信ずといへり。然も神子は神父と同質若しくは類肖なりといふを拒み、神格の適當なる少くとも明白なる意味を表現す可く見ゆる質なる語を用ふるに反せり。三。尙質説を奉ずる教徒は少くも亞細亞諸州には最多く、兩派の領袖セリキア會議に集合せし時、その説は四十三卑沙に對する百五員の多數を以て行はれたり。此不可思議なる類肖を表現する希臘語は正教の徵象たる語に極めて近く、各時代の凡俗はホモオウシオンとホモイオウシオンと僅に一音の差が激烈なる争抗となりしを嘲りし程なり。極めて互に相近き發音と字形が偶然にも最相反せる思想を表現すること多きが如く、不適當にも半アリウス派と稱せらるゝ教派と加特力派との教義の間に何等かの實在の差別を認め得んには、觀察はそれ自笑ふに耐ゆ可し。フリギア流議中黨争を巧に處せしボアチエー卑沙は敬信の念を以てホモイオウシオンを同體の義に解釋せんと努力せしが、なほ此語は暗黒疑惑の形ありと爲し、その暗黒が恰も教争に縁あるが如く一び教會の門戸に進みし半アリウス派は極

ホモイオウシオン

力その攻撃を爲したり。

西教(羅句) 教會の信

希臘の言語習俗に閑れし埃及亞細亞の諸州は太くアリウス争議の毒を仰げり。親しきプラト派の哲學徒に論議を好む性情、豐富なる變化し易き土語は東方の僧俗に言語と差別の無盡蔵を供し、激烈なる争議の間に哲學の訓へし疑案と宗教の悦ぶ服従とを遺却す。西方の民は之に比すれば究索の精神少く、不可見の事物によりて情感を動かすこと多からず、論争の俗稀に、ヒラリーすら第一會議の後三十年以上もニケーア信條を知らざりし程にゴール教會は事情に迂なりき。羅甸族は暗黒に疑はしき翻譯の中介によりて神智の光を仰ぐ。その地方語の貧弱にして信屈なる福音書及教會にて基督教信條の至秘を表現す可く神聖と爲されしプラト哲學の學術語たる希臘言辭に恰好の同義語を得ること常に易からず、乃言文の缺陷は羅甸神學に錯誤混迷の連續を來し得たり。唯幸に西方諸州は正教の源流よりその宗教を傳承せしにぞ、柔順にその教義を承け確實に之を支持し、アリウス疫のその境上に蔓延し來りし時、羅馬法王の家父的注意によりてホモ

第二節 ニケーア會議とアリウス派の消長

第七章 教會の異端の派、コンスタンチン朝の教會國家の紛擾、異教の寛容三七八

オウシオンの保持を以て支へ得たり。その情意は、伊太利亞、非利加、西班牙、ゴール、不列顛、イリリクムの四百以上の卑劣を集め得て、數に於てニケアのそれに凌駕せし有名なるリミニ會議(二六〇年)に現れき。アリウスの名と記念とを排しながらなほその黨に屬せし者は始より八十を出でず。但この派の少數は熟練經驗訓練を以て補はれ、その領袖は一生を朝廷會議の謀略に投じ、東方の宗教戰にユセビウスの旗下に奮闘せしイルリクムの二卑劣、ブレンスとウルサシウスなり。その辨難商議は卒直簡朴なる羅甸卑劣を窘迫し、攪亂し終には欺瞞し、公明の侵凌よりも寧欺瞞惱煩の術を以てその手より信仰の守護神を奪取せり。斯くしてリミニ會議は、會衆が不用意にもホモオウシオンの代に異端の疑ある或表現を記入せる欺瞞の信條に署名するまで解散を許されざりき。是に於て乎、ジロムに據れば、天下は悉くアリアンと化せるに愕けり。然も羅甸諸州の卑劣は一び各自の管區に歸るやその過失を發見し、その弱行を悔ひたり。輕侮嫌惡を以て不名譽なる信條を拒絶し、一び震ひしもなほ倒れざりしホモオウシオンの旗は復

西方の全教界に確立せり。

斯の如きはコンスタンチンとその諸子の世に基督教の平和を攪亂せし神學的論争の興起進歩、而してその自然的革命なりき。然るに諸帝にしてその專制の手を臣民の生命財産に加ふるが若くその宗教に染むるに至りてや、その發言の威力は時に教界の均衡を傾け、天主の權能は地王の廟議によりて確定し、動移し變化せり。

東方諸州を風靡せし不幸なる紛亂的精神はコンスタンチンの征服を防阻せしが、帝は暫く冷然として袖手傍觀せり。(三二四年)尙神學の争議を和解するの困難を知らざりし帝は、その教務顧問の意見よりも將軍政治家としての所見に據れる緩解の上諭をアレキサンダー、アリウスの兩爭黨首に下せり。帝は、教法の不可解の點に就きて卑劣の問や愚に長老の決や不用意なる鎖末の問題より全争議は起るとせり。帝は、同一の神、同一の宗教、同一の崇拜を有する基督教民がさる鎖末の差異より分裂するを歎き、その情を動かさずして論議を斷はせ、その友を侵さずして自由を確定し得る希願

第二節 ニケア會議とアリウス派の消長

帝の熱誠

哲學者の例を擧げて、アレキサンドリアの僧侶に懇諭せり。若し民間の風潮にして斯く急激猛烈ならず、コンスタンチンにして抗爭狂熱の間に立ちて能く冷靜の心を失はざりせば、帝の不干渉と蔑如とは恐らく爭論を鎮靜する最良策なりけむ。然るに帝の教臣は直に有司の公平を欺かんと企て歸依者の熱心を動かさんと謀れり。自己の立像を干犯せるに怒りし帝は(三二五年)眞偽孰にするも傳播する不幸の偉大に驚き、宮中に三百の卑劣を召せる瞬間より和平宥恕の希望を抛つ。君王の臨御は討論の緊張を加へ、その注意は論争の端を増し、その参加は論客の勇氣を激せり。コンスタンチンの雄辯賢明に對する推賛に拘らず、その宗教は尙疑はしくその心は學問神感の影響なき羅馬の一將軍は希臘語を以て無造作に信仰條目の哲學的問題を討議し得たり。然もニケア會議を左右せしと見ゆる寵臣オシウスの情報に帝を正教に誘ひ得、今や異端を擁護するニコメデアのユセビウスが擲に僭主を輔翼せしことは帝を怒らし得たり。コンスタンチンはニケア信條を批准し、會議の神判に反抗する者は直に放謫す可しとの決然た

帝のアリウス派排斥

る宣明は薄志の反對黨の私語を絶ち、十七員の反對卑劣は直に滅じて二員となり、その中ケサレアのユセビウスは心ならずも曖昧にホモオウシオンを諾し、残れるニコメデアのユセビウスの動搖せる行動は約三ヶ月間その流謫を荏苒せし而已。不敬神のアリウスはイリリクムの遠地に放たれ、その身その徒は法律によりてポルフィリアンの汚名を印せられ、その著書は燬かれ、之を藏する者は罪を獲たり。帝は今や教争の精神を會得し、その宣旨の怒を帯びし嘲笑的辭句は帝が基督の敵に對して抱ける憎惡を以て臣從を動かさんとせり。

帝のアリウス派寛容

然れども帝の行動は主義より來らず感情より生じたれば、ニケア會議の後僅に三年を出ずして(三二八年乃至三三七年)皇妹が竊に保護せる禁過教派に對し仁慈を垂れ宥赦を加ふるに至れり。逐客は召還され、コンスタンチンの心理に漸く勢力を加へ來れるユセビウスは不名譽の謫境より大教師の地位に復せり。アリウスは恰も無辜にして虐げられし者の如く滿廷の尊敬を受く。その信仰はエルサレム宗會にて是認さる。帝はアリウスに

コンスタンチノブル伽藍に參入するの允許を宣して、前失を償ふに汲々たるの觀あり。アリウスはこの捷利と同日に示寂せり、——その死の奇異にして恐しき事情は、正教の聖徒が對敵中最恐るべき者より教會を救はんとめ祈禱よりも一層効驗ある手段を敢てせしとの疑念を生ぜしむ。加特力の三巨魁アレキサンドリアのアサナシウス、アンチオクのユスタシウス、コンスタンチノブルのパウルは、幾多の會議の宣言により若干の罪案を以て廢せられ、後にその最後の日にニコメチアのアリウス派の卑涉より洗禮を享けし最初の基督敎皇帝によりて遠地に放謫せられき。コンスタンチンの宗教的政府は輕浮纖弱の譏を免るゝ能はず。然れども神學的戰法に不熱練なる皇帝は、能くその眞情を解せざる異端の譏讓公明の態度には欺かれ得可し。而も帝はアリウスを保護しアサナシウスを罪しながら、ニケア會議を以て基督敎信仰の長城となし、その治世に於ける特殊の光榮と爲せり。

コンスタンチン派の統率

コンスタンチン帝の諸子は、その幼時より三三七乃至三六一年(改宗)補

の地位に在りしも、その洗禮の荏苒は父帝に倣へり。その未曾て正式に入門せざる宗教的奧秘に就きて裁斷を加ふるも亦父帝に同じ。三位爭議の運命は多く東方諸州を繼承して全帝國に君臨せるコンスタンチウスの感情に繋れり。先帝の遺詔を秘せしアリウス派の長者は、之によりて公務の常に宮裡の寵臣に左右せらるゝ新主に近くの好機を得たり。奄豎奴隸は宗教的害毒を宮中に流布し、宮女は禁軍に、皇后は皇帝に危險なる流毒を傳播せり。コンスタンチウスが常にユセビウス派に有せし私幸は何時しかその領袖の妙策によりて築成されし所にして、その僭主マグネンチウスに對する捷利は帝が益アリウス派の爲に武力を用ふるの傾向を助長せり。兩軍ムルサの野に會ふや、コンスタンチンの子は城下の殉道者の寺中に入りて勝敗の決を待つ。アリウス派に屬せるその管區の卑涉ワレンス捷利か遁走か執にするも利便なるべき報告を得るに力め、迅速に信賴す可き使者相踵ぎて戰況を報じ、宮人畏怖せる君王を繞りて慄ひ立つ時、ワレンスはゴール軍の退却を確言し、恰も此光榮ある事件を天使の默啓に得しが如き

風を粧ふ。皇帝乃その成功を以てムルサ卑沙の信仰が不可思議なる天の感應を得たる功蹟に歸せり。コンスタンチウスの捷利を自己の捷利と思惟せしアリウス派はその光榮をその神父の光榮とせり。エルサレム卑沙キリルは直に莊麗なる虹霓を以て圍繞せる十字架が五旬祭日の第三時に楹檻山上に出現して神聖なる市城の巡禮城民に見へしを記せり。この天象は漸次に擴大され、アリウス派の史家はパンノニアの戰場に於ける兩軍の認むる所となし、故に偶像信者を代表せしめし僭主は基督正教の此先兆を望見して遁走せりと爲せり。

公平に政教亂の進展を考察せる思慮ある一外人の感念は常に吾曹の見に應ぜり、軍に従ひコンスタンチウスの性情を知りしアマミアヌスの短文は恐らく神學的謗語の幾頁に優る價值あらむ。この温和なる史家曰く、彼は簡明なる基督教を迷信の溺惑を以て攪亂せり。帝權の威力によりて黨争を緩解せず、無用の好奇心より激成せし争抗を言論を以て養成せり。孔道は各方面より宗會と稱する集會に馳せ參する卑沙の群を以て掩はれ、全教

派を自己特殊の説に歸せしめんと努力せる間に、その急忙反覆の旅行の爲に驛遞の公共機關を殆んど荒廢に歸せしめきと。コンスタンチウスの治世に於ける宗教事項の吾曹の更に詳細なる知識は、この顯著なる一文に十分の註脚を與ふ可く、眞信仰を挽りて帝國を彷徨せる僧侶の不撓の活躍は信仰なき世界の嘲笑を買ふ可しと曰へるアサナシウスの正當なる懸念を證す。帝は内亂の恐なきや、アレクシアン、シルミウム、コンスタンチノブルの冬季の閑暇を教争の慰樂否煩勞に費し、有司の劍否僭主の劍すら神學の理論を強行するために鞘を脱し、ニケアの正教信仰に反對せる帝の不能無智はその擅斷に均しきを公告せり。帝の虚弱の心を左右せる奄豎婦人卑沙はホモオウシオンに對する超え難き憎惡を帝に煽りしも、帝は怯懦にしてエチウスの不敬神に愕けり。この無神論者の罪は不運なるガルスの龍遇を蒙りしが如き爲に増し、アンチオクにて帝の臣僚の殺されしすらの危険なる詭辯者に嫌疑かゝれり。理論を以て緩和されず信仰を以て確立されざるコンスタンチウスの心は、兩極端の畏怖によりて暗々たる空谷の

兩側に旨動せり、帝はアリウス、半アリウス兩派の教義に乍歸依し乍禁遏し、その首領を或は放謫し或は召還す。公務慰樂の間に、帝はその動搖不定の信條を作る可く言語を擇び綴音を定むるに日も亦足らず或は夜を以て繼ぐ。沈思冥想の問題は帝に睡中に追従し、とりとめなき夢は神來の幻となされ感情の満足を得る爲にその制度の利害を遺却せる編流より諸卑涉中の卑涉なる尊號を得て喜べり。ゴール伊太利イリクム亞細亞に幾多の宗會を開きて教義の統一を成さんとせし企圖は、帝の輕佻アリウス派の分裂加特力派の抵抗によりて破れ最後の決定的努力として總會議の召集に決せり。ニコメチアの大地震便宜なる會場を得るの困難は恐らく或政策的秘密とともに召集令に變更を加へたり。東方卑涉はイサウリアのセレウキアに、西方はアドリア海の沿岸リミニに集まり、各州より二三の代表を出す代に全編流を會せり。東方會議は激論四日にして何等決する所なくして散ぜしが、西方會議は七ヶ月に亘れり。禁軍統領タウルスは全會一説に合するまで解散を許さず、最頑迷の者十五員を放謫し得可く、若し此難事

セレウキアの兩會議ニ

を遂げなば執政格に昇す可しとの命約を得たり。その懇求威嚇皇帝の威權、ブレンスとウルサシウスとの詭辯、饑寒の痛苦放謫の憂愁は、終に(三六〇年)リミニの諸卑涉の心ならぬ承諾を強取せり、東西の使節はコンスタンチノブルの宮殿に帝に侍し、帝は神子同體を表現せず、肖體を確立せる信仰を天下に宣布するの満足を得たり。然れどもアリウス派の捷利に先ちて畏怖誘惑されざる正教派編流は引去れり。コンスタンチウスの世は大アサナシウスの不正無効の處罰によりて汚されき。

第三節 アサナシウス

不撓不屈一目的を追求する一箇人の心力が、活動的生活と冥想的生涯とに論なく如何の後果は贏ち得如何なる障害を排進し得るかを觀察するの機會を得んことは稀なり。アサナシウスの不朽の名は、その生涯の各瞬間各能力を傾倒して擁護せし三位一體の正教々義と決して離るゝ能はず。アレキサンダー家の教訓を受けて、アリウス派の異端の始より烈しく之に

アサナシウスの性格

反對し、老教主の下に記室の要務に當りし少年執事の向上の徳は、ニケア會議の師父をして驚異尊敬の眼を睜らしむ。天下危急の際には年齢位階時に用を爲さず、ニケアより歸りて後五ヶ月ならずして、執事アサナシウスは埃及大主教の位を得たり。この顯職に在ること實に四十六年(三二六乃至三七三年)の久しき、絶へずアリウス派の權勢に對して力争せり。爲にその職を奪ふこと五び、放謫遁亡二十年羅馬帝國の各州は、その生涯の唯一の快樂にして事業責務にして光榮とせるホモオウシオンの主義の爲に功を立て苦を喫せる彼を見ざるもの殆んど莫し。迫害の渦中に在りて勞に耐へ名を求めて安危を顧みざりしアレキサンドリア大卑沙は、例令狂熱の讒を免れずとするも、なほコンスタンチンの豚犬兒よりは遙に能く大帝國の支配に適する性格と才能との優秀を示せり。その言説はケサレアのユセビウスの深奥廣大に及ばず、疎野辯到底グレゴリー若しくはバシルの洗練されし辭令に比す可くもあらざれど、その心情行爲を辯ずるに當りて、口に筆に故意とならぬ格調は明截他を説服するの力あり。正教學派に於て

は常に基督敎學に最精細なる學者として尊敬されしが、尙他に緇流に用少き法學算命の二科の知識を有せしが如し。その未來の事件の豫想は、公平なる推理家には經驗判斷の力に歸せられしも、その與黨よりは天啓を受くとされ、敵黨よりは幻法魔術と目されき。

然れども、アサナシウスは緇流より帝王に至るまであらゆる階級の私見感情に絶へず接觸すれば、その第一最緊要の學は人間性情の知識なりき。間斷なく轉變し行く世相を明に知り、暗々者流の看過する一び去りては再得難き決勝的機會に乗じて決して誤らず。如何の程度まで大膽に號令す可きか、那邊には巧妙に浸潤す可きかを識別し、如何に久しく權勢を用ひ得可き、何の時に退却す可きを辨知するの明あり。異端背畔の徒に對しては教會の雷電たるも、自黨の裡には細心なる首領として不撓の寛大なる性情を保てり。その撰拔は不法急激の譏を免れざりしも、その態度風采は俗兩面の敬愛を得たり。アレキサンドリア府民はこの雄辯にして寛大な牧民の擁護には兵を把りて蹶起するを辭せず。その不幸に陥りし時も

第七章 教會の異端分派、コンスタンチン朝の教會國家の紛擾、異教の寛容 三九〇

常に管内細流の忠信によりて支持せらる、否少くも慰藉を得たり。埃及數百の卑沙は不易の熱心を以てアサナシウスの與黨たり。主教は誇負と政策とが必要とする適宜の一行を従へて屢ニール河口よりエシオピアの境上に抵る管内諸州を巡行し、最卑賤なる民衆とも親しく言を交へ、漠中の聖徒隠者を恭しく訪へり。教育風尚相若ける宗會教議の場に於てのみ其天才を發揮するに非ず。君王の宮廷にも平然として出入し禮容を損ぜず、運命の昌替に論なく未曾て同志の信賴對敵の尊敬を失はざりき。埃及大教正はその少時(三三〇年)屢アリウスを加特力派中に復歸す可しと爲し、大コンスタンチンに反抗せり。皇帝は此不撓の決心を尊敬せしもまた寛容し得。アサナシウスを以て勁敵と爲せる分離派は憎惡の情を藏して竊に間接迂回の攻撃を加へんとす。乃流言を放ちて大卑沙を僭傲專制の僭主と爲し、大膽にもメレチウスの異端と呼應して、そのニケア會議所定の約に背けるを責む。アサナシウスは公然この不名譽なる和平を辭みしかば、皇帝は主教を以てその忌める別派を處罰す可く、教俗兩權を濫

用し、マレオチスの一寺にては聖餐杯を毀ち、六卑沙を鞭ち若しくは囚へ第七の卑沙アルセニウスを虐殺若しくは不具にせりと信するに至れり。名譽生命に關する此等の案件によりコンスタンチン帝はアンチオクに駐在せる皇弟ダルマチウスを檢案使たらしめ、相踵でケサレア、チール會議を開かしめ、東方卑沙にエルサレムに新創の復活寺の開創式前にアサナシウス案の處判を命ぜり。主教は無辜を明にし得るも、斯る罪案を作りし峻嚴なる精神の案の進行を支配し宣言を爲す可きを知れり。乃細心に敵の裁斷を拒みケサレア會議の召に應ぜず、若しチール會議(三三五年)に來らざれば拒命の罪を罰す可しと威嚇せる皇帝の嚴命に服せしは巧に長き猶豫の後なりき。埃及僧五十を將てアレキサンドリアを開帆する前、アサナシウスは賢くもメンチウス派と連合し、またその犠牲となりしと思はれし實はその信友たるアルセニウスをも潜に一行中に加へたり。チール會議の司會者ケサレアのユセビウスはその學識經驗に期待し得るよりは多く感情に奔り術に乏しく、その多數の徒黨は殺人專虐の名を列ね、稠衆環視の中に

害を受けざるアルセニウスを生きながら示さんと好機を待ちしアサナシ
ウスの忍耐は益敵黨の喧嘩を加へき。但し以外の罪案はアルセニウス
案の如き明白なる答辨を得ずと雖も、なほ聖餐杯を毀ちしといへる村落に
は元來寺も祭壇も聖杯も實在せざりしとは證明し得可し。然れども心竊
に敵の犯罪と處罰とを決定せるアリウス派は、裁斷の形式を具して自家の
私曲を掩はんとし、宗會は六使節を派して現場を調査せしめしに、埃及の卑
渺之を峻拒せしにぞ爭議益沸騰せり。使節のアレキサンドリアより歸
るや、宗會の多數は埃及大教正の貶黜放謫の宣告を決し、垢辭罵言を列ねし
宣言を皇帝と加特力教會に致し了るや、直に恰も基督の靈域に赴く神聖な
る巡拜者の如く温篤敬虔の態度に復せり。

然れども宗教裁判の不公平はアサナシウスの屈從によりて、否出廷によ
りてすら承服されず。大教正は三三六年(皇帝に真相を知らしむる大膽の
舉に出で、チールにて最後の宣告發せらるゝの前、皇都に向つて開帆せんと
せる一船に搭乗せり。公式の謁見は防止回避さる可ければ、アサナシウス

アサナシ
ウスの第
一流談

は入都を隠し、附近の離宮より還幸の時機を待ちて、都中の大路に馬上の皇
帝と相見。さる不思議なる出現は帝を驚かし、侵し禁衛は煩しき此訴人
を退く可く命ぜられしが、帝の情は心ならざる尊敬の念に抑へられ、その傲
倨は正義を求め良心を醒ます卑渺の勇と辨とを畏れき。公平に寧優婉の
情を以てアサナシウスの愁訴を聽きし皇帝はチール會議を召して自辨せ
しむ。若しユセピウス派にして、新都の糧道たるアレキサンドリアの輸穀
船を止めたりとの許し難き罪案を巧に作りて、大主教の犯罪を鋪張せざり
せば、その計畫は失敗したらむ。皇帝は埃及の平和は民衆の領袖を去りて
得可きを知り、大主教の位地を空しうし、久き躊躇の後、にその發せし宣告は
不名譽なる流謫よりも寧ろ猜忌に出でし貝札彈劾のそれなりき。ゴール
の遠地とはいへ、トレエスの廷に歡迎されてアサナシウスは約二十八日を
過しぬ。皇帝の殞落は局面を一變し、少コンスタンチウスの寛大の政治は、
尊敬す可き寓客の屈枉と徳器とを深く感ぜる少主をして(三三八年)大主教
をその本土に復位せしめたり。

第七章 教會の異端分派、コンスタンチン朝の教會國家の紛擾、異教の寛容 三九四

然るに少主の殂は復アサナシウスを處刑に陥れき。三四一年、東方の皇帝たる庸弱のコンスタンチウスは竊にユセビウス派の共犯となれり。伽藍の寄進に托言してこの派の九十卑涉アンチオクに會し半アリウス派の色彩太乏しき曖昧の信條となほ希臘正教の訓條を有する二十五宗法とを編み、幾分か外見の公平を粧ひて、一び宗會によりて貶黜されし卑涉は同宗會の裁断によりて赦免されずんば舊地位に復し得ずと決定し、直にその法アサナシウスに適用し、アンチオク會議はその廢黜を宣言否確定し、埃及將を軍、フリダグ rius に命じ、文權武力を用て新主教を助けしむ。亞細亞細流の隱謀に壓せられてアサナシウスはヅチカンの聖宮に逐客として寄寓する三年、伊太利語の勉學によりても、幾もなく西方緬徒と交渉を始め得たり。その適宜の巧言は倨傲なるジュリウスを動かし、羅馬法王はその愁訴を使徒教界の特殊利害に係ると爲し、伊太利の五十卑涉の會議は一齊にその無辜を宣言せり。三年の後、享樂に耽りてもなほ正教の信仰を尊崇するコンスタンクス帝は主教をミラン宮中に徵す。金力は眞理正義を助け、コンス

タンスの宮臣は加特力教會を代表するものとして宗教會議を召集せんことを勸む。西方の九十四卑涉、東方の七十六卑涉は三四六年、兩帝國の交會にてアサナシウスの保護主の領土に屬せるサルヂカに會す。論議は忽ち口頭戰と化し、自己の安全を惧れし亞細亞黨はスレースのフィッポポリスに退き、兩會は互に他を排撃して眞神の敵と爲す。その宣言は各自の管州に於て重んぜられ、西方にて聖徒と尊まるゝアサナシウスは東方にては罪人と貶せらる。信仰の偶發的差別と國語の永久的殊異とによりて起りし希臘、羅、匈兩教會分裂は端緒をサルヂカ宗教會議に發したり。

第二の西方流論中、アサナシウスはカプア、ロヂ、ミラン、ゼロナ、パツア、アクイレイア、トレゼス等にて屢皇帝に謁見せり。三四九年、管區の卑涉は常にその謁を助け、宰司は聖殿の帳前に立ち、大主教の一樣の温厚は此等貴き目略者に證せられ、一臣従となり、一渉卑となりし恭謙の態度にその細心を示せり。斯くしてアサナシウスはコンスタンチウスの過誤を嘆き、奄豎とアリウス派との罪惡を訴へ、加特力教會の不幸危難を説き、コンスタンクスに父帝

の熱心と光榮とを競はしめんとす。帝乃正教の爲に歐洲の武力財力を傾けんと宣し、斷乎として書を同胞コンスタンチウスに致し、若し直にアサナシウスの復位を許さずんば、親艦を發し兵を派して之をアレキサンドリアの舊位に復す可しといへり。然れども性質上恐る可きこの宗教戰はコンスタンチウスの應時の聽從によりて防止され、東皇帝は嚮に自迫せざる一臣徒と和解せり。帝が相踵で三び震翰を下し保護眷遇を最強く保證し、その舊地位に復し、主要なる朝臣をして帝の誠意を保證せしむるまで、アサナシウスは敢然として動かざりき。震翰の意は、アサナシウスの與黨を召還しその特權を復し無罪を宣しユセビウス派の時代に行はれし不正當の行事を悉く公記より刪去す可しと埃及に嚴命せるにて更に明にせらる。正義の要求し得る、否禮義の要請し得る、所有満足と安全の與へられし後、大主教は徐にスレーズ、亞細亞、叙里亞の諸州を経て東し、到所に迎ふる東方卑涉の忠誠はその洞察を暗まし得ずして輕侮を買へり。大主教はアンチオクに於てコンスタンチウスに見へしが温和なる固執を以て帝の

アサナシウスとサマタスとの抗争

歡迎と異論とを支へ、獨立帝王の口にす可く正しく且温厚に見へし、帝國の諸市域にその派の同様の寛容を許せばアレキサンドリアにもアリウス派の一寺を置く可しとの提案を拒みき。大主教の歸府は一種の凱旋なりき、不在と處罰とは府民をして之を尊崇せしめ、勵行せしその權力は更に確立し、その名聲はエシオピアより不列顛に至る全基督教世界を掩へり。然れども君王をして已むを得ずして屈せしめし臣従は到底永く眞の赦免を期待し得ず。コンスタンスの悲劇的運命は(三五年)アサナシウスの寛大にして有力なる保護者を奪へり。コンスタンスの暗殺とその唯一の生存せる同胞との間に起りし三年に亘りし帝國の内亂は、加特力教會の休息期にして、個人的勢力を以て必要なる一州の動搖を鎮壓せる一卑涉の交誼は、兩敵黨の求むる所なりき。教主は後にその修交の爲に罪を得し、僧主の使節を引見すれば、コンスタンチウス帝も亦敵の流言に拘らず、自死せる同胞の感情と皇位とを繼承せることを屢々その所謂親愛する師父尊敬す可きアサナシウスに言明せり。埃及主教は感謝と人情の爲にコンス

タンスの不時の災厄を憐みマクネンチウスの罪惡を惡みたりと雖も、また
コンスタンチウスの懸念は唯自己の安全の爲にして、正義の成効に對する
熱誠は恐らく何時しか冷却せんとを知られり。アサナシウスの破滅は今や
既に輕佻なる君王の權勢を濫用する少數卑劣の執拗忿恨より來る暗裏の
憎怨に非ず。君王自久しき鬱屈を發して私怨を報ぜんと決意し、捷利の冬
アレクシオスに在るや、敗亡せるゴールの僭主よりも一層厭ふ可き敵に向ひぬ。
皇帝にして國內の最名聞あり有徳なる市民を急に誅殺せんとせば、殘忍
なる上命は公然暴を行ひ明に不正を敢てする有司の手にて猶豫なく執行
されむ。然るに民望を負へる一卑劣の處罰に細心と猶豫と困難とを感ぜ
しは、三五三乃至三五五年、以て教會の特權が既に羅馬政府に秩序自由の觀
念を復活せしを世に示せり。チール宗教會議が宣言し東方卑劣の大多數
が署名したる宣言は未曾て明に撤廢されず、一び同胞の裁斷によりて教職
を奪はれしアサナシウスが爾後の行動は悉く不法とも犯罪的とも謂ひ
得可し。たゞコンスタンチウスをして羅甸卑劣の贊同を得るまで宣告の

アレクシオス、
ミランの
會議と
アサナシウスの

施行を得ざらしめしは、埃及大主教が西方教會の歸向より得し確固有力の
援助の記念ありし爲のみ。皇帝の宗教的交渉は二年を要し、それと一臣從
との間に横たる緊要事案は先づアレクシオス會議に於て、後に約三百卑劣より成
るミラン大會議に於て、嚴肅に討議せらる。參會者の清義はアリウス派の
論議奄豎の權威權を抛ちて報復を買はんとする君主の威壓とその臨御
によりて漸次に動かされき。憲制的自由の最確實なる兆候たる誘惑は連
りに行はれ、名譽賞賜特權は宗教的投票の價値として授受され、アレキサン
ドリヤ大主教の處罰は加特力教會の和平統一を復し得る唯一方策とされ
き。されどその領袖のため主義のためにするアサナシウスの與黨なきに
非ず。此徒は男兒的精神を以て公論に於てまた皇帝との私議に於て宗教
と正義との恆久的義務を維持し、君寵の希望も君認の畏怖も無辜にして尊
き欠席の一同胞の處罰に賛同せしめ得ずと揚言せり。またチール宗教會の
不法式の宣言は皇帝の勅旨アレキサンドリヤ大卑劣の推立最喧囂なる反
對者流の沈黙若しくば廢棄によりて自撤廢さるゝこと既に久しとの理由

を述べたり。また大主教の無罪は埃及の全卑沙によりて證せられ羅馬サ
ルチカ兩會議にて羅甸教會の公平なる裁斷によりて認められしを説けり。
而して幾年かその地位名聲皇帝の信任を得しアサナシウスが今にして復
最根柢なき法外の譴責を辨折す可く召喚さるゝの難きを憐れり。この
徒の言は明に行は正しかりしも、全帝國の眼を一卑沙の上に注がしめし
此永く執拗なる爭議に於て、教界の諸派は唯ニケア信條の不撓の勇將を擁
護するか排除するか。最利害的打算の爲には眞實と正義とを犠牲に供
するを辭せず。アリウス派はなほ曖昧の語句を用ひてその眞情實意を隠
蔽するを利とせるも、民望を負ひ總會の宣告を有せる正教の卑沙は機會毎
に而して特にミランにて大アサナシウスの罪案を詰問せんとする前に、敵
黨は自異端の嫌疑を清うせざる可からずと主張せり。

西方正教
卑沙の流
議(ヘリベ
ス)オリウスと

然れども正理の聲は若し正理果してアサナシウス側に在りとせば、多數
の喧囂に制せられ、アレクサンドリアの大卑沙が東西
教會の裁判によりて嚴正に罪せられ廢せらるるまで解散せざりき(三五五年)。

反對者は宣告に署名し敵黨の魁首と宗教的團體に合一せんことを要求せ
られき。缺席の卑沙には有司認諾の式書を送致し、私説を挿んでアレクシ
ラン會議に服従を拒みし者は、直に悉くカトリク教會の宣言を實施する皇帝
によりて放逐せらる。その重なるは羅馬のリベリウス、コルドヴのオシウ
ス、トレゼスのパウラヌス、ミランのデオニシウス、エルセルレのユセビウス、カ
リアリのルシファ、ポアチエーのヒラリー等なり。帝都を司配するリベリ
ウスの顯要の地位、大コンスタンチンの眷顧を得ニケア信條の父たるオシ
ウスの徳望經驗は、此徒をして羅甸教會の首領たらしめ、その屈従も反抗も
恐らく他の緇徒の範たりけむ。帝の羅馬コルドヴ兩卑沙を屈従する度々
の企畫は暫く効なかりき。西班牙僧は六十年前帝の祖父マキシアンの下
に受難せし如く、今また帝の下に迫害さるゝを辭せず。羅馬の僧は帝の面
前にアサナシウスの無辜と自家の自由とを主張せり。そのスレーイスのベ
レアに放逐せらるゝや、旅費に給せられし巨額の金を返送し、帝と奄豎とは
之を以て兵衆卑沙に拂ひ得んと曰ひ、以てミラン廷を嘲る。然れどもリベ

リウス、オンウスの決意も流涕禁錮の難苦の爲に終に屈せり。羅馬の僧は或有罪的屈從によりて歸西を購ひ、後時期に應ぜる改悛を以て罪を償へり。コルドプの卑劣に暴力を用ひて心ならざる署名を強ひしは、百歳の高壽恐らく氣力を銷磨せしならむ。アリウス派の汚れたる捷利は正教の或者をして嘗て基督教の爲に大功ありし此不幸なる老僧に無慈悲なる峻烈を加へしめき。

リベリウス、オンウスの敗挫は尙不撓の誠心を以てアサナシウス派とその宗教的信仰を固持せる他の卑劣の確信に、一層の光輝を生じたり。敵の明白なる悪意は此徒に相互の慰藉勸言を奪ひ離隔して遠州に謫し、特に帝國中の最不良の地を撰びて謫地と爲す。而も此徒はやがてリビアの荒漠もカッパドキアの曠野も、アリウス派の卑劣が神學上の憎惡を飽くまで満足せしめ得る大都名市よりも居り易きを知れり。正義と獨立の自覺により歸依者の稱賛訪問書牘喜捨により、また幾ならずしてニケア信仰の敵黨の分裂を見しことによりて、此徒は慰藉を得たり。コンスタンチウスの感

アサナシウスに對する謀略

情の移り易き、微細の失錯によりて基督教信仰の旌旗を抛ち、父子同體の辯護者も肖像の主張者も肖似を拒みし者をも均しく罪せり。反對説によりてともに放謫されし三卑劣は同じ謫地に會して、未來の幸福によりて決して償けれ得ざる現在の苦楚を喫する對敵の盲信を相憐れみ相罵れり。西方の正教卑劣の癡黠放謫はアサナシウスの破滅の若干の前程たり。朝廷は教正をアレキサンドリアより逐ひその民望を博せる給與を停めんと、密に奸策を弄する二十六ヶ月に及べり。かくて埃及教正にして羅甸教會に背かれ絶たれて悉く外援を失へる時(三五六年)コンスタンチウスは二特使を派してその放逐令を口達し施行せしむ。その與黨舉りて此宣告の正しきを認むれば、尙帝の敕文を下すに憚りし唯一の理由は、人民にして若し武力に訴へて教父の無辜を擁護せんには、帝國第二の大都とその最富饒の一州とを危殆に陥れんを恐れしに在り。蓋し斯る極端の警戒はアサナシウスに、聖主の一視同仁ともまた曩時の宣旨とも相容れざる可き勅旨の眞偽を争ふ可き口實を與へたり。埃及の官憲は宗教的地位の辭去を教正

に勸誘若しくは強制する能はざれば、更に聖旨を明にするまで所有行動所
有敵對を中止す可きの約をアレキサンドリアの民間領袖に結ばざるを得
ざりき。この温和なる外見によりて加特力教徒は虚偽の安全に欺かれ、そ
の間に上埃及利未亞の諸軍は竊に命を承けて教熱の爲に屢亂を作す都
城を圍む可く否寧ろ襲ふ可く急に進めり。海とマレオチス湖とに挟まれ
シアレキサンドリアの位置は軍隊の接近上陸に便にして城門を閉ぢ要地
を占むるが如き何等有利の手段を講ずるの間を與へずして早くも府城の
中央に入り。前約訂結の後二十三日の中夜埃及公シリクスは武装攻
撃に耐ゆる兵五千を將て大卑涉が僧俗の大衆と夜禱を行へる聖セオナス
寺の不意を襲ふ。神聖なる寺院の門戸は猛烈の攻撃に耐へ得ず紛擾と流
血の慘禍は直に之に伴ひしが死屍と武器が翌日加特力教徒の手に證據を
遺すやシリクスの一擧は絶對の征服よりは寧ろ成功せる侵入と見られ
き。他の諸寺院も亦同じ暴擧に逢へり、少くも四ヶ月間アレキサンドリア
は緇徒の敵對に刺戟さるゝ、濫兵の暴行に委せらる。信徒の多數は殺され、

その死は報復されずして殉道の名を博し得可く卑涉不勒斯波得は殘忍な
る凌辱を蒙り、神聖處女は裸にされ責められ辱められ富戸は掠略され、教
熱の假面の下に快樂食婪私怨は無罪を以て許容され稱賛を以て満足され
き。尙若干の數を有せる一不平等たりし府中の異教徒は輒く説服されて
畏敬せし卑涉に背く。或特殊の眷遇を期しまた叛亂の連累を恐れアサナ
シウスの後任に擬せられし有名なるカッパドキアのジョージに應援を約せり。
この僭奪者はアリウソ會議より神聖にされし後、今回の一擧を遂行する爲
に埃及伯に任せられしセバステアンの武力に頼りて法位に昇れり。暴虐
なるジョージは權力の獲得行使の爲に宗教正義人道の法則を蔑視し、都中
行はれし暴施濫行と同じ光景は埃及の九十以上の宗教市に再現せり。成
功に乗じてコンスタンチウスは臣僚の行爲を嘉し、熱烈なる震翰を公にし
て、雄辯を以て盲信の歸依者を惑はし、民望ある僭主よりアレキサンドリ
アを救済し得しを祝し、新撰の卑涉最尊敬す可きジョージの功德を誦張し、ま
た都府の恩主としては自亞歷山大王に超ぐと誇れり。而も帝は法を遁れ

て罪を自白し死を免がれたる惡僧アサナシウスの餘黨は火と劍とを以て飽くまで追及す可き決心を嚴達せり。

アサナシウスは實に至難の危急より免れき、此異人の行爲は予輩の注意に價す。聖セオナス寺がシリアヌス軍の侵入に逢ひし夜、高座に坐せし大卑沙は從容威儀を正して一死を待ちたり。憤厲の喊聲恐怖の叫號に會衆の熱信の遮らるゝ間に、教正は戰慄せる衆徒に向ひ、倨傲不信の埃及の僭主に勝ちしイスラエルの神を頌せるダブドの聖詩を讀誦して、宗教的自信を示さんことを勸む。門戸は終に破る、箭は會衆の中に雨飛す、白刃を提げし軍士は聖院に亂入し、恐ろしき甲冑の光は祭壇を繞れる聖燭に輝く。アサナシウスはなほその身にすがる僧侶長者の切願を顧みず、尊くも教會の安全に終結するまで座を立たざりき。夜の暗黒と混亂とは大卑沙の退去に便なり、激昂せる群衆の浪に押され、地上に仆されて一時失神せしも、尙能く不撓の勇を復し、アサナシウスの首級は最皇帝の感賞に値すとアリウス派の嚮導に教へられし士衆の熱心なる搜索を免れ得たり。この瞬時より埃

アサナシウスの態度

及の教正は敵の眼底より逸し去り、及び難き暗冥裡に匿るゝこと六年に上れり。

アサナシウスの遺

深敵の專制力は羅馬世界の全局に満てり。君王は憤慨して至切の震翰をエチオピアの基督教諸酋に下し、大地の最遠の際涯よりアサナシウスを驅逐す可きを命す。諸伯諸統領諸護民官全軍隊は一卑沙一亡命者の追求の爲に絶へず用ひられ、文武の官憲は勅旨を體して警戒を嚴にし、生死の別なくアサナシウスを致す者には重賞を約し、敢てこの國敵を保護する者には峻刑を擬せり。然れども此時テバイスの曠野には主僧の命を君王の令よりも重しとせる野蠻なれども、從服を解せる狂熱の一民族あり。アントニイ、パコミウスの多數の徒弟は亡命の教正を師父と仰ぎ、その最峻烈なる宗規を嚴守せる忍辱を頌し、その口より漏るゝ一語をも天來の神智と信じ、祈禱も斷食も夜拜も、眞實と無罪とを擁護する爲に盡くす熱心と冒す危難とに比すれば、功德少しと爲せり。埃及の寺院は諸山巔若しくはニール河島の閑寂の地に在りて、タペンの聖角は大部分は附近の農夫なる強力決志

の數千の僧侶を集むる周知の信號なり。力抗し難き軍隊その隠棲に來り逼れば、此徒は黙して首を處刑者の前に伸ぶるも、如何なる拷掠も、一び緘黙を誓ひし秘密は決して何人よりも得能はざるまでに埃及魂を固持す。アレキサンドリアの大卑涉は、その安全の爲に一命を賭せる此一樣に訓練ある群集裡に身を投じ、危難迫れば此徒の手にて甲處より乙處に移され、迷信の暗冥が鬼神怪物の棲地となしたる恐る可き漠域にまで達せり。斯くて唯コンスタンチウスの一生と與に終る可きアサナシウスの隱遁生活の大部分は、護衛となり記室となり使者となりて忠實に奉仕するこの僧侶社會に送られしが、なほ加特力教徒とは更に親密の連絡を維持する必要ありとて追捕の弛む度に、教正は曠野漠中より出で、アレキサンドリアに歸り、故舊信徒に身を托せり。その諸種の冒險は一條の興味ある傳奇の題目たり得べし。或は一乾泉に匿れて一女奴の密告を危くも免れしとあり。或は妙齡二十豔美全府に鳴りし一處女の深窓に隠れしことあり。數年後に此美人の語る所に據れば、中夜怪しげなる便服を着し大卑涉の匆忙として來

り天意によりて保護を求むるに吃驚せり。敬虔なる處女は直に應諾しその細心と勇氣とに信頼せる神聖なる要求を受けぬ。處女は何人にも諮らずして直にアサナシウスを己の深房に導き、友情敬意を以て安全を圖り、危難の去るまで書籍食物を供し、その足を洗ひ、通信を處理し、性來最清白なる可き一聖徒と風姿最人を迷はすに足る一婦人との親しくも淋しき交際は、巧にも嫌疑の眼より避け得たり。處刑放逐の六年間、アサナシウスは屢この美しく信頼す可き友を訪へり、そのリミニ、セレウシアの兩會議を見たるといふ正式の宣言は、予輩をしてその私に會場に臨みしを信ぜしむ。親しく友と會商し、敵の分裂を見且圖らんことは、細心なる政客にとりて洵に大膽にして危険なる企圖たり、アレキサンドリアは地中海の諸港と通商航海の連絡あればなり。敵の近つき得ざる隱棲に潜みて、不撓の教正はアラス派の保護主に對して攻勢的戰鬪を續け、時に應ぜるその述作は力めて流布し熱心に讀まれて、正教派の統一刺戟に寄與せり。その皇帝に致せる公牘には時に帝の温厚を頌せるも、また時に秘密の罵辭を以て、コンスタン

チウスを庸主悪王、皇家の刑手、共和國の僭主、教會の非基督と爲せり。その盛時にはガルススの暴を罰し、シルヴヌスの叛を平げ、ゼトラニオの頭より冠を奪ひ、マグネンチウスの軍を戰場に破りし捷主も、今や眼に見へざる手より癒し難く復し難き一創痍を受けたり。コンスタンチン大帝の子は、宗教の爲には政權の最峻烈なる努力に抗敵し得る主義の力を味ひし最初の基督教君主なりき。

第四節 アサナシウス失御後の基督敎界の動搖

アサナシウスと、その教義の眞正の爲に否少くともその自信の把持の爲に虐待されし幾多の卑劣の處刑とは、アリウスの分離派に盲従せる者を除けば、全基督教徒の輕侮不満を招けり。人民は忠誠なる牧師を失ひて外人の代りてその椅子に倚るを悔ひ、撰擧權の侵犯されしと、その人を知らず主義の疑ふ可き僭主に服従を強ひらるゝとを嘆く。加特力派は公然分離を示し又は全然交を絶ちて、自己の教主の罪惡異端に連累せざるを天下に公

アリウス派の卑劣

表し得。先此手段を取りしはアンチオクにして、その例は直に基督敎世界に流布せり。三位一體の光榮を顯揚せる頌詩は甚美しく而も内容の變化を受け易く、正教異端の信條の實質は反語と正語との差によりて表明せらる。相互唱和と更に正規の唱歌は、ニケア信條を奉ずる敬虔活潑の二俗人、アラブアヌス、デオドルスによりて公式に輸入され、その指導の下に附近の曠野より出でし衆僧訓練されし歌手はアンチオクの伽藍に應至し、神子、聖靈の光榮は勝ち誇りて齊唱され、加特力派はその教義の純正を以て、尊敬す可きユスタシウスの位を篡ひしアリウス派の教正を罪せり。讚美の唱歌に現れし同じ熱誠は、更に細心なる正教派を驅りて不勒斯波得主宰の別種分離の會合を組織せしめ、放謫されし卑劣の示寂まで新卑劣の撰擧尊信を許さざらしむ。朝廷の變は僭篡者の數を加へき、コンスタンチウスの治世の下に、各自の信徒の教法を行へる二三、甚しきは四卑劣、屢一都府に争ひ、互に教會の俗權を得喪するあり。基督敎の濫用は、羅馬政府に暴政、叛亂の新原因を惹起し、教争の激烈は俗世間の黨派を増し、靜に歴代皇帝の

第四節 アサナシウス失御後の基督敎界の動搖

主羅馬の教

交替を傍觀し得し府民都人をして、自己の生命財産が民教の利害と連關するを想像せしめ經驗せしむ。羅馬コンスタンチノブル兩都の例は、コンスタンチンの諸子の治世に於ける帝國の情勢と民心の歸趣とを表し得可し。

一。羅馬の教主は、その地位と教義とを保持する限、大衆の熱心なる歸依に保護せられ、異端君王の懇願威嚇寄進を拒絶し得たり。奄豎が私にリベリウスの放謫を宣告せし時、紛擾の懸念はその實行に最上の注意を致さしめき。都城の八方を圍み、謀略若しくは武力を用ひて卑涉を生擒せんことを統領に命ず。命は奉ぜられ、夜半最大の困難を以て府民の混迷が激怒に變ずる前にリベリウスをその力及ばざる地點に移す。教主スレーに諂せらると知るや、大會は開かれ、羅馬の僧侶は決してその卑涉に背かず、奄豎の勢を借りて俗人の宮中に撰ばれ、神聖とされし僭主フリクスを決して承認せずと誓へり。その敬虔なる頑守は二年を経て毫も動かず、コンスタンチウスの羅馬に幸するや、上世自由の遺風として親しく皇帝に馴るゝ特權を有せる府民は帝に逼り來れり。議官と最名譽ある府民の多數の夫人は、

その夫を説きてリベリウス黨たらしめし後、婦人の手によれば危険少く成功多き使命を實行す可く勸められぬ。帝は富貴を衣飾に表せる此等巾幗の使節を寛待し、世界の最遠の僻境まで敬愛せる牧師に追従せんとする決意を賞揚し、リベリウス、フリクスの兩卑涉が平安に各自の教徒を司配す可きを允許せり。然るに和解の理想は當時の實行にもまた感情にも相應せざりしとは、帝の勅答が羅馬の圓戲場に公然朗讀せらるゝや、斯くまで有理解の計圖も輕侮嘲笑を以て拒絶されしに觀る可し。競馬の決勝の瞬間に發する熱烈は今や異りし題目に對して發し、數千人の叫喊は圓戲場に反響せり、二神、一基督、一卑涉と。リベリウスに對する府民の熱情は言語に止まらず、帝の去るや直に暴發せる危険なる動亂は、帝をして放謫の僧の屈從を容れて之を皇都の全地位に復せしめき。その對手は若干の抗爭効莫く、帝の使命と反對派の武力との爲に羅馬より逐はれ、フリクスの與黨は無殘にも街上公席混堂否寺中にてすら殺戮され、基督教の一卑涉の歸來は羅馬の面上にマリウスの虐殺シラの報復の恐る可き光景を復現しき。

第七章 教會の異端分派、コンスタンチン朝の教會國家の紛擾、異教の寛容 四一四

二。フラビア家の治世、基督教の急速の進歩に拘らず、羅馬アレキサンドリア其他帝國の大都城には、なほ不信徒の有力なる一派ありて、基督教會の興隆を猜み、その神學的爭論を劇場に於てすら嘲笑せり。獨りコンスタンチノブルは信教の懷裏に生れ育まれき。東方の帝都は未曾て偶像の崇拜を以て汚されしことなく、全都の民は他の人間より當代の基督教を區別する教義徳性感情を深く會得せり。アレキサンダーの寂後、パウルトマセドニウスとはその法燈を争へり。熱誠と器略とは兩者ともにその競望せる名譽の地位に適し、マドセニウスの道徳は格外ならずとするも、對手は先に撰ばれ且一層正教に近きの利を有せり。パウルがニケア信條に對する堅固なる執着は、宗曆中に聖徒殉道者と比肩するを得しも、爲にアリウス派の憎惡を牽けり。十四年間に五び位を失ひしも、その克復は概ね君王の允許によらずして教民の暴力に頼り、マセドニウスの權勢はその示寂に及びて始めて確立せり。不幸なるパウルはメソポタミアの漠中より鐵鎖に繋がれてタウルス山の荒涼地に引き行かれ、暗き獄中に投ぜられ、絶食六日の後終

にコンスタンチウスの一臣フィリップの命によりて縊殺されき。新都を汚す最初の鮮血は此教争によりて濺がれ、府民の猛烈頑迷の動亂の爲に、兩派の死者甚衆し。パウル放謫の命を承けしは騎軍總管ヘルモゲネスなりしが、その實行は身の破滅なりき。加特力教派は卑劣擁護の爲に奮起し、ヘルモゲネスの邸宅は焼かれ帝國最高の武官は踵を以てコンスタンチノブルの街上を牽かれ、死尸は暴徒の凌辱に委せらる。之を見し禁軍統領フィリップは同様の命を奉ずるや一層の注意を致し、最穩に名譽ある條件にて皇宮と海との私道あるゼウクシプスの混堂にパウルを招く。園階に豫め懸せし一船は直に帆を掛け、府民未知らざる中に、卑劣は既にテッサロニカに向へり。間もなく宮門は開け、僭篡者マセドニウスが高車に乗り、統領と並びて拔劍の衛兵に圍繞されしを見し民衆は驚けり。軍隊は直に伽藍に向へば、アリウス加特力兩派の教徒はその要地を占領せんと突進し、その騷擾に命を墜す者三千百五十。正式の軍隊に擁護されしマセドニウスは捷利を得しも、その治期は喧擾動亂相望み、争抗と最縁遠く見ゆる原因も紛擾を醸成し亂

第四節 アサナシウス失御後の基督教界の動搖

火を煽ぐに足りき。大コンスタンチンの遺骸を納めし神廟破壊したれば
卑劣は之を聖アカシウス寺に移せしに、この細心敬虔の行動は三位一體説
を奉ずる全派より瀆神冒聖と目されき。暴徒は忽兵器を執り、靈域は直
に戰場と化す。前廊廷室に滿ちし鮮血の流は寺前の井に溢れたりとは、宗教
史家の形容に非ず事實として傳ふる所なり。但この紛擾を以て單に教義
に起ると爲す記者は人性に就きて知識の不完全を暴露するものなりと雖
も熱誠を誤用せる主旨濫暴を粉飾せる口實が、他の場合にはコンスタンチ
ノブルの基督教徒の憤恚に次ぐ可き痛悔を壓倒せしとは認めざるを得ず。
毎に必ずしも犯罪反抗の干犯を要せざるコンスタンチウスの残忍放恣
の情は、君主の權能と宗教とに反せる國都の動亂とその情勢とに憤激せり。
刑死流謫收没の普通刑案は私見的峻厲を以て剛行され、ヘルモゲネスの加
害者としてコンスタンチノブル城門に首を懸けられし二記室一誦者一副
執事は今に至るまで希臘人の尊崇を博せり。セオドシウス法に規定せる
地位に當り得ぬ加特力教徒アリウス派の卑劣特にマセドニウスと交るを

アリウス
派の暴戻

拒める者は、コンスタンチウスの勅旨によりて宗教上の特權と基督教徒た
る權利とを遞奪され、教會資財の抛棄を強ひられ、都中の集會を禁ぜらる。
スレーズ、小亞細亞諸州に於ける此不正法の實施はマセドニウスの手に委
ね、文武諸權をその令に托したれば、三肖肖體論の支持の爲に此半アリウス
派の僭主の行ひし暴戻は、コンスタンチウスの命に過ぎて、帝の治世を汚せ
り。教會の聖餐はマセドニウスの招呼を拒み、教義を嫌へる犧牲に施行さ
れ、洗禮は朋友兩親の手より強て離れし婦人幼兒に對して行はれ、陪食者の
口は木機を以て開かれ、神聖なる麵食は強てその喉に填され、優しき處女の
胸は紅熱の卵殻を以て焼かれざれば無殘にも重板を以て壓せらる。コン
スタンチノブルと附近のノブチアヌス派は同體説を執固せるために加特
力派と混同され得。パフラゴニアの大地方は殆ど全く此一派なりと知り
しマセドニウスは之を教化せざれば、則絶滅せんと決意し、宣教の力少きを
想ふや兵四千を發してマンチニウム地方を自己の教區に併吞せしむ。
ノブチアヌス派の農民は失望と教熱とに奮起して大膽にも征軍に抗敵し、

パブラゴニア人多く之に死せしもなほ鎌斧を武器とせる烏合の衆は能く羅馬軍を撃破し、不名譽にも遁走せる數人を除けば、四千の兵は戰場に墜れたり。自己と奄豎との感情の奴たりし一皇帝の世に帝國殊に東方の蒙りし神學的擾亂の或ものは、コンスタンチウス、、ロジュリアン帝。の繼嗣者によりて簡明に記されき。「多數は執へられ、刑せられ、而して放謫せらる。異論と目されし者は悉く虐殺されき、特にキジクスに於て、サモサタに於て。パブラゴニア、ピチニア、ガラチアその他諸州の市邑は荒らされて全く破毀されたり」。

サーカムセリオンの叛亂とその狂熱の猛

アリウス派の爭焰帝國の眞髓を焼く時、サーカムセリオンの名稱の下にドナツス派の力と諍とを形成せる蠻的狂熱の特殊の敵は亞非利加諸州を荒したり(三四五年其他)。コンスタンチンの
f. Circumcellions は亞非利加ドナツス派の一流にて、市邑を巡行し負債を免し奴隷を釋し、自由を宣傳す。Circumcellio. は打ちまわるの義なり。
苛法峻令は不平反抗の精神を煽り、その子コンスタンスの教會の統一を圖らんとせし努力は初に分離を生ぜし相互の反感を増し、勅派の兩使節パウ

ル、マカリウスの用ひし武力と誘惑とは分離派に使徒の訓言とその自稱後繼者の行爲との間に明白なる相違あるを示せり。スミチア、マウレタニアの村落の農夫は未だ十分に羅馬法律の權威に屈從せず、十分に基督教の信仰に歸依せずして、ドナツス派の教師を盲信狂崇せる獷族なり。卑涉の放逐教會の撤廢集會の停止を憤り、通常武力によりて擁護さるゝ司直官の暴行を同じく暴力を以て排斥し、その爭抗の間に流しよ或民望ある緇流の血を見るや、神聖なる殉道者の爲に報復せんと競ふ。刑吏の峻苛は時に却りてその運命を逼り、偶然の紛擾に犯しよ、罪科は犯徒を失望と動亂とに陥る。斯くて郷里を逐はれしドナツス派の農民はゲツリア砂漠の境に集りて、恐る可き夥黨を爲し、勞役を抛ちて遊惰劫掠を生活となし、宗教の名を假りて之を神聖にすれど、その派の教師は多く之を咎めず。その魁帥は聖徒の君長と號し、鎗劍を得る十分ならぬその武器は偉重なる棍棒にして、之をイスラエリテと名け、神に幸あれといふその戦聲は防備なき亞非利加諸州を戦慄せしむ。始その侵掠は必要に逼られし辯解の色ありしも、倏忽にして自

給の度を超えて貪婪の境に奔り、火を縦ち物を奪ひて州縣に虐威を奮ふ。耕耘の業政治の法は爲に廢し、人間の原始的平等を復し、社會の流弊を改善せんと揚言せるサーカムセリオンは、奴隸負債者の爲に安全なる避難處となれば、その徒は聖旗の下に應至せり。反抗する者莫ければ、唯劫掠を以て自安んずるも、若し毫末だも反抗すれば、暴を用ひ人を殺し、自家の熱誠を不用意にも表せし若干の加特力僧侶はこの狂妄の徒の爲に、最野蠻の拷掠を受けたり。サーカムセリオンの精神は必ずしも抵抗力なき敵に向ふに非ず、州兵とも戦ひて時に之に勝ち、バガイの激戦にては勇闘効なかりしも、皇騎軍の先鋒を野外に攻撃せり。武器を執りしドナツス派は、漢中の猛獸に對すると同じ待遇を受けたり。捕囚は一私語を發せずして、劍により斧により、また火によりて殺され、報罰の度は急速率を以て増進すれば、益々叛徒の畏怖を加へて互に相容るゝの道絶へ

g. Camsirad また Camsirado 佛蘭西にてナント告示の撤廢の後龍騎軍に反抗せしセパンヌの抵抗派の暴徒なり。

惡狂熱はサーカムセリオンの往例を新にせるものにして、若し此ランゲド

宗教的自殺

クの狂徒は軍隊的技能に於てヌミディアのそれに過ぐとせんか、彼亞非利加の暴徒は決意の頑迷鞏固を以て此に優りき。

斯る擾亂は宗教的專制の自然の後果なりと雖も、ドナツス派の暴は假令その派中には非常の勢力ありとも、他の國他の時世には決して比倫なかる可き一種の狂迷に煽られしなり。その徒は殆んど生を厭ひて殉道を希ひ、如何なる方法何人の手に登るゝも、それは轉瞬の事に過ぎず、苟くも眞信仰の光榮に投じ、永劫の幸福を得んには即死す可しと爲せり。乃或時は多神教徒の祭式を亂し、神廟を潰して、故に偶像教徒の報復の念を激厲するあり。また或時は法廷に推參して、畏怖せる判官をして直に自己處刑の命を下さんことを要請するあり。途上に旅人を要して、殉道者として己を殺さんことを求め、若し應ずれば重賞を與へん、拒まば直に之を殺さんと迫るあり。百計盡くれば日を期して、朋友同胞を會し、絶壁より身を投ずるありて、幾多の斷崖はかゝる宗教的自殺の數によりて、名を傳へらる。甲には神の殉道者として推稱せられ、乙には惡魔の犠牲として、嫌惡せらるゝ、此等無謀

の狂熱の行爲を見れば、公平なる哲學者は其處に猶太民族の性情に本きし不撓の精神の勢力とその最後の濫用とを發見し得む。

内部分裂

教會の平和を紊り捷利を汚せし内部分裂三一二乃至三六一年の簡單なる話説は一異教史家の言を確證し、尊き一卑劣の嘆を是認し得む。則、ミアヌスは經驗によりて基督教徒の相互の敵對恰も猛獸の人に對して咆哮するが如きを知れり。グレゴリー・ナジアンゼンは教爭によりて天の王國は混沌、風雨晦暝、地獄の相に化せりと最痛ましく嘆けり。峻烈なる黨派的記者は總ての徳を自己に歸し總ての罪を對敵に歸し、天使對惡魔の戦を描けり。予輩の一層冷靜なる理性は左までに純粹完全に不徳若しくは清淨なる怪物を認め得ず、正教の名を取り異端の號を得し兩敵黨に同等の否少くも差別なき善惡を歸せんとす。蓋し同一宗教と同一文化に教育され、現實二世の希望と畏怖とに同率の均衡を有する兩派は、孰も罪なき過失、眞摯の信仰、利病の實行あり。その感情は相似たる目的の爲に激昂し相互に朝廷の眷遇と教民の輿望とを濫用するを得。アサナシウス、アリウス兩

コンスタンチンの對宗教政策

派の純正哲學的論旨はその道徳性に影響せず、兩者はともに福音書の純粹簡單なる訓條より生ぜざる他を納れ難き精神を以て活躍せしのみ。

正しき自信を以て自宗の歴史に政治的哲學的の形容詞を用ひし近代の一家は、絶對に異教の信仰を禁制し若干の臣民をして傳説神廟其他何等の宗教なからしめしコンスタンチンの一法令を羅馬帝國衰亡の一因に數へざりしを以て、モンテスキューの不用意を指摘せり。所謂哲學的史家の人權に對する熱誠は、餘りに輕しくその恩主に總迫害の功を歸せし緇流の曖昧なる證據に自服せり。而も予輩は、皇帝法典の前に公布されたらんと思はるゝ此想像的法律を引くに代へて、コンスタンチンが既に改宗を隠さず帝位競望者を恐れざる時代に、古宗教の信徒に與へし震翰の原文を採るを安全とす。震翰には羅馬帝國の臣民をしてその君主の例に倣はしめんとて、帝は最切實に勧誘せるものから、尙天來の光に眼を開かざる徒は自由にその神廟と想像の神祇とを拜し得可しと宣言せり。異教の儀式を禁止せりとの報告は、賢くも温和主義として習慣僻見迷信の潛勢力を認めし皇

帝によりて公然反對せらる。勅約の神聖を侵さず、異教徒の畏怖を招かず、徐々に細心に多神教の不整理に敗頽せる組織を覆さんとせるは皇帝の方策なり。帝が時々行へる不公平の峻烈は、内は基督教徒としての熱誠に起るも、外は正義公安の美名を假れり、爲に古宗教の根柢を壞たんとせるコンスタンチンは宛もその違濫を革新するが如く見ゆ。列皇中の最賢者の往例に倣ひて、算命の秘術に重科を課し、現状に不満なる其徒の空望を激し、時に或は罪犯をも醸せり。神託を沈黙せしめて、公然その虛妄を知らしめ、ニールの女僧を廢し、白日エヌスの名譽の爲とて各種の賣色行はれしフェニシアの諸神廟を廢せるコンスタンチンは、羅馬檢察官の職責を盡くせり。コンスタンチンブルの皇都は、若干か希臘亞細亞の富有なる神廟の資費を以て起され、略奪を以て飾られたり、神領靈財を公收せり、神祇英雄の像を無禮にも崇敬せずして、好奇の眼を以て視る人民の中に移し來れり、金銀は流通に復せり、巨僚卑劣、奄豎の輩は一擧にして熱誠貪婪、怨恨を満足せしむる好機を握みたり。然れども斯る強奪は羅馬世界の一小部分に過ぎず、諸州

その諸子
の對宗教
策

は毫も現在の宗教を倒すに意なかりしと見ゆる君主前執政の横政によりて同様の劫略を蒙れること既に久しかりき。

コンスタンチンの諸子は、父帝の足跡を踏みしも熱心餘ありて老熟足らず。貪婪壓制の口實は不知不識に増加し、所有寛仁は基督教徒の爲に示され、所有疑念は異教徒の不利に解かれ、廟宇の廢閉はコンスタンス、コンスタンチウス治世の祥事の一として顯揚さる。何等か未來の禁厭の必要に代り得る一法令にコンスタンチウスの名あり。總ての地方總ての城市に於て、神廟は直に閉ざれ、守られ何人も犯さざらんことは吾曹の希望なり。總ての臣民が犠牲を停めんことは亦吾曹の希望なり。若し人斯る罪を犯さば報復の劍を味はしめよ、その受刑の後その資財を没して公用に投ぜよ。諸州の守吏にして若し犯者を罰するに怠らば、また同罪たらしめんと。然れども此大法は單に起草されて公布されざりしか、公布されしも實施されざりしかを信ず可き最強き理由なり。事實の實證と今日尙遺存せる黃銅大理石の遺物とは、コンスタンチンの諸子の世を通じて異教の公行し來れ

るを證す。東西を問はず都鄙を論ぜず、多數の神廟は尊敬され、少くも保存され、狂熱の信徒は治者の免許若しくは默許の下に尙犧牲祭式行列の奢侈を樂めり。この残忍なる上諭の想定されし時日より後るゝと約四年に、コンスタンチヌスは羅馬の諸廟に參詣せしに、その端嚴の相貌前世の諸帝に譲らずとは一異教辯客の記せる所たり。シマクス曰く、「この皇帝は巫女ウイジンの神聖不可犯の特權を認め、羅馬の貴族に宗教的威嚴を授け、公祭犧牲の費を支出する慣例を許せり、帝は自異りし一宗教に歸依せるものから、決して帝國より古代の神聖なる崇拜を奪はんとはせざりき」と。議院はなほ嚴肅なる院宣を以て君主の神威を尊ぶ、コンスタンチンすら殂後にはその生前に絶ち且辱しめし神祇の列に加へられき。昔ヌマ王が創制しオーガスオスス皇帝が受領せる君主的神祇伯の尊稱、記號職權は基督教の七皇帝によりて隣踏なく受けられ、七皇帝は自歸依を宣せる宗教よりも却りてその背絶せる宗教に對してより多く、専制君主權を行ひ得たり。

基督教の
内同と異

基督教の分裂は異教の衰滅を防阻し、君王卑涉は教内動亂の罪惡と危念

とに驚動すること多くして、不信者に對する神聖戰役に努力するを少し。偶像崇拜の絶滅は基督教の解禁令の根本主義と爲す可きものから、交も廊堂に據りし教内の兩派は衰へしと雖も尙有力なる一教派の心を互に得んことを欲し、恐らく亦之を動かさんことを欲せり。權勢と流行利害と理性のあらゆる力は今や基督教側に存すと雖も、その勝勢の普く天下に認めらるゝまでは、なほ兩三世を要せり。久しく羅馬帝國に存したる宗教は古慣習よりも考察的教説に歸すること少き多數の人民によりて尙尊敬せらる。政兵の榮譽は何等の差別なくコンスタンチン、コンスタンチヌスの全臣民に授與され、智識富貴勇氣階級の若干は尙多神教に奉仕せり。議官農民詩客哲學者の迷信は各異りし源泉より出づるも、均しく神祇の靈廟に崇敬を表せり。一禁教の逼り來る捷利は何時しか此徒の熱誠を刺戟し、帝國の假定皇儲狄族の掌裡より、ゴールを救ひし年少勇膽の英雄が竊に宗祖傳來の宗教を信ぜりとの誤なき自信は、此徒の希望を甦らしめき。

第八章 ジュリアンの即位、コンスタンチウス の殞落、新帝の内政

一、ジュリアンの自立

羅馬國民が奄豎卑涉の横虐に苦しめる時、ジュリアンの名聲は帝國の各地に傳播せり、唯その聞へざりしはコンスタンチウスの宮裡にのみ。日耳曼の狄族は若き亞皇の武を知りて且尙之を恐れ、感謝せる州民はその治を祝慶したれども、その興隆に反抗する嬖臣はその徳性を厭ひ正しくこの臣民の友を以て朝廷の敵と爲せり。ジュリアンの令聞の未定まらざるや諷刺に巧なる宮廷の滑稽者流はこの術を用ひて屢功を奏せり。此徒は夙に亞皇の簡素も虚飾を免るゝ能はざるを知り、多毛の狄蠻沐猴の衣冠を以て哲學的將軍の風采を嘲り、その温順の書牘を笑ひてアカデミーの林中に戰術を學びし冥想の武人饒舌なる希臘人の空譚小説と爲せり。而も戰捷の喊

長ス タるン ジ
怖の ャンコ 対
媚チ ャンリ
疾ウス ア

聲は終にこの愚言を黙せしめぬ、フランク、アラマンニの征服者は復斯る輕侮の目標ならず、皇帝すら賤陋にも自將軍の功績を竊まんとせり。古制によりて諸州に下す月桂を以て冠せる震輸にはジュリアンの名を除き、コンスタンチウス帝親しく軍事を案配し、彼の勇を陣頭に奮ひ、彼の戰捷を奏し、狄族の君酋を生擒して戰場に彼の御前に引けりといへり。而も帝は戰場より四十日程の遠地に在り。斯る法外の小説は到底天下の信を欺くに足らず、また皇帝自己の誇負を満たし得ず。心竊に羅馬人の推讃ジュリアンの興運に伴ふを知りし帝の不滿は、眞實公明の最美しき外觀を以て惡策を粧へる諛兒の毒言を納れんとせり。此徒はジュリアンの功勳を抑損せずして、却りてその民望才略事功を認識し、鋪張し、若し不定見の群集にして傾慕を義務に轉ぜんか、若し捷軍の將にして報讐自尊の希望を以て忠誠に代へんか、亞皇の徳は直に變じて最恐る可き罪惡たらんを暗示せり。コンスタンチウスの個人的畏怖はその廟議によりて公安に對する稱賛す可き憂慮と解せられ、内實は帝の懷裡には恐らく企及し難きジュリアンの徳に對し

第一節 ジュリアンの自立

ゴール軍
に下す東
征の命令

て、竊に抱ける憎悪猜忌の情を掩ふに、稍可なる畏怖の名を以てせり。
 ドールの外見の靜謐と東方諸州の切迫せる危急とは、廷臣の巧謀に公明
 なる口實を與へたり。亞皇の兵を解き、その一身を衛り威嚴を護る忠誠の
 軍衆を召還し、萊因河畔に日耳曼の最猛獍なる狄種に捷ちし健剛の兵を波
 斯王征伐の遠征に用ひんと決せり。ジュリアンが徳を以て軍政を巴里の冬
 陣に視るの時(三六〇年四月)一護民官一記室急に來りて、彼等は實行す可く
 彼は反對し得ずとの帝旨を傳ふるに驚けり。帝旨はケルテ、ベルタント、ヘ
 ルリ、パタリアの全四軍をその名聲と訓練とを博せしジュリアンの旗下より
 離し、殘餘の各隊よりは最勇の少兵三百を簡拔し、このゴール軍の中堅たる
 大軍は直に東進して波斯役の開戦前に到着す可しといふに在り。亞皇は
 この勅旨の後果を豫知して嘆息せり。自進んで役に就きし傭兵の最大
 多數は決してアルプスを越へずと一致せり。羅馬の公共的信念とジュリア
 ンの個人的名譽とはこの條件の遵奉に約せらる。而も斯る僞囑壓制の術
 策は眞實を徳の最高とし、自由を性の至尊とせる日耳曼の獨立的戰士の信

を損じ怨を招く。羅馬人の名と權とを得し軍隊は共和國家の全防備の爲
 に編募さるゝと雖も、此等の傭兵は共和國家といひ羅馬といふ廢類の古名
 稱を聞くも冷然たり。生地なるが故か慣習によるか、ゴールの氣候と習俗
 とに固執せる此士衆はジュリアンを愛敬して皇帝を排し、否恐らく憎み、勞多
 き遠征斯波の矢石亞細亞の燒くが如き曠野を畏る。その救濟し得し國土
 を自己の國と稱し、家族故舊を防衛するの神聖にして更に直接の義務なる
 を説く。蓋しこの懸念は切迫し且避け難き危急を知るより起る。若し諸
 州の軍を撤せんか、日耳曼族は畏怖の爲に訂せし約を破る可く、ジュリアンの
 才と勇とを以てするも、唯空名の軍に將として、抗戦効なく狄軍の囚虜と
 ならずんば、コンスタンチウス宮中の罪人たる可し。ジュリアンにして帝命
 に聽従せんか、自己と其下に仕ふる大衆とを併せ失はん。而も公然拒絶せ
 んは謀叛なり、宣戰なり、皇帝の猜忌聖旨の專斷的にして寧ろ狡猾なる命
 は巧妙なる推辭をも公明なる解釋をも容るゝの餘地なく、亞皇の隸屬的地
 位は殆んど遲滯猶豫を許さず。孤獨はジュリアンの混迷を加へき、サルヌ

トは既に奄豎の憎悪によりて地位を失ひたれば、その忠誠の議に訴ふるを得ず、さればとてゴールの滅却を恐れ且慚づる臣僚の賛同によりて意見を施行す可くもあらず。適騎軍の將ルピヌスは蘇格ビクト族の侵入を伐ちて不列顛に在り、フロレンチウスは貢賦を定むるために并エンナに在り。後者は老猾の政客にて、此大事に際して責任を回避し、君主の會議に統領の參列は避く可からずとてジュリアン屢招くも動かす。その間に皇使は亞皇に迫り、若し臣僚の歸るを待たば猶豫の罪を得て處罰を免れざらんといふ。反抗し得ず、また聽順を欲せず、ジュリアンは最眞摯に、名譽を以て保ち得ず安全には辭し得ざる紫袍を抛たんとの希望を、其企圖をすら漏らしぬ。苦悶の後、ジュリアンは聽從は名臣の徳にして、君主獨り國姿の局に當る可きを認めざるを得ざりき。乃、コンスタンチウスの聖旨を實行するに必要なる命令を發し、軍の一部分はアルプスに向ひて出發し、諸鎮の部隊は各自集合地點に向へり。軍隊の移動は畏怖戰慄せる州民の群集に擁せられて容易ならず、州民は失望の沈黙さては、高聲の愁嘆を以て衆心を動かし、幼

軍衆の憤

兒を腕にせる士衆の妻は悲哀温順侮を以て夫の背去を怨む。斯る悲愴の光景は亞皇の情を動かし、多数の驛車を發して士衆の妻孥を運び、迫られし困苦を軽減し、最巧に自己の輿望と遣軍の不滿とを増進す。武装せる群衆の悲哀は倏忽に憤怒と化せり、相踵ぎて帳より帳に傳波する放恣なる私語は衆心を最勇膽なる動亂の行動に導けり、亞皇の困頓、ゴール軍の抑壓、細亞暴主の薄弱なる不徳を活躍的色彩を以て描出せる落首、謗書は遂に弘布せるも、護民官は黙過せり。この危険思潮の増進に驚愕せるコンスタンチウスの臣屬は、軍隊の出發を急がんとを亞皇に逼りしが、ジュリアンがその巴里を通過せしめず、その提案最後の會見の危険を説きし、正直なる勸告を不用意にも拒絶せり。

ジュリアン皇帝の推戴

軍隊の近くや亞皇は出で、之を迎へ、城外の野に築きし高臺に上れり。位階勳功によりて將士を區別し、臺邊を圍繞せる士衆に一場の訓旨を爲し、稱賛を以て將士の勳功を賞へ、有力にして寛大なる皇帝の眼前に活動して榮譽を得可きを勵め、直に悦んで聖旨に應答せんことを諭す。無禮なる喧

驚を以て將軍を犯さんこと、虚偽の喝采を以て自己の情を欺かんことを恐
 れし士衆は黙して答へず、少時にして各營に歸る。亞皇はまた主要なる將
 校を招請し、友人の温言を以て、その捷利の盟友に功勳に應じて賞賜せんと
 欲するも、力能はざるを謝せり。諸將宴より退きて、哀愁混迷に耐へず、敬慕
 の君主と故國とを棄つるを嘆く。乃この別離を罷むる唯一の方策を論議
 し、民情は不知不識、叛意を鑄成せり、愁嘆の理は感情によりて高く、感情は酒
 に煽られ、その進發の夕、軍衆は皆愉色を帯ぶ。中夜、劍を帯び、弓を把り、火把
 を手にせる烈性の群集は、郊外に突進して、亞皇の宮を圍み、未來の危難を意
 とせず、最後の回し難き喊聲を擧ぐ、ジュリアン皇帝と。亞皇の不安はその喝
 采に遮られしも、なほその進入を防ぎ、力能ふかぎり、一身と威嚴とを夜襲の
 群衆より回避せり。天明くるや、反抗によりて、益々熱心を増せる士衆は、宮
 中に駁入し、恭しくも暴力を用ひて、撰擇の目的たるジュリアンを執へ、白刃を
 揮ひて之を守護し、巴里街上を通過し、之を臺上に上せて、屢々皇帝と呼ぶ。
 亞皇が細心と忠誠の心とは、此謀叛の計畫に反對するを反覆し、群衆に向ひ

また個人に對して、或は哀を求め、或は侮を示し、その不朽の捷利の名譽を汚
 さざらんことを勧め、若し直に忠誠に還らば、單に皇帝より寛大自由の特赦を
 請ふのみならず、また士衆の怨恨を激成せし、聖旨の撤回をも請ふべしとい
 へり。然も、自罪を知れる士衆は、皇帝の憐れを請はんよりは、寧ろジュリア
 ンの感謝を得んとす。熱誠は見る／＼、性急に性急は憤厲と變じ行く。不
 撓の亞皇は、懇願、咎責、威嚇を反覆して、その日の第三時に及びしが、若し生を
 欲せば、帝たる可しと、幾度か迫られて終に屈せり。群衆の眼前にその喝采
 裡に、亞皇は橋上に載せられ、偶呈せられし、軍士の頸飾を以て、冕冠に代へ、儀
 式は、適度の賚賜を約して、畢り、眞偽は知らず、愁色を帯びて、新皇帝は宮室の
 深奥に退けり。

推戴に對
 するジュ
 リアンの
 心情的

ジュリアンの憂愁はその無邪思より起りけむも、その無邪思は君王の性行
 を研むるに慣れし者の眼裏には極めて疑ふ可く見らる。その活動的心緒
 は、希望と畏怖、感謝と報仇、義務と野望、名譽の愛と誹謗の恐の諸種の印象を
 受け得可し。たゞこの相関的感情の相互の輕重交錯を打算し、大衆がジュリ

アンを導き否寧ろ強ひし間に觀察を逸し得る行動の主意を決定せんことは、吾輩の企及し得ざる所なり。士衆の不平は敵の悪意より生じ、その紛擾は利害と感情との自然的結果なれば、若しジュリアンにして機會の發現の下に深計を隠くさんと試みんか、最完全なる術策も用ふる必要なく、また恐らく用ひて効なしとす可し。彼はジュピター、太陽神、マルス、ミネルヴ、その他諸神祇の前にて、推戴の前夕まで毫も士衆の計畫を知らざりきと誓へり、英雄の名譽哲學者の眞實を疑ふは愧づ可きことならむ。されどコンスタンチウスは神祇の敵なり、己はその眷寵たりとの迷信的自信は、人類の古宗教を恢復す可き天命を受けしその治世の吉兆の瞬時を希求し促進せしめけむ。隠謀の報を得るやジュリアンは暫時眠れり、後日その友に告ぐる所にては、時に帝國の靈神性急に戸際に立ちて入るを求め己の氣力野望の足らざるを責むるを見たり。乃驚き惑ひてジュピターに禱りしに、ジュピターは明白なる瑞兆を以て天意に應じ衆心に從ふ可きを示せりと。理性の常理を認めざる行動は予輩の疑念を招き予輩の推究を逸脱す。輕信にしてまた

新皇帝の
對要求の
商議的

狡猾なる狂妄の精神一び尊き心理に潜染すれば何時しかその篤實正眞の旨義を蝕し去るは常なり。

與黨の熱烈を和め、敵黨の一身を庇護し、自己の生命威嚴に對する秘計を擯くは、新皇帝が治世の初數日の用意なりき。その獲得せし地位を固執するに決しながらも、なほ内亂の不幸より國家を救ひ、コンスタンチウスの優勢の軍と戦ふを避け、叛亂忘恩の誹謗を避けんと欲す。乃武將及皇帝としての盛装にてマルスの野に出で、その學生その領帥その友侶たる此皇帝の爲に赤誠を傾くる軍衆を見、その捷利を再説し、その苦楚を嘆き、その決意を褒め、その希望を勵まし、その輕舉を戒しめ、若し東方皇帝にして對等の約を結ばい、征討の意見を抛ちて、ゴール州の安全なる領有に満足す可き誓盟を得るまで解散せざりき。かくて此意により自己及軍衆の名を以て公明温健の書牘を草し、主將ペンタヂウス、宮宰ユセリウスに授けて、東し、コンスタンチウスの返翰を求め、その意を伺はしむ。書中には穩に亞皇の稱を用ひしも、尙斷然として皇帝の尊號の確認を要求せり。自己の推戴の不合

式を認むと雖も、亦その推譲を強請せる軍隊の怨恨暴舉を或點まで是認せり。同胞コンスタンチウスの優超を誅し、毎歳西班牙馬を貢し、狄種少年の精銳を以て皇軍を補充し、皇帝撰任の忠誠なる禁軍統領を受く可きも、以て外の文武諸官の任命アルプス嶺外諸州の軍賦君權を得んといへり。また忠言正議を納れ、君王の紛抗を利する諂諛者流の詐略を斥け、共和國家の爲にもコンスタンチン皇家の爲にも均しく利益なる公明の約を訂結せんことを勧めたり。ジュリアンは此商議に於て既に有する以外を要求せず。既に久しくゴール、西班牙、不列顛諸州に行へる代理的君主權は尙一層獨立的名の下に服従さる。兵衆と人民とは有罪者の血をすら流さざりし革命を悦べり。フロレンチウスは亡命たり、ルピシヌスは捕囚たり。新政府に不満の士は兵器を奪はれて拘禁され、爲に生ぜし空職は官裡の隠謀軍衆の喧囂を厭ふ君主によりて、功績に従ひて頒任さる。

ジュリアン
の武備
と征狄

平和の商議は最精勵なる武備を伴ひ、且之によりて支持せらる。ジュリアンが直に用ふ可く準備せる軍は當代の動搖によりて補充され増加されき。

マグネンチウス動亂の殘虐なる殺戮は(三六〇、三六一年)多數の無賴寇盜をゴールに生ぜしが、此徒は信賴す可き君主の寛大なる赦免を悦び承けて軍律に歸服し、唯コンスタンチウスの一身と政府とに對して深驕の念を懐けり。時季行戦に適するや否や、ジュリアンは陣頭に立ち、クレヴァス附近に於て萊因に架橋し、分裂せる帝國の邊陲に侵寇す可しと爲せるフランク族の一部アッチェアリの不信を懲膺せんとす。この一征の困難と光榮とは行進の難に存し、一たび従前の諸君主が至り難しと思惟せし境地に達するや、ジュリアンは忽捷て、狄部に和を許して後帝はクレヴァスよりパシルに至る萊因沿岸の諸壘を精査し、特にアレマンニの手より奪回せる地方に意を注ぎ、自己の猛獍の爲に峻烈の苦を喫せしベサンソン地方を過ぎ、次の冬陣をギエンナに定む。ゴールの邊際に新壘を増して固めしジュリアンは、その屢撃破せし日耳曼族はその不在の間もなほその名によりて制御し得可き若干の望を懐く。帝が畏敬するアレマンニの唯一の君酋はヴドマイルなり。ヴドマイルは條約の信を守るが如く粧ひて、その軍は不時に邊境に侵寇す。

よりてジュリアンは親ら此君酋を驚すの謀を講じき羅馬の州守より友人として招かれレヴドマイルは、宴中忽執へられて西班牙に謫せられき。狄族の驚愕未息まざるに乗じて帝は萊茵河岸に兵を進め、また河を渡りて前四征によりて既に博せる畏怖と尊敬との深き印象を新にせり。

ジュリアンの兩使は飽くまで重要な使命を力行す可しとの旨を受く。而も伊太利イリリウムを經る途上州守の故意の遲滞の爲に行程後れ、コンスタンチノブルよりカッパドキアのケザレアに至る旅行亦遅く終に(三六一年)コンスタンチウス帝に謁見せし時は、帝は既に諸將の注進によりてジュリアンとゴール軍との行動に就きて最不利なる説を得居たりき。書牘は烈性を以て讀まれ、戰慄せる使節は侮蔑を以て退けられ、皇帝の相貌態度言語は心中の不安を表せり。ヘレナの兄と夫とを和解す可き姻親の連鎖は、屢孕みて効なく終に近くその爲に命を失ひし此公主の殞落によりて絶へたり。后ユセピナは最期までジュリアンに對して嫉妬的温情を懷きたれば、その柔情は君主の憤を和げ得たらんに、今や后亦亡くして皇帝は自情に任

商議の決

せて奄豎の術中に墮ちたり。然れども外征の畏怖は帝をして私敵の處罰を中止せしめ、自波斯の境上に向ひて進み、ジュリアンとその與黨とをして皇帝の仁恕を得る約件を示せば足れりと爲せり。よりて、亞皇は叛亂によりて得たる皇帝の尊號と地位とを明白に抛ちて從屬的臣僚たる舊地位に下り、政兵の權を朝廷の任命せる將吏に委す可く、帝の寵任するゴールのアリウス派の一卑劣エピクテツスが宣言する赦免の保證にその身を托す可きを要求せり。巴里アンチオク間三千哩を隔て、條約の商議に數月を費して効なきにぞ、ジュリアンは温恭の態度は徒に對手の誇負を長ずるに過ぎずと知るや、大膽にも生命と運命とを内戰の雌雄に賭せんと決せり。帝は御史レオナスを引見し、コンスタンチウスの倨傲なる震翰を群集に聞かせ、阿諛的遜讓を以て、若し己を推戴せる者にして應諾せば直に皇帝の尊號を辭す可しと公言す。微力なる提言は激しく默殺せしめらる、野の八方より一齊に鳴り渡るジュリアン皇帝は軍隊人民陛下の救ひし共和國家によりて永く君臨す可しとの喊呼は、コンスタンチウスの使節をして色を失は

しむ。皇帝が紫袍を授けしジュリアンの忘恩を責め、その幾多の教養を加へ、幼にして孤たりしをいへる書牘の一部に讀及するや、ジュリアンは之を遮り、「孤兒とや。朕が一家の殘殺者にして朕の孤たりしを責め得るか。是朕をして永く忘れんと力めし迫害を報復せしむる所以なり」と。衆は散ぜり、辛じて民衆の憤怒より保護されしレオナスは、ジュリアンが最緊張せる雄辯を以て、二十年の詐伴によりて益々積せる侮蔑憎惡怨恨の情を吐漏せる一書牘を得て、その主の許に送還せらる。避け難き戦争の宣言とも見る可き此使節の後、數週前に基督降臨祭を舉行せるジュリアンは、一身の安危を不朽の神祇に托せる宣言を公にし、斯くして公然、コンスタンチウスとの交誼と絶ち併せてその宗教と絶てり。

二、ジュリアンの帝國獲得

ジュリアンの境遇は精厲迅速の決意を要す。國家の利害を君主の利害の爲に犠牲とせる對敵が狄族を指嚇して西方諸州に侵寇せしめんとせるを、

ジュリアンの東征の企畫

押收の書牘によりて知れり。コンスタンチウス湖畔とコチアアルプス山麓なる兩倉庫の地位は兩軍の行進を示す。各六十萬クワターの穀粉を貯藏せる倉庫の大は來り圍まんとする敵衆の如何に多大なるかを證す。たゞ皇軍は遠く亞細亞の遠地に在り、禿納河上の防備は弱し。若しジュリアンにして急に起ちてイルリクムの要地を占領し得ば、兵の民衆はその旗下に雲集し、金銀鑛は内亂の費を支へん。乃此大膽なる計策を群議に問ひ、宜しく元帥を信じ、自信に敵に強く味方に穩に諸將に従順に名聲を揚ぐ可きを論じて士氣を鼓舞す。活氣ある演述は喝采を以て迎へられ、嚮にゴールを去る可しとの命を受けてコンスタンチウスに反抗して起ちし士衆は、今や遠く歐亞の天涯に悦びてジュリアンに従はんとす。忠誠の誓は立てらる、兵衆は楯を敲き白刃を喉に擬して、ゴールの救濟者日耳曼の征服者として知られし主帥の用たらんことを誓ふ。義よりは寧情に出でし此嚴肅の立誓に唯一人反對せしは禁軍統領ネブリ

h、一クワターは三十八磅、即ちわが約三貫三百八十匁餘。また時には二十五磅を一クワターとなす。

チウスなり。この忠義の臣は獨りコンスタンチウスの君權を確認して裝甲憤怒の衆を憚らず、殆んど爲に名譽の而も無用の犠牲たらんとせり。一劍閃く處一臂を断たれ、その干犯せるジュリアンの膝を抱くや、帝は紫袍の袖を以て掩ひ救ひ、之を其家に送還す。サルスト乃代りてその職に任じ、今や租賦の重苛を免れしゴール諸州は、その弟子の心裡に涵養せる徳を行ふ



帝ンアリユジ

ジュリアンの友の温和公平の施政を悦べり。

非ずして衆の敏捷にあり。此一舉に帝は細心の及ぶ限りを盡くして、その及ばざる所を勇と運とに委しき。パシル附近にて衆を會し軍を分つ。二萬の一軍を騎將ネギッタに授けてレチア、ノリクムの中間より進ましめ、略同數の一軍をジギウス、ジギヌスに授けてアルプスを越え伊太利の北境を斜に進ましむ。諸將の令は熱心に詳密に傳へ、密集團をなして急進し地理に應じて如何なる戦列にも開展し得

案因河邊
よりイル
リアへの
進軍

可く營を固くし守を嚴にして夜襲に備ふ可く不意に行きて抵抗を防ぎ急に去りて情勢を知らしめず我強を説きて敵を畏れしむ可く斯くて皇帝にシルミウム城下に會す可しといへり。而してジュリアン自は更に困難なる非常の任に就けり。主帥と共に進むを知りて退くを思はざる精銳三千を簡びこの忠誠の一軍に將として禿納河源を掩へるマルシアンの奥なる黒森林に進入し、數日の間行く所を知らず。その行進の秘密その努力精勇は所有障害を排去せり、山を越え河を涉り、河江に遭へば橋を架し遊ぎ渡り、帝國の領域と狄境とに論なく只管に直路を取り、終にラチスボン、維因の間に出で、茲に禿納の江上に浮ばんと決す。善謀により碇泊の快船を奪ひ、ゴ一ル軍の狼餐を飽かすに足る糧餉を得、大膽にも禿納の大江に出づ。精勵橈を取りし水手の勞と恰も風位の順良なりしたため、十一日に約七百哩を航して、その萊因河畔を發せりとの確報尙未敵に達せざるの前既にシルミウムを距る僅に十九哩のボノニアに上陸せり。この急忙なる長航の間ジュリアンの心は偏に征討の標的を離れず、早く降伏の功を急がんとせる若干の

城市の使節には迎接せしものから、無用の勇を用ふるを吝みて、江岸に散在せる敵軍の前を過ぎて去れり。禿納兩岸の兵民雲集して、軍容の盛を観事態の大を察し、無数の西軍を率ゐて人力以上の急進を爲す。一少壯英雄の名聲は沿近に流傳す。騎軍の將としてイルリクムの兵備に當れるリシリアンは、拒み得ずまた信じ得ざる。惟聞に愕き惑へり。ポノニアに上陸するや否、ジュリアンの命を受けし敏活の一將グライフスは急に襲ひて、此時漸く兵衆を會せんとせしリシリアンを擒にす。生死を測り得ぬ擒虜は直に馬背に投じてジュリアンの前に致さる。ジュリアン之を扶け起し、その能力を昏迷せしめし驚怖を去らしむ。然るにリシリアンは氣力を復するや、一杯の衆を提げて、親深く敵中に入るの無謀を諫む。ジュリアン笑ひ答ふ、斯る怯懦の諫諍は卿の主コンスタンチウスに致す可し、朕が紫袍に接吻せしめしは卿を顧問としてに非ず、訟者としてのみと。成効獨能く計畫を正し、勇膽唯能く成効を得と信じたる帝は、直に三千の衆を擧げてイルリクムの最強最大の府城を攻めんとす。乃進んでシルミウムの外郊に至るや、城中の

ジュリアンの大義名分

兵民花を冠り燭を手にして、歡呼出で迎へ帝を導きて皇宮に入る。よりに圓戯場の競技を行ひて祝すること二日、第三日の味爽に帝は進んでヘムス嶺の險隘スツシの關を占領す。この險關は殆んどシルミウム、コンスタンチノブルの中間に在りて、スレーズ、ガキア兩州の境を分ち、前者には峻坂、後者には緩坡を爲す。斯くて伊太利軍の兩將と與に東進の計畫に成効して、皇帝に會せる勇將ネギッタにこの要害を守らしめき。畏怖と傾倒とよりジュリアンに致せる人民の歸服は遙にその武力的威壓の域外に及ぶ。伊太利、イルリタム兩地は執政の虛名を併せ帶びしタウルス、フロレンチウスの治處なりしに、兩者は匆忙、亞細亞の朝廷に撤退せしかば、常に輕佻の傾向を制し得ざるジュリアンは、その年の公令に兩執政の名に亡命の形容詞を加へたり。主官に乘られし兩地は皇帝の權威に服すれば、將軍と哲學者との器能を兼備せる帝は、また禿納の陣營にも希臘の諸市にも均しく敬慕せらる。帝はシルミウム、ナイススの宮裡、否本陣より帝國の大都に辨疏の震翰を下し、コンスタンチウスの公文を發表し、狄族を擧擯せ

ると之を招誘せると兩者孰を採る可きかの判断を求む。ジュリアンの心は深く忘恩の誹謗を恐れしかば、武力と與に論議を用ひて我優動を擁護し、戰術の外に文辭を以て勝たんとす。その雅典の議院民衆に下せる文は優雅なる熱詞を用ひ、その行動旨意を當代の廢頹せる雅典人に訴ふるに、恰もアリステデス時代にアレオバガスの前に於ける如く謙抑の態度を示す。當時なほ帝權の名を與ふる特權を有せる羅馬の議院に與ふるの書は既に亡びたる共和時代の形式を用ふ。よりて府尹テルツルスは議院を召集して之を朗讀するに、帝既に伊太利の主たりと見ゆるに、その要求は一異論なく認めらる。たゞ帝がコンスタンチンの革新に就きての牽強の非難、コンスタンチウスの不徳に對する昂奮せる惡罵は羅馬議院の悦服する所ならず、議院は恰もジュリアンの其場に臨めるが如く、吾曹は陛下自己の運命を作れる者を尊敬せんを望むと一齊に叫べり。是巧妙の辭は、篡奪者の忘恩を男らしく誹謗せりとも、また國家に對する斯る恩惠の一舉がコンスタンチウスの所有失脚を補ふとなす諛諛的の自白とも見られ、戰の勝敗に従ひ孰

にも解釋し得らる。

兩帝の對抗の勢

ジュリアン急進の報早くも對敵に達せし時は、恰も可シサポルの退却によりて波斯役小間を得し時なり。心中の憂悶を輕侮の容貌に包みてコンスタンチウスは歐羅巴に歸りてジュリアンを狩らんとし、帝は此戰を語るに決して狩獵以上の語を以てせざりき。叙利亞のヒエラポリスの陣中にて此意を軍衆に告げし帝は、亞皇の罪過をいふを少く若しゴールの叛者戰場に相見ばわが衆軍の眼光に畏れ、喊聲に潰ゆ可しと揚言す。軍中喝采して帝の言を迎へ、ヒエラポリスの議長セオドツスの如きは諛諛の涙を流して敵の敗將の首級を獲てその城市を飾らんと請へり。乃一軍を簡拔して驛車を用ひ、尙取り得可きと想へるセッシ關を固めんことを命じ、サポル征討の爲に準備せし新募の兵馬、四軍器糧食を内戰に轉用し、コンスタンチウスの内國の捷利は成効の確信を以てその黨人を鼓舞せり。記室ゴードンチウスは帝の名によりて亞非利加諸州を占領し、羅馬の應援を絶ちしに、ジュリアンの難は不測の變より生じ將に大事に至らんと見へき。ジュリア

第二節 ジュリアンの帝國獲得

ンはシルミウム駐屯の二軍と一隊の射手との降伏を受けしが、皇帝が特撰せる此軍衆の忠誠を疑ひ、ゴールの境上防備乏しとの口實の下に、之を最必要なる戰場より移すを良策と思推せり。降伏軍は意ならずも伊太利の境に至りしが、前程の遙なると日耳曼の恟悍とを恐れ、一將の言に聽きてアクイレアに止まり、此堅城にコンスタンチウスの旗旗を樹つ。ジュリアンの細心なる直に失敗の大なるを看直にその救済を講じ、ジ・非ヌスに命じて伊太利軍の一部を召還せしめ、アクイレアを圍みて攻撃に力む。而も訓練の羈扼を拒みしと見へし軍隊は熟練と忍耐とを以て善く守り、伊太利の他地方をしてその忠勇に倣はしめ、若しジュリアンにして東軍の大數に屈せばその退路を脅かさんとせり。

然れどもジュリアンの仁恕は、その深く憂ひし他を減さざれば、自滅びんとす。殘忍なる相闘より保存されき、恰も時を得しコンスタンチウスの殞落は、羅馬帝國を内亂の慘禍より救へり。冬來りて帝はアンチオクに留ま

コンスタ
ンチウス
の殞落に
因る内亂
の中止

安よりや生じけむ、輕症の發熱は征旅の疲勞によりて増進し、コンスタンチウスはタルススを距る十二哩の小邑モブス、クレンに駐紮し、病臥少時、享年四十五歳、治世二十四年にして殞落せり。(三六一年十一月三日) 倨傲と懦弱迷信と殘忍とより成るその本性は、上來述べたる政教の事實にて充分明白なり。そが久しく權力を濫用せしため、當代人の眼底には相應の人物と映じけむも、後人の留意は唯個人的價値に存するものから、大コンスタンチウスの諸子の最後の一人は、父帝の器能なくして唯その缺點を繼承せりとの記録を世に留めし耳。コンスタンチウスは晏駕に臨みてジュリアンを後嗣と定めしといはる、その臨終に皇子を抱きて残る若き皇后の運命に關する憂慮が憎惡復讐の烈情を壓倒せしは左もありなむ。ユセビウスとその與黨は他の皇帝を推戴して奄豎專權の時代を永くせんと企畫せしも、今や内亂を惡む軍隊はこの隱謀を拒み、名ある二將は帝國の劍は悉くその奉公の爲に抜かる可きをジュリアンに告ぐ可く直に出發せり。スレースに三路の攻撃を企てしジュリアンの軍略はこの幸運によりて止めらる。同胞の血を

濶がすして勝敗未決の危を免れ全捷の利益を収めたり。生地と帝國の新都城とを訪ふの念切に帝はナイススを發しヘムスの山地、スレースの諸市を経て都城を去る六十哩のヘラクレアに至るや、コンスタンチノブルの全府は出で、之を迎へ、軍兵民衆議院の歡呼聲裡に凱旋的入城を爲せり、十二月十一日。無数の群集は熱心なる尊敬を以て帝側に應至せしが、年少の無經驗を以て日耳曼の狄族を撃破し、今また大西洋岸よりボスフォルス峽上に至る全歐を踏破し來りし英雄の倭軀龜服を見ては恐らく失望したらむ。後數日、先帝の遺骸港口に着くや、ジュリアンの臣從は君王の眞偽孰に出でしか仁恕を稱賛せり。帝は徒步無冠喪服にて聖使徒寺に葬を送りて茲に遺骸を納む、この崇敬は皇室の懿親の門地威嚴に對する利己的貢資と解釋され得んも、ジュリアンの涙はコンスタンチウスより蒙りし侵害を忘れ恩義のみ記憶せるを世に示せり。アクレイアの軍隊も皇帝の殞音を得て城門を開き首魁を犠牲にしてジュリアンの細心に訟へて容易く赦され、三十二歳のジュリアンは茲に羅馬帝國の全土を得たり。

三、ジュリアンの内政と性情

新皇帝の内政と精勵の

哲學はジュリアンに出處進退の利害を比較するを教へしも、門地の尊貴と生涯の事端とはその撰擇の自由を許さず。帝は恐らく眞にアカデミーの森林雅典の社會を愛しけんに始はコンスタンチウスの意見により後にはその不道によりて、一身と名聲とを帝國の偉大に任じ、世界後世億兆の幸福の責任を負はざるを得ざるに至る。吾曹群夥の政府は常に優級の族に委任され國民の行動は神祇精靈の天來の威力を要しました之に應ずといへるプラトの言を回想してジュリアンは畏れき。此主旨に據りてジュリアンは治局に當る者は神性の完備に力む可く、人間俗界より精神を淨む可く、私慾を抑へ理智を磨き感情を制す可く、アリストトルの活警論によれば、稍もすれば暴君の位に上らんとする野獸を征服す可しとの決論を得たり。コンスタンチウスの殞落が根底を据へしジュリアンの皇位は理性道德而して恐らく虛榮の玉座なりき。帝は名譽を斥け享樂を排し、常に力めて高位の責務

を盡くし、臣從の中には帝の冕冠の重擔を輕減し得る者稀に、却りて哲學的皇帝が自課する峻法の下に屈從せり。屢帝の質素なる食卓に侍陪せし親友の一は、その輕些節約の食事は概ね菜食なる、二官僚一法主一有司一將軍一皇子の各種の必要なる事務に對して、帝の身心を常に自由活潑ならしむといへり。帝は一日の中に數使節を引見し、帝國の將軍有司私友諸市に下す多數の震翰公文を起草す。記録を視、請願を考へ、記室の勤勉によりて略記するよりも尙早く意考を表す。その考想の多端に注意の確實なる、手に書き耳に聽き口に語りて、猶豫なく誤謬なく思想の三面を同時に進め得。臣僚の休憩せる間に、君主は一事より他事に涉り、忙しき午餐の後、常夕の公務勉學を遮るまでは書齋裡の人と爲る。その晚餐は公式の食事よりは一層質素に、その睡眠は未曾て不消化の妄想によりて煩はされず、戀愛よりは寧政略の結果たる結婚の當時を除きては生涯婦人と榻を同うせず。昏には前日眠りし新記室の入室によりて起され、疲勞を知らざる君主が職務の變移以外に殆んど何等の休養を取らざるに、侍臣は交替して奉仕す。従前

の諸帝は伯父も兄も従弟も皆人民の好尚に同すとの口實の下に圓戲場の演技に對して稗氣ある嗜好を恣にし、怠惰なる觀客としてまた自壯觀の一部を爲して、二十四番の競技全く終るまで殆んど終日を消すこと屢次なりき。斬る輕浮の娛樂を好まざるジュリアンも、嚴肅なる式禮の日は圓戲場に臨御するも、不關心に五六番を見て、公務にも私學にも益なき寸陰の吝む可きを知る哲學者は直に去る。帝はこの時間の節約によりて短き治世を延長したるが如く、若し時日の記載にして少しく正確ならざりせば、予輩はコンスタンチウスの殞落よりその嗣主の波斯役の出陣までの僅に十六ヶ月なるを信ぜざらんとす。三六一年十二月乃至三六三年三月。ジュリアンの活動は唯史家の注意によりて傳へらる可しと雖も、今尙遺存せるその鴻翰の述作は永く帝の天才と勉強との好記念たり。ミソポゴン、亞皇篇幾多の演説、基督教に對する精細の論議等は、前にはコンスタンチノブル、後にはアンチオクに過し、二冬永夜の勞作なり。

朝廷の革新はジュリアン政府の最先最要務の一なり。コンスタンチノブ

ルの宮に入りし後、幾もなく帝は理髪者を召せり。盛装せる一官直に御前に至る。帝陽に驚きていふ「朕は理髪者を要す、財務收納官を招かず」と。よりて其所得を問ひて、巨額の体給若干の賞賜の外に二十人の奴僕と數頭の馬匹飼養料を給せらるゝを知れり。一千の理髪者、一千の庖丁、一千の獻爵者は奢侈の諸官に配付せられ、奄豎の數に至りては唯盛夏の昆蟲に較ぶ可し。功德ともに臣從に讓れる君王は衣飾膳羞宮殿行粧の莊麗を以て識別さる。コンスタンチンと其諸子の造營せる幾多の大宮殿は各色の大埋石多量の黄金を以て粉飾さる。美味佳肴は其嗜好よりは寧尊大を満足せしむ、最氣候の異りし鳥、最遠隔の海の魚季節を外づれし菓實立冬の薔薇、盛夏の白雪。宮中奉仕の給與は軍資に越ゆるも、此高價なる群集は帝位の用を爲さざるのみならずその盛をすら加へず。恠しげなる空名の雜役の無數を設け且賣るは君王を汚し人民を害し人間の最價値なき徒は勞役を要せずして國家に衣食するの特權を購ひ得。大家庭の濫費直に法律上の負債となる賞賜加俸の累進敵視を恐れ眷遇を求むる輩より誅求す

る賄賂は忽にして此等倨傲なる賤奴の富を加ふ。この徒は過去未來の境遇を思はずして幸運を濫用し、その貪婪儉嗇は唯浪費によりて平均し得。その絹衣は金繡を施し、その私邸は古代の執政の第に比し、最名譽ある人民も途上一奄豎に遇へば馬を下りて恭しく禮を行はざるを得ず。平常地を席とし、已むを得ずして天の顧命に應じ帝王の尊大を加ふるよりも之を抑損するを虚榮とせるジュリアンは、斯る宮廷の奢侈を輕侮蔑視せり。若し自家の勤勞の結果にして眞に國家の用に充つ可くば租賦の重課をも辭せざる可き國民の不幸を救ひ怨嗟を絶つは、此事實以上にまで誇大されし幣寶を全滅するに在り。然れどもこの公益の一舉を實施するに帝は餘りに急峻なりしと譏らる。帝は一令によりてコンスタンチノブルの宮殿を一大曠野と化せり、皇族の忠實なる家奴の年齢仕務貧窮に對して何等正當の少くとも恩惠的除外を爲さずして、奴隸仕人の全部を罷免せり。眞徳は相反せる不徳の中間に在りとのアリストルの根本的格言を回想すると稀なるは實にジュリアンの天性なり。莊麗優美の亞細亞風の衣飾、修髮傳

粉襟飾縁飾、コンスタンチンの身に不相應に見へしものは悉くその哲學的繼嗣によりて廢停せらる。然れどもジュリアンが衣飾の端正をも排斥せんとし、清潔の法則を蔑視して、自誇りしは愚なり。公衆の爲にせる諷刺的行爲に於て、帝は好んで否寧誇りて爪の長き手の黒きを辨じ、全身は殆んど毛を生ぜるも唯頭にのみ剃刀を用ゆるを論じ、好んで希臘哲學者に倣ひ生ぜし粗き多き鬚髯を愉げに示せり。ジュリアンにして理論の簡單なる條理を思はゞ、羅馬の首位者は、ダリウスの好尚と併せて、ダイオゼネスのそれを排斥す可かりき。

審判廷

然れどもジュリアン若し唯前世の濫失を矯めて罪惡を罰せずば、革新の業は完からず。その一親友に與へし書中に曰く、吾曹は今救はれたり、食餐のハイドラの顎より今幸に救はれたり。朕はこの譬論を以て兄コンスタンチウスを指すにあらず。渠今や亡し、土をしてその頭上に輕からしめよ。而も渠の狡猾殘忍なる嬖臣は、天性の温順諛辭なくして稱賛し難き君王を欺き悞るを知れり。されど此徒と雖も壓抑せんは朕の意に非ず、たゞ之を

罪して公明なる裁斷を仰がしめんと。この審判の爲にジュリアンは文武の高官より六司直を撰任し、個人的仇敵を罪するの謗を免れんために、ボスファルスの亞細亞岸なるカルケドンに臨時審判廷を置き、猶豫なく越訴を許さず最後の裁斷を宣告實行するの全權を委員に賦與す。その德希臘の詭辯學徒基督教の卑劣の尊敬を得し東方の統領第二のサルストその長司なり。之を助くる者を自家推讚の疑はしき證據を以て有名なる撰舉執政の一たる雄辯のマメルチヌスとす。而も二文官の

i、ゴールの統領と東方の統領とともにサルストといふ、同名異人なり。よりて區別の爲に Secundus (第二) の稱を用う。

帝の仁慈寛容

智は四將軍ネッタ、アジロ、ジヨ、井ウス、アルベチオの武人的勇斷を以て均衡を得。公衆が榻上に於けるよりも寧法廷に於けるを異とせざるアルベチオは、委命の秘鑰を握りしと見へ、ジギアン、ヘルリア軍の將校は法廷を圍繞し、司直は正義の法律と黨派の喧囂とによりて交動かされき。

久しくコンスタンチウスの眷寵を私せし宮宰ユセピウスは、不名譽なる死刑を以てその奴隸的治世の敗類腐敗殘忍の幕を閉せり。パウル、アポデ

ミウスの處列は前者は燔殺さる、その專恣によりて摘告殺戮されし幾百羅馬人の寡婦孤兒によりて尙飽すとせらる。然れども正義はアマミアヌスの感情的言辭を借來れば帝國財賦官ウルスルススの運命を見て哭しけむ、その鮮血はこの正直なる宰臣の寛大の爲に不幸を救はれしジュリアンの忘恩を責めむ。その不用意にして將士の怒を買ひしはその死刑宣告の原因にして帝は深く自悔ひまた世の謗を畏れ公收せし資財を復してウルスルスの遺族に若干の慰藉を與へたり。統領執政の名稱を以て飾れるその年未終らざるに、タウルス、フロレンチウスはカルケドンの嚴酷なる法廷に哀を請はざるを得ざりき。前者は伊太利のエルセレに放逐せられ、後者は死の宣言を受けたり。賢明なる君王はタウルスの罪を償ひしが如く、今や叛亂の進行を止むる力なき此忠誠なる宰臣は恩人にして正當の君王なるその宮裡に隠れき。然れどもフロレンチウスの

j、羅馬にては執政の名を以て年に名く。當時なほ此風あり。タウルス執政の年内にタウルスの罪人として召喚されしを聞きて世人の驚異せしは、此時なほ共和制の空名に若干の尊敬を拂へるを知る可し。同僚フロレンチウスの召喚は恐らく翌春まで延期されしならむ。

罪は判官の峻烈正しく、その遁亡はジュリアンの剛膽を露せり、帝は尊くも密告者の言を排して亡命者の何處に匿れしかを知るを拒めり。カルケドンの法廷の解散後數月、亞非利加の總督たる記室ゴテンチウスと埃及伯アルテミウスとはアンチオクに刑せらる。アルテミウスは此大州に臨みし殘忍の暴君、ゴテンチウスは久しくジュリアンの無罪有徳に對して否その一身に對してすら讒謗の術數を弄せる者なり。而も二人の裁斷處刑の拙なる、此兩惡をして世人よりコンスタンチウスに飽くまで忠誠を守りて害に逢へりとの光榮を得せしむ。コンスタンチウスの他の臣從は皆赦免を得、虐げられし者を庇ひ友なき者を虐げて得し賄賂を積んで罰せられざりき。政策の深奥の主義に於て予輩の稱賛に價する此方針は帝位の尊嚴を損ずるが如く見ゆる方法にて行はれき。ジュリアンは不用意にまたは不法に獲得せし賞賜の再要求を爲す群衆の懇願に惱まざる。就中埃及人最然り。帝煩しき出訴の續起を豫想し、若しカルケドンに來らば親しく引見して祈願を聽く可しと約す。然るに訴者其地に上陸するや、舟人に令して一埃

及人をもコンスタンチノブルに輸送せしめざりしかば、失望せる訟者は忍耐と金銭との盡くるまゝに私語を放ちて故國に去りき。

一人の安靜を保ち萬人のそれを遮るためにコンスタンチウスが設けし間諜告發者の無数の集團は寛大なる嗣帝によりて直に解散さる。ジュリアンは嫌疑に遅く處罰に寛に、その動亂の輕侮は裁斷虛榮勇氣の結果たり。優越の功勳を自覺すれば、臣從の裏に敢て帝と戰場に相見、帝の生命を害し、帝の空位を奪はんとする者稀なりとせり。哲學者は不滿の急激なる發作を赦し能ふ可く、英雄は無謀なる謀徒の運命若しくは能力を超越する大望の企畫を蔑視し能ふ可し。アンキラの一市民自用の爲に紫衣を藏す。コンスタンチウスの世にあらば重科たる可き此事私敵によりてジュリアンに告訴せらる。帝よりて對者の地位性格を問ひし後、告發者に紫鞋一對を授け遣りて帝裝の不備を完うせしむ。更に危険なる隱謀は禁衛十人ジュリアンをアンチオク附近の練習の野に弑せんと謀りしことなり。過飲の爲に謀漏れ、縛せられて帝前に牽かれしに、帝は明にその計畫の愚惡を説きし

自由共和の遺意、東洋的專制の排斥

のち謀徒が當然受く可く豫期せし拷掠の死の代りに首惡二人を流涕して已む。帝の生平の寛仁を失ひしと見ゆる唯一例は弱手帝國を奪はんと謀りし無謀の一青年の處刑なりき。然れどもこの青年はゴールの第一役に亞皇と共和國家とに叫きし騎軍の將マルセルスの子なり。個人的憎怨を寛容せずしてジュリアンは父子の罪惡を混同せり、而もマルセルスの困苦に意和ぎて、寛大にも法律の手によりて成されし創痍を癒さんと力めき。ジュリアンは自由の利を解せざるに非ず。學問によりて古の聖者英雄の精神を領せり。その生涯と運命とは虐主の性急に頼れり。斯くて帝位に上りし時、敢てその瑕瑾を咎め得ざる奴隸はその有徳を頌揚するの價値なきを回想して、時に自誇負を惱しき。帝はチオクレチアン、コンスタンチン四十年來の慣習が帝國に確立せる東洋風の專制組織を衷心より惡めり。迷信はジュリアンが屢思量せる自家頭上より高價なる冕冠の重擔を除かんとの實行を妨げたり。而も既にその奴隸的卑屈的語源の遺忘せらるゝまでに羅馬人の耳に馴れしドミヌス則大君 Dominus はまた Despot なり。帝未

の尊號はその絶對に拒む所たりき。

執政の職を寧ろ名は共和の遺制を尊

重する君王によりて愛好され、オーガスタスが細心に出でしと同じ態度を

ジュリアンは好尚より取れり。一月元旦(三六三年一月一日)の昧爽に新執政

マメルチヌス、ネキッタは皇帝に謁見せんと參内す。その朝勤の報を得るや

帝直に玉座を下りて出で迎へ、赤面せる臣僚を強ひてその謙讓の態度を受

けしむ。宮を出で、執政は議院に赴く。帝は徒歩その昇床の前に立ちて

進むに、觀衆は古時の面影を嘆美し、また竊に紫袍の尊嚴を汚すを誅る者あ

り。然れどもジュリアンの態度は毫も變ぜず。圓戯場の演技中故意か不用

意か、帝は執政の前にて一奴隸の放釋を~~~~ハ、共和時代の古式なり。

行へり。他の有司の權限を干犯せりと思ふ時、帝は自罪して黄金十磅の罰

金を拂ひ、以て自己も亦同胞と等しく共和國家の法律に而してその形式に

すら服従することを世に示す。帝の行政の精神と愛郷の念とは、コンスタ

ンチノブルの議院に古羅馬の議院によりて尙悦ばるゝと同一の名譽特權

曾て法を立て、此號を廢せざれば、其
牌面には尙此語を存せり。

權能を賦與せり。國民會議の一半は東方に移り、ジュリアンの專制的後嗣は
議官の名號を得て羅馬の名の尊嚴を代表するを許されし尊き團體の一員
と爲れりとの假定的傳説生じて、後漸く事實となさる。皇帝の眼はコンス
タンチノブルより諸州の地方議院に轉ぜり。帝は屢命を下して多數の
遊民を國土の役務より除く不正有害の特免を廢禁し、均等の公賦を課して
帝國諸市の實力盛觀リ、パニウスの言を借れば、その精神を復興す。希臘の
盛世はジュリアンの心裡に最優しき憐情を生じ、神祇英雄と英雄よりも神祇
よりも優れる古人の天才の觀念徳性の事例を後世子孫に遺せるを回想す
れば、胸裏宛ら燃るが若し。ルエピロス、ベロポネネスに諸市の廢を興
し盛を復す。雅典は帝を恩主と認め、アルゴスは帝を救主と爲す。羅馬殖
民の名譽を以て荒廢より復興せるコリンスの誇負は、地峽の演技興行の爲
に附近の共和市より貢賦を徴し、熊彪の狩獵を以て圓戯場を賑せり。古
き祖先よりオリムプス、ピチア、ネメアの演技の神聖なる職責を繼承せるエ
リスデルフ、アルゴス諸市は、正當に此貢賦を免ぜらる。エリス、デルフの特

権はコリンス人に尊重されしも、アルゴスの貧は壓制の凌辱を招き、その使節の薄弱なる愁訴は、偏に駐在都市の利のみ圖る州吏の命令に屈せり。

のち七年、ジュリアンは此案件を高等法廷に移し、アガメムノンの舊地にしてマセドニア人に王と捷者との一競争を許せる古市の辯護に雄辯を用ひき。

1、トロイ戦役の勇者アガメムノンはアルゴスを距る五十スタヂア、則、約六哩なるミケネに君臨せり。而も此兩都市は希臘詩客によりて混同さる。

辯客たる
皇帝

ジュリアンは帝國の博大に比例して多き文武の繁多なる政治に能力を用ひしのみか、近世歐洲の君王には殆んど知られざる辯士判官の二役を務むることもしばしばなりき。最初の帝王によりて熱心に修められし説服の術は、後繼諸主の武人的無智亞細亞的倨傲によりて閉却され、その畏るゝ軍衆には身を下して演述を試むるも、その悔れる議官をば黙して顧みず。然るにコンスタンチウスの回避せし議院は、ジュリアンによりては最能く共和の旨義を明にし修辭家の技能を示す場と認めらる。帝は宛も演説の學堂に於ける如く、稱賛譴責訓諭の諸術を併用し、その友リベヌスの評にては、ホマー

を學びてメネラウスの簡潔の調、冬の雪月の如きネストルの豐澤、さてはユリセスの感傷的雄辯を得たり。判官の職務は時としては君王のそれと兩立し難きも、ジュリアンは單に義務としてのみならずまた娛樂として之を行ひ、禁軍統領の老實明敏に信頼しながらも、屢その判廷に際臨す。帝の鋭き洞察は事實を回避し法理を回解せんとする辯護者の狡猾を看破するに適す。また時に帝王の尊を忘れて曖昧若しくは不利の案を訊問し、聲を高くし身を動かして判官辯護者訟人と論争して熱誠を批瀝す。而も自己の性情を知れば力めて友人臣下の反駁争議を奨勵し、若し敢てその感情の發露に反對する者あれば耻且謝するを見る。ジュリアンの宣告は常に正理に本き、憐哀公平の形式によりて君主の裁斷を脅かす最危険なる二傾向に抵抗する確信を有せり。帝は兩造の事情を量らずして事案の實質を探決し、心に拯はんと欲する貧者も富貴なる對手の正常なる要求を満足す可く罪せり。帝は司法と行政との區別に留意し、羅馬法の必須なる改革を考慮せるも、その宣言は官僚の執る可く民衆の從ふ可く定められし國法の嚴

ジュリアンの人格的價值

正なる解釋に據れり。

若し紫袍を褫ひて世界に放出せば、帝王の大概は直に社會の最下層に沈淪して復向上するの希望なからむ。然るにジュリアンの個人的能力は或程度まではその地位に頼らず。その生涯の如何に論なく不撓の勇活躍の智熱烈の勤勉を以てその職業の最高の名譽を得可く否少くともその名譽に値し得可く私人として生れたらん國家の將相たり得可し。若し權勢の忌妬がその所期を失望せしめ、若し自細心に青雲の道を避け、同一能力を學界に傾倒せば、彼が生前の幸福死後不朽の名聲は帝王の企及せざる所なりけむ。余輩仔細の若しくは恐らく惡意の注意を以てジュリアンの相貌を観察すれば、全體の優雅完備に於て何物かの缺くるを見る。その天才はシーザーの力量と嵩高とに及ばず、またオカスタスの精細巧緻なし。トラジンの徳性は更に固く自然に、マルクスの哲學は更に簡明堅實なり。然れどもジュリアンは堅忍艱苦に耐へ、溫良昌榮を保つ。アレキサンダー・セエルスの殂後、一百二十年にして羅馬は責務と享樂とに差別を措かず、臣民の不幸を

救ひ精氣を興し、功を以て權力に結び、徳を以て幸福に連ぬる一皇帝を見るを得たり。徒黨教界の徒黨すら和戰兩時に於けるその天才の優越を認識せざるを得ず、背教者ジュリアンは愛國者なり、世界の皇帝たるの値ありと嘆稱せざるを得ざりき。

第九章 ジュリアンの一般赦免

異教復興の舉、基督教の迫害

一、ジュリアンの背基督教的來由

背教者
ユリアン

背教者の稱はジュリアンの盛名を汚せり、その徳性を掩ふ熱烈は過失の眞相を誇張せり。予輩の偏倚せる無智は、公平の手を以て帝國の教争を疵護し、デオクレチアンの禁令よりアサナシウスの流謫に至る間民心を焦せる神學的發熱を鎮靜せんとせし哲學的君王を以てジュリアンを目し得可し。然れども更に精しくジュリアンの性行を點檢すれば、時代の一般流弊を免れ能はざる君王の爲に好き此豫想は除去さる可し。予輩は傾倒せるその推贊者と相容れざるその讐敵とによりて描かれし繪畫を相對照し得る奇利を有す。ジュリアンの行動はその生死を公平に觀し公明なる一史家によりて忠實に説かる。當代の一致せる證據は帝自の公私の宣言によりて確證

帝の少時
背教的
路徑

され帝の諸種の文字は政策が伴托せんよりも寧隱蔽せんとする宗教的感念の一定の色調を表明せり。雅典羅馬の神祇に對する崇敬傾倒はジュリアンの心情を支配し、砥礪せる理會力は迷信的偏頗の勢に蠢惑誘動され帝の心裡にのみ存在する幻影は帝國政府に實在有害の結果を生ず。斯る小説的神祇の崇拜を排し祭壇を覆す基督教徒の熱誠はその歸依者をして帝の臣民の多數と相容れざる對敵の境に至らしめ、帝は捷利を希ひ若しくは反抗を叱ぢて時に或は細慮の否正義の法則をすら干さんとす。その反對せる黨派の捷利はジュリアンの名に不名譽の汚點を印し、不成功なる背教者はグレゴリー・ナジアンゼンの朗々たる喇叭を信號とせる敬虔なる誹謗の急潮によりて壓倒さる。この活動的皇帝の短き治世に雲集せる事實の興味ある性質は一條の正しき詳細なる記録に値す。宗教史に關する帝の本志商議行動を以て本章の主題と爲さん。

帝の奇異なる宿命的背教の因由は一家の虐殺者の掌裡に孤兒として残りしその少時より生じたり。基督とコンスタンチウスの名、奴隸と宗教と

の思想は最鋭き印象を受け得る少年の想像に於て直に結合せり。幼にし、母方の姻親たるニコメチアの卑劣ユセビウスに托せられしジュリアンは十二歳まで此基督教の師傳より英雄の教ならで聖徒の教育を受けたり。地上の王冠よりも天上の冠を想ふこと少き皇帝は、自改宗候補の不完全なる地位に満足しながら、コンスタンチンの兩姪に洗禮の利益を授けき。否、そののみか兩皇姪は教界の微職をさへ授けられ、ジュリアンは公然ニコメチアの寺院に聖約書を誦せり。間断なき教學は信仰敬虔の美果を結ぶ可く見へき。皇姪は祈禱し、齋戒し、貧民に施與し、僧侶に賞施し、殉道者の墓に寄進し、ケザレアなる聖マヌスの莊嚴なる記念碑はガルス、ジュリアンの共同して建設、否、少くも計畫せる所なり。皇姪は恭しく名僧と語り、カッパドキアに隱遁苦行の生活を入れ入せる僧侶隱者の祈念を求めき。漸く長ずるや兩皇姪の宗教的感情に性格の差異を認む。ガルスの暗愚頑迷は深奥なる熱心をもて基督教々義を抱懐せしも、それは決してその行爲を左右し性情を融和せざりき。少皇子の温順なる性質は福音書の教訓を拒むこと少く、その

敏活なる好奇心は天神の不可思議なる精髄を説明する神學的組織に満足し、眼に見へざる未來世界の無限の光景を開展し得たり。而もジュリアンの獨立的氣象は教會の傲慢なる司宰が宗教の名によりて要求する受動的風從を甘受し得ず。その考察的教説を宗律と爲し、永劫の處罰の畏怖を以て之を衞り、少年皇子の思想言行に峻苛なる形式を命令してその異論を允らさず、研究の自由を嚴禁し、性急なる天才を驅りて宗教的指導者の權威を侮蔑せしむるに至る。皇子は小亞細亞にてアリウス分離派の讒謗を以て教へられき。東方卑劣の峻烈の爭論、信條の間断なき移變、その行動を左右すと見ゆる冒瀆の旨意は、何時しかジュリアンをして此徒は斯くまで極争せる宗教を解せず、また信ぜずとの推斷を強めしむ。最尊敬すべき論議に重を加へ得る此好箇の注意を以て基督教の證據に耳を傾けずして、既に不可見の嫌忌を懐ける教義を疑ひ、聞き固く鋭く争へり。少皇子が當世争議の題目に關する論説の起草を命ぜらるゝ毎に、ジュリアンはつねに多神異教の辯護者を以て自任じ、弱者の擁護に於てその學問才能の一層有利に用ひられ

發揮せらるゝと爲せり。

ガルスガルスの紫袍ししほを授けらるゝやジュリアンは自由文學じゆりやうぶがく異教いけうの空氣くわいきを吸ふを得たり。皇家きやうかの弟子でしの嗜好しこうと寛容くわんようとに引かれ來りし詭辯きべん學者がくしやの群ぐんは希臘ギリヤクの學問がくもんと宗教しゆきうとの間に緊切きんせつなる連合れんごうを作り、ホマーの詩篇しへんは人間にんげん天才てんさいの創作的さくしやくてき產物さんぶつとして推贊すいさんされずしてアポロとミューズとの天來てんらいの感想かんさうに歸せられき。オリムプスの神祇しんぎは不朽ふくしうの名篇めいへんに描かれしが若く、最迷信さいしんじん的てき偏見へんけん少き心裡しんりに感銘かんとくせり。その名號なごう狀貌じやうぼう性質しやうしやうに就きて予輩よはいの暗熟あんじやくせる知識ちしきは此等こゝろ空幻くうげんの人物にんぶつに實在じつざん的てき物質ぶつしつ的存在そんざいを與へんとし、快こころよき魅惑めいごくは予輩よはいの理性りてんせい經驗けいけんと最相反さいさはんする斯かる寓言えげんに不完全ふくぜんなる一時的てきぎてき想像さうざうを生ず可べく見ゆ。ジュリアン時代じゆりあんたには各種かくんの事情じじきはこの迷想めいさうを長ながじ守るの利あり希臘ギリヤク亞細亞アチヤの莊麗じやうれいなる神廟しんべう繪畫えいさ彫刻てうこくを以て詩人しにんの神祇しんぎの觀念くわんねんを表現ひょうげんせる美術びゆつ祭式さいしき犧牲せきせいの偉觀ゐくわん適中てきちゆうする算命せいめいの神術しんじゆつ神託しんたく靈異れいぎの民間みんげん傳説でんせつ二千年にせんねん來の傳承でんそうの事實じじつ等是こゝろなり。多神教たしんきやうの弱點じやくてんは或程度あるていどまでその要求ようきうの緩和くわんわんによりて宥なだまれ異教いけうの崇敬しゆんけいは最放恣さいはうしなる懷疑派ぐゐいはいとすら相容あひまれずと爲さず。信仰しんぎやうする人心にんしんを全

神論の解

部ぶ占有ちゆうけんする不可見ふかけんの正規せいぎの一組織いつしきそくの代たに希臘ギリヤクの神話しんわは數千すうせんの寛鬆くわんしゆんなる部分ぶぶんより成り神祇しんぎの奴やつは己おのれが自由じゆりやうに宗教しゆきう的てき信仰しんぎやうの程度ていどを定め得え。ジュリアンが自用じゆうようひし信條しんじょうは最大さいだいの範圍くわんいに互たり不思議ふしぎなる反照はんさうによりて福音ふくいんの有利りうりなる福扼ふくぎやくを呑みながら自進じしんんで理性りてんせいをジビターアポロの祭壇さいだんに捧ぐ。フリギアフリギヤ兒童こどもの狂妄きやうまうによりて行はるゝ慘憺さんたんたる犧牲せきせいを女巫にょぶより要求ようきうする諸神しよしんの母ははキベレキベレ女神めがしんの爲ためになし、ジュリアンの一演説いつえんせつあり。敬神けいしんの皇帝きやうていは此こゝろ女神めがしんがベルガモスの沿海えんかいよりチベル河口ちべるがくに來航らいかうせしと羅馬ローマの使節しせつが海上かいじやう齋さいし來りし土塊どくわいが生命せいめい感情かんじやう神力しんりきを得しことを議院ぎいん人民じんみんに示せる神異しんぎを語りて帝ていは面おもてを赭あかめすまた笑わらを漏もらさず。この神異しんぎの眞實しんじつの爲ために帝ていは府ふの公共こうきやうの紀念碑きねんひに訴へ用もちもなきに祖先そぜんの神聖しんせいなる傳説でんせつを嘲あざわらりし者を責とがむること轉苛てんかかりき。

然しかれども眞まことに臣民しんみんの迷信めいしんを信じまた之これを獎勵かうむせる敬虔けいけんなる哲學者ていがくしやも自家かみの爲ためには自由じゆりやうなる解釋かいせつの特權てくけんを保留ほりうし祭壇さいだんの下したより靜しずかに神廟しんべうの奥殿おくでんに退ひけり。希臘ギリヤク神話しんわの荒唐くわうたうは單ただに文字上もんじじやうの意義いぎぎを以て輕侮けいぶし満足まんぞくすること

第一節 ジュリアンの背基督教的來由

なく古人の細慮によりて寓言の假面の下に隠されたる玄妙の智識を熱心に探討せんを大聲に敬虔なる研究者に要求す。プラト派の哲學者^m、ロチヌスⁿ、ボルフィリ^o、神聖なるアイアムブリクスはこの警諭的科學の大家にして異教の醜陋なる形醜を緩和齊整して名あり。ジュリアンも亦アイアムブリクスの高足エデシウスより立學を受けて、その嚴肅なる誓言を信すれば、世界の帝國よりも遙に尊重せりといふ寶貨を獲得せり。この寶貨は唯學說によりて價值を生ずるものにて、身邊の渣滓より貴金を得ると自誇る技術者は、皆均しく各自の特殊の思想に最適せる名稱形貌を印する權を有す。アチス、キベレの小説寓言は既にボルフィリによりて説明されしも、その努力は唯ジュリアンの敬神的勞作を刺戟し之をしてこの古代の神異譚に就きて自家の架説を創出發表せしむ。プラト派學徒の

m、プロチヌスは二〇四年に埃及のリコポリスに生れ、二七〇年頃に歿せし新プラト派の哲學者。

n、ボルフィリは二三年に叙里亞のバタネア(ベシアン)に生れ、三〇四年頃羅馬に歿せし新プラト派の哲學者。

o、アイアムブリクス(またジアムブリクス)はコンスタンチン大帝の世に盛へし叙里亞のカルキスの哲學者。

ジュリアンの神學組織

誇負を満足せしめ得るこの解釋説明の自由はまたその技能の虚榮を示す。宇宙の組織を説くと稱する此等聖者の奇異の解説牽強の釋語、嚴肅なる鎖事、窺ひ難き立奥は、煩はしき詳説なくして近代讀者の正確なる思想を形成し得ざる所なり。異教神話の傳説は區々なれば神聖なる解説者はその最便利なるものを自由に採擇し得べく、また隨意的暗語を纏釋すれば自家の宗教哲學組織に適用し得る如何なる理義をも如何なる寓言よりも描出し得べし。裸體のエヌスの淫蕩なる形體は、或道德觀若しくば或自然理の發見に資すべく、アチスの去勢^{カストレーション}は兩熱帶間に太陽の回轉とも、失徳過失より人心を離去すとも解かれき。

ジュリアンの神學的組織は自然教の高高重大の主義を包含せしが若し。然も天啓に本づかざる信仰は何等確證なければ、このプラトの門弟は輕忽にも卑俗なる迷信の習性に退歩し、神に就きての世間的哲學的觀念はジュリアンの行爲文章その心裡にてすら混亂せりと見ゆ。敬虔なる皇帝は弱き人間の眼に見へず心に解き得ざる無量限の總ての完性を有すと爲せる宇

宙の永劫因を認め且嘆美せり。至上天神は隸屬的精靈神祇惡魔英雄人間を漸次に創造せり否プラト派の語にては生れり。さる尊き利益の價値なきものゝ爲に濫費されざる爲に造物主は人體を形成し動植礦物界の美しき調和を配列する職權を下級神祇の熟練と力とに委託せり。下界の世俗的統御をも此等の宰神の指導に托せしものからその不完全なる統政は擾亂過失を免れ得ず。大地と住民とは諸神祇の間に預たれ、マルス若しくはミネルヴ、マーキュリー若しくはエヌスの性格はその特殊の信徒の法則習俗に明に認め得らる。予輩の不滅の靈魂にして一肉體の囚獄に幽閉せらるる間神祇天權の眷顧を希ひ讒怒を緩むるは予輩の利害にしてまた義務なり、その神祇の誇負は人間の敬信によりて満足し、その中の卑賤なる者は犠牲の氛氣より若干の養分を攝取すと思像せらる。下級の神祇は時としては天降りてその名譽の爲に寄進せる神像に憑り神廟に住むことあり。時としては地上に下るものからなほ諸天をその光榮の本據とし徴象とす。日月星辰の不變の時序はその永劫的存續の證據としてジュリアンの認むる

哲學者の狂妄

所その永劫性は下級神祇の業にあらすして大自在天王の巧作たる明證なり。プラト派の組織には現世界は不現世界の一模型なり。天體は神意によりて示さるゝ如く宗教的崇拜の最價値ある物象と思惟さる。生々の威力を以て宇宙に光被し宇宙を維持する太陽は、ロゴスの赫々たる代表として全智神父の正理慈悲の形象として正しく人間の尊信を要す。何の時代に於ても至醇なる天啓の缺亡は熱誠の強き迷語と欺満の模倣術とを以て補はる。ジュリアンの時代に當り、此術單に異教の僧侶が淫亡を支持する爲に用ひしとせば、宗教的人物の利害習俗の爲に恐らく若干の寛假を許し得む。然るに哲學者が人類の迷信的輕浮を濫用し新プラト派の魔法奇術を以て希臘の神異を助くるに至りては寧ろ愕く可く賤しむ可しと爲す。彼等は自然の次序を制し、未來の秘密を探り、下級の惡魔を役使し、上級の神祇を見且悟り得、精神をその物質的範圍より離脱せしめて此不朽の一部を無量限の神靈に契合せしむと誇稱したりき。

ジュリアンの敬虔無異の好奇心は哲學者に容易に捷利を得可き希望を與

へき、この年少徒弟の地位は哲學者は最必要なる後果を齎し得ればなり。禁壓されし移轉的學堂をベルガムスに有せしエデシウスの口よりジュリアンはプラト教理の階梯を受けしが、此尊き聖者の氣力衰へて弟子の熱烈勉勵進歩に適せざるや、その兩高弟クリサンセス、ユセビウスを以て老師に代へたり。此等哲學者は各その分を盡くして暗示鬭争を以て巧に熱望者の急需を刺戟し之を最大膽に最熟練なる幻學の師マクシムスに致せり。ジュリアンがその手によりて竊にエフネスに入門式を擧げしは二十歳の時なり。その雅典滞在は哲學と迷信との不自然的合同に力あり。希臘崇拜の一般的衰頹の間になほ幾干か原始的の神聖の遺跡を留存せるエレウシスの不思議に嚴肅なる入門の特許を得しが、後來神異の儀式と犧牲とによりて聖化の大業を成就せんためにエレウシスの僧侶をゴール廷に招聘せるを以てジュリアンの熱心を見る可し。此等の儀式は深夜洞穴の奥に行はれ、神異の犯す可からざる秘密は宗徒の慎黙によりて秘せらるれば、愉快と智識の幻影とが一陣の天光に乗じて來るまで熱中者の五感若しくは想像に

現する畏しき響音、猙獰なる幽鬼は予輩の記述し得ざる所なり。ジュリアンは時としては最正直なる狂妄の徒の性格に見る可き、否少くとも疑ひ得可き敬虔なる虚欺偽善を示すものから、なほエフネス、エレウシスの洞穴にて深くその心に浸潤せしは眞摯深遠不易の熱信なりき。この際時より一身を以て神祇に捧げ、征戰政務研究がその時間の全部を占領せりと見ゆる間に、夜中一定の時間は依然個人的敬神の爲に用ゐられき。將軍として哲學者としての峻厲の風習を飾りし節制は宗教的禁欲の嚴格煩鎖の戒律と連絡し、ジュリアンが特殊の時日にその産土神に對しては不敬とす可き或特殊の食物を拒みしはパン若しくはマーキユリー、ヘクト若しくはイシスの名譽の爲なり。この任意的斷食によりて天神の屢次の示現に對して五感と理解とを準備せり。ジュリアンが居常男女の神祇と通交し、神祇はその眷顧する英雄と語るを樂しみて天降り、手に觸れ髪に觸れて徐に眼を驚かし、危難の來逼を豫戒し、誤失なき神智を以て生涯のあらゆる行動を示導し、ジュリアンも亦此天來の客に馴れて直にジビターとミネルヴとの聲を聞き別けア

ボロとヘルクレスの形貌を見別けたりとは、ジュリアン自は恭謙語らざるも、其親友たる辯客リバヌスより予輩の聞く所なり。禁欲狂信の結果として斯る睡中否醒中の幻覺は、皇帝を殆んど一埃及僧の地位に下す可し。アントニー若しくはパコミウスの無用の生涯は實に斯る無益の職に費されたればなり。ジュリアンは迷信の夢破れて戰場に臨み、羅馬の敵を撃破せる後はまた帝國の良法を企畫す可く若しくはその天才を文學哲學の優雅なる研究に用ふ可く靜に帳裏に入るを常とせり。

帝の宗教的詐伴

ジュリアン背教の重要な秘密は交誼と宗教との神聖なる紐帯を以て結合せる入門者の忠誠に委託せらる。快き流説は古代崇拜者間に流傳しジュリアン前途の興起は帝國の各州に於ける異教徒の希望となり希願となり瑞兆となる。皇家歸依者の熱誠と有徳とによりて所有禍害の療治所有幸福の復興を期すれば、ジュリアンもその敬虔なる所期の熱望を拒まずして、國家の爲にも宗教の爲にも有用なる地位を獲得せんとの大志を公言せり。然れどもこの宗教は、輕佻にも或はジュリアンの命を助け或はその生を脅

すコンスタンチンの繼嗣によりて敵視せらる。魔法占星術は之を畏るゝ専制政府の下に嚴禁せらる。假令異教徒にして心ならずも迷信の實行を得るとも、ジュリアンの地位は一般解禁令より除かれけむ。間もなく背教者は推定皇嗣となる。基督教徒の正常なる懸念はたゞその殞落によりて止む可し。然るに殉道者よりも英雄の光榮を欲せし年少皇子は自己の信教を隠蔽して安全を圖り、多神教の寛大なる性情はその内心嫌惡せる一教派の公の禮拜に参加するを許せり。リバニウスはその友の偽善を咎む可きに非ず稱す可しとなす。曰く、垢穢を蒙りし神像の再び莊嚴の廟中に置かるゝ若く、眞理の美は一びその教育の過誤より淨められてジュリアンの心裡に置かれき。その感情は易變せりと雖も之を公告するは危険なればその行動は依然舊に據りき。獅子の皮を假りしエソップの驢とは異りて、わが獅子は驢の皮を被るの已むなきに出で、理性を懐きながら暫く巧慮と必要の法に従ひしのみと。ジュリアンの詐伴は、エフネスの秘密の門より内亂の劈頭に自基督及コンスタンチウスの相納れざる仇敵と公言せしまで十年以上に

互れり。此隠忍は熱心を増せり、嚴肅の祭式に基督教の集會に參列するの任務を完うするや否、ジュリアンはジビター、マーキリーの家籠に自由に燒香す可く戀人の如く急ぎ歸れり、詐伴の行爲が公明なる心の苦痛たる如く、基督教の自稱は、その心の自由を壓し、人性の最尊き兩質たる眞實と勇氣とに反する行動を強ゆる宗教に對してジュリアンの嫌惡を増進せり。

ジュリアンの傾向は、その伯父が羅馬帝國に確立して洗禮を受けし新宗教よりも、ホマーとスピオとの神祇に在り。然れども哲學者としては、改宗者の多數により、豫言の鎖扼により、奇蹟の莊麗により、論證の重大によりて維持せらるゝ基督教よりの背離を辯ずるを要す。波斯役の準備中に帝が心力を傾けし述作は、久しくその心裡に熟考せし此等の論議の實質を包括す。その斷片は帝の勁敵たりしアレキサンドリアのキリルによりて抄録され保存されしが、それは機智と學問、詭辯と狂熱との甚奇異なる混淆を示せり。辭句の優雅作者の尊貴は天下の注意を惹き、基督教の敵の名簿中にてポルフィリの盛名も更に大なるジュリアンの勳功若しくば聲譽の爲に壓倒さる。

帝の基督教排斥の

教徒の心は爲に惑ひ爲に愕き、時として不均衡の對抗を敢てせんとする異教徒は、宣敎皇帝の此知名の作を以て偽瞞的反論の無盡藏と爲し得べし。然れども斯る神學的勉學の不斷の勞作中に羅馬皇帝は論争の神の偏狹なる私見感情に陥れり。自宗の教義を維持傳播せん爲には、回し難き責任を約し、論争の武器を用ふる力と技術とを竊に稱讚しながら、飽くまで理想と辯論の力とに抗敵する敵黨の眞摯を疑ひ、理會を貶せる傾向あり。

二、帝の宗教政策

宗教の自由平等令

基督教徒はジュリアンの背敎を畏怖し、輕侮せしが、恐るゝ所はその論議よりも實力なりき。帝の燃ゆるが如き熱心を知れる異教徒は、恐らく迫害禁遏の焰が忽に神祇の敵に對して舉らんことを心急しく期待しけむ。ジュリアンの憎惡は前代諸帝の無經驗なる憤厲には未知られざりし殺戮拷掠の殘忍なる新法を創案す可きを豫期しけむ。然るに自家の名譽と公安人權とを重んぜし皇帝の細心なる寛仁は、教争の希望並に畏怖を失望せしめし

が如し。往史と回想とに教へられてジュリアンは假仰肉體の疾病は時として暴を以て治し得んも、心中の誤迷は決して鐵火を以てその本を抜き得ざるを知れり。拒む犠牲は強ひて祭壇の下に引き得るも、その心はなほその手の神聖なる行爲を嫌惡す。宗教的頑迷は反對によりて固く且大に禁壓一び緩めば屈服者は忽悔悟者となりて復歸し、反抗者は忽聖徒殉道者の光榮を受く。若しジュリアンをしてデオクレチアン及其同僚の不成功なる殘忍を再びせしめなば、自暴君の稱を以てその名を汚し、異教有司の峻烈によりて力と數とを加ふる加特力教會に新光榮を加へたらむ。斯る考慮と不確立なる治世の休養とを要するために、ジュリアンは政治家としても哲學者としても價値ある一命を以て世を驚かしたり。帝は羅馬の全民衆に自由平等の赦免を布けり、その基督教徒に對する唯一の苛法はその同胞に偶像信者異教徒の醜名を加へて之を虐遇するの權を奪ひしとなり。異教徒は總ての神廟を開く可き優渥なる公許、否寧ろ公然の命令を受け、コンスタンチンとその諸子との治世に受けし壓制の法令專姿の苛責より直に

神祇伯たる
帝の多
神教復興

救はれたり。同時にアリウス派の君王の爲に放逐されし基督教の卑劣僧侶は召還されて各自の本寺に復し、ドナツス、ネヴチウス、マセドニア、ユノミアの諸派、ニケア會議の教條を奉ぜる者は悉く恩命を受けたり。此徒の神學的爭議を理解し嘲笑せるジュリアンは、その激烈なる對戦を見る可く敵派の諸首領を宮中に招く。論争の喧囂時に帝を怒らしめ、朕に聞け、プランクも朕に聞けり、アレマンニもと叫ばしむ、而も帝は直に今や更に頑強不靈の敵を前にせるを看取せり、演述の力を盡くして共同、少くも平和を説きしものから、その御前を退き去るや、帝は基督教徒の合同、毫も恐るゝに足らざるに満足せり。公平なるアマミアヌはこの陽粧の仁慈を教會の内部的分裂を作さんとの希望に歸せり、基督教の根柢を覆す狡計はジュリアンの帝國の古宗教を復興せんとせし熱心と離れ難き關係あり。

ジュリアン帝位に即くや、前代の往例によりて神祇伯の職掌を握れり、それは單に皇帝の偉大を示す最光榮ある尊稱としてに非ず、また神聖にして重要な職官として帝はその職責を十分に實行せんとせり。國務の多端に妨

げられて毎日臣民の公共敬神に列し得ざれば、帝は宮中に産土神たる太陽神の籠を設け、國中に諸神祇の像と祭壇とを造り、皇室の各室は宛も莊麗なる神廟の如し。帝毎朝犠牲を具へて光耀の父を祀り、太陽地平線下に沈む時また他の犠牲の血を濺ぎ、太陰星辰夜の神は各その尊信を受く。各神特殊の祭日には嚴肅なる祭儀を備へて必ずその男女神祇の廟に詣で、有司臣民の爲に崇敬敬神の例を示す。紫袍を掛け禁衛の黄金の楯に圍繞せられて帝王の尊容を維持せずして、神祇の崇拜に寄與する賤役に服す。祀僧下級の司祭神廟の舞姫等の神聖なれども放恣なる稠衆に雜りて帝は薪を運び火を吹き刀を把り犠牲を屠り鮮血に染みし手を殊死の獸の腹中に挿んで臟腑を牽き出し暗熱せるアルスベクスを以て未來を推卜せり。異教徒中の最賢者はその異常の迷心細心を、〜 P. 獸の臟腑を見て吉凶を卜する術。失ひ適宜を越ゆるを誹る。嚴格なる經濟の原則を實行する君王の世に宗教的崇拜の費用は歳入の大部分を占め、祭壇に血を濺ぐため最稀有の最美麗の禽鳥は絶へず遠地より送致され、ジュリアンが一日に百頭の牛を屠る

國教復興の計畫

ことも亦屢なれば、若し帝にして波斯に勝ちて歸らんには有角の畜類は跡を絶たんと戯語行はる。而も皇帝の手からまたは命を傳へて羅馬世界のあらゆる靈場に致す莊麗なる寄進、或は星霜久しきたため或は近く基督教徒の食婪の爲に廢頽せる古神廟の修繕粉飾の費に比ぶれば、上述の費は物の數ならず。敬虔なる帝の前例獎勵寛大に倣ひて諸市諸家競ひて廢絶せる宗儀を復舊す。リバニウス狂喜して曰く、世界至る所宗教の捷利を見る感謝の光景、火を焚ける祭壇、血の垂る犠牲、香の烟、畏怖も危険もなき僧侶、豫言者の嚴肅なる行列、祈禱音樂の聲は高山の嶺に聞へ、同じ牝牛は神祇の犠牲となりまた愉快なる信徒の晚餐となる」と。

然れどもジュリアンの才力は、神學的旨義、道德的觀念、宗教的訓練なき宗教の復舊計畫に適せず、その宗教は急に衰頽に奔りて何等鞏固着實の革新に耐へず。神祇伯の職權は、その皇帝の威嚴に併合せられてより後は特に羅馬帝國の全部に及ぶ。ジュリアンはその大計畫の實行に耐ゆと視し、僧侶哲學者を諸州の代教師に任じ、若し宣教書と名く可くんば、その書は帝の希望

計畫の甚奇なるを示せり。各城市は身分を問はず苟くも神祇人類の愛に關じて最名聲ある者を以て宗教的團體を組織す可しと命ぜり。更にいふ、「彼徒若し醜犯あらば神祇伯より譴責罷免を受くるも、その地位に在る間は官民の敬尊を受く可し。家庭に於ける服裝の質素はその謙遜を示し、神事に於ける禮裝の華麗はその威嚴を示す可し。祭壇の前に宗務を執るや、一定の期間廟外に去るを得ず、一日と雖も國家民人の昌安の爲に祈禱犧牲を忘るを得ず。神事には心身の清白を要し、假令神廟を出で、日常生活職業に復する時も、他の市民よりは禮式徳義に於て優れざる可からず。その談話は純潔に食事は質素に、交友は名譽ある者たる可く、その時として會場若しくは宮殿に出づるは、唯正義または仁慈を求めて得ざる者の爲に代理者としてなる可し。その學問亦職業の神聖に伴ふ可し。瑣猥の譚喜劇諷刺の類は書齋より驅逐さる可く、たゞ歴史哲學の書籍然り事實に本く歴史と宗教に連同する哲學とに限る可し。エピキルス派懷疑派の不敬虔なる學說を排除す可きもピサゴラス、プラト、畫廊派の諸哲學は、何れも皆神あ

りて、世界はその力によりて治められ、その善は所有世俗の幸福の源たり、人心の爲に未來の賞罰の境を設くと説くを以て熱心に之を學ばざる可からずと。神祇伯帝は施與懇待の義務を、最説服的言辭を以て説き部下の僧侶に此徳を博く流傳す可きをいひ、貧者には公費を以て補助し、諸市に救療院を設けて郷土宗教の別を論せず貧窮者を收容せんと、の決意を宣す。ジュリアンは基督教會の賢明慈愛の規程を見て羨望し、獨り施與慈惠を行ひて得たる基督教徒の聲譽利益を奪はんと、の意を甚露骨に告白せり。帝はまたこの敵教の成効に必要なりし諸種の宗法規程をも模倣せり。然れども斯る革新の想像的計畫にして實現せんも、その強制的不完全なる模倣は基督教の名譽たる可きほどに異教の利益たらざらんとす。靜に祖先の遺法を守れる異教信者はこの外風の移入を喜ばずして寧ろ驚けり、その短治世の間ジュリアンは屢々自黨教徒の熱誠の足らざるを嘆きぬ。

ジュリアンの熱心はジュピターの同朋を己が個人的友人同胞と見、不公平にも基督教徒の堅實の徳を看過しながら、皇帝よりも神祇を尊ぶ信仰堅固の

異教徒を稱揚し褒賞せり。若し斯る徒にして希臘の文學宗教に通ずれば
 産土神中にミズを列するジュリアンの友たり得。帝の採用せる宗教にては
 敬神と學問とは殆んど異語同義なり。詩客修辭家哲學者は嚮にコンスタン
 チウスの信任を得し卑劣の空位を占めんと朝廷に雲集す。帝は血脈の縁
 よりも同門の誼を神聖なりとし、嬖寵を魔法算命の學に通曉せる聖者の間
 に搜し、未來の秘密を明にすと稱する偽購者にして現在の名譽と權勢とを
 得ざるは莫し。哲學者中マキシムスは帝の信任を得て最高位に居り、帝は
 内亂の當時自己の行爲所見宗教的計畫を悉く之に示して疑はず。そのコ
 ンスタンチノブルの皇宮に入るや、直に禮を厚くして技學の友クリサンチ
 ウスと與にリチアのサルチスに滞在せるマキシムスを召す。細心にして
 迷信なるクリサンチウスは算命のトによれば最恐る可き兇相を示せる
 此旅行を辭せしも、狂妄の型更に大膽なる其友は自己と皇帝との希望に適
 ひて見ゆる神許を強ひて得るまで質神卜算を固執しき。亞細亞の諸城市
 を經るマキシムスの旅行は哲學的虛榮の捷利を示し所在の有司は君王の

友を迎接するに名譽ある接待を競ふ。マキシムス到着の報至りし時帝は
 議院に演説をなし、直に之を中止して出で迎へ、抱擁の後手から之を議
 場に導き、この哲學者の訓戒によりて利益を得しことを公言せり。かくて
 直にジュリアンの親任を得、商議を左右し得しマキシムスは不知不識に宮廷
 の弊風に染めり。服装は美を加へ、尊を加へ、次の治世にはプラト
 の弟子が少時の眷遇の間に巨富を積みて不名譽なる審問に會へり。ジュリ
 アンの撰擧さてはマキシムスの成功によりて朝廷に招かれし此他の哲學
 者詭辯學者も能く其清白と名譽とを持続せしは鮮し。黄金土地家屋の寬
 大なる資給は此徒の貪婪を飽かすに足らざるも、その貧困清廉の職分を知
 れる人民は之を輕侮せり。ジュリアンの明は常に誤らずと雖も、技能の尊敬
 す可き此徒を貶すを欲せず、帝は不用意と不定見との二重の誹謗を免れん
 と欲し、俗衆の眼に學問宗教の名譽を下さんことを恐れたり。
 ジュリアンの恩恵は、祖先の崇拜を固執する異教徒と細心に君王の宗教に
 歸依せし基督教徒とに殆んど同じく下れり。新改宗者の才能は帝の精神

迷信虚榮の大體を満足せしむ、若し各人をしてミダスより富ましめ各市を
 してパピロンより挽回し得るに非ざれば、自人間の恩主と爲す價なしとは、帝
 なる革命より挽回し得るに非ざれば、自人間の恩主と爲す價なしとは、帝
 が宣傳の熱心を以て公言せし所なり。人性を窮め羅馬帝國の富を擁せる
 一君王は自己の論議約束報賜を各級の基督教徒に用ひ能ふ可く時に應ぜ
 る改宗はその過失を償ひ罪犯を滅し得。軍隊は專制權の最有力なる機
 關にしてその同心なくしては所有行動は危険不成功なれば、ジュリアンは最力
 をその宗教改革に用ひたり。ゴール軍は捷帝の運命に従ふが如く信仰に
 従へり、コンスタンチウス殞落の前既に帝はその屢陣中に行ひし牛百頭
 の大犠牲を軍衆が熱心と狼餐とを以て助けしことを友に語りき。十字架
 とコンスタンチウスの旗下に訓練されたる東方軍には更に巧妙高價の説
 服法を要す。嚴肅なる公祭の日、帝は軍衆の忠誠を受け功勳を賞す。玉座
 は羅馬及共和國家の軍事的徵象を以て圍繞され、尊き基督の名を十字旗よ
 り削り去り、戦役尊嚴異教的迷信の徵象を巧に混和して、忠誠の臣従をして

皇帝の一身若しくばその像に敬禮する時、自偶像崇拜に陥らしむ。兵士
 は相踵ぎて帝に拜謁するに、位階功に應じて、各帝の手より寛大なる資
 賜を受くる前に祭壇に燃ゆる火中に幾滴の香料を投ぜしめらる。或基督
 信者は之を拒み、或者は悲むも、大多数は黄金の光に惑ひ、皇帝の威に恐れて
 有罪の焼香を行ひ、爾後祇禮拜の固執は義務と利害とのあらゆる考案に
 よりて強要せらる。屢此方を行ひ且スキシア族の一半を買收し得る巨費
 を投じてジュリアンは、漸次にその軍隊には神祇の想像的訶護を自家には羅
 馬軍の確實有効の支持を贏ち得たり。而して異教の復興と獎勵とは適ま
 基督教中には前には一時的利害の爲に之を歸依し、のちジュリアンの後嗣の
 世には復その信仰に復歸する假稱の信徒甚多かりしを證して餘ありとす。

三、ジェルサレム神廟復興の計畫

熱心なる皇帝は祖先の宗教を復興流布するに不斷の努力を用ふるとと
 もにジェルサレム神廟再建の大企畫を抱けり。猶太民族若しくは其教徒に

帝と猶太族

下す震翰を諸州に發して、猶太族の不幸を憐みその壓制者を罪しその堅實不易を褒め、帝自その恩主と號し波斯役より歸り來らばジェルサレムの聖府に於て全能の神に感謝的誓盟を捧げんと敬神的希望を公言せり。此不幸なる亡民の盲目的迷信と下賤なる屈從とは哲學的皇帝の輕侮を得可きに却りてジュリアンの友誼を得しは飽くまで基督教の名を憎みしに因れり。石女に等しき猶太宗會は離叛せる基督教會の多生を羨望すれど、その力はその憎惡と相伴はざればその先生は唯背教者の暗殺を喜び、その動亂的喧擾は屢異教官吏の隋眠を驚かしき。コンスタンチン帝の世猶太族はその離呼せる兒輩の臣從となり、且久しからずして内部虐主の峻烈を喫せり。セゾルスの許可し確立せる特別免除は基督教諸帝によりて漸次に撤回され、パレスタインの猶太族の暴動はコンスタンチウス廷の卑涉奄豎が創意せる有利なる壓抑を正しくせんとせり。尙覺束なき法權の行使を許さるる猶太の主教はチベリアスに駐錫し、パレスタインの接近諸市には契約の國土に執着せる遺民多し。而もハドリリアンの勅旨は新に勵行され、遂に聖

ジェルサレム

府の城壁の十字架の捷利基督教徒の熱心に汚がさるゝを望見したり。磽确不毛の地方にジェルサレムの城壁は約三英里の橢圓形をなしてシオン、アクラ兩山を包む。南に面してシモン山の高地に立てるは上市とダブド嶽なり、北はアクラ山の廣き頂に下市ありて、モリアーと呼ぶ丘の一部は人工を以て平にし猶太民族の國家的神廟を設く。チツス、ハドリリアンの力が最後に神廟を毀ちて以來永久の禁止の象として靈域の上に鋤頭を懸け、シオンは荒れ、下市の遺墟には附近のカルブリー丘に蔓延せるエリア殖民の公私建築充ち、聖地は偶像教の紀念を以て濼かされ、故意か偶然か、基督の受難復活を以て神聖視されし地點にエヌスの一龕建ちたりき。風雨三百年、このエヌス龕はコンスタンチンの命によりて撤せられ、土石を除きて聖冢再び人間に現はる。最初の基督教皇帝はこの神異の靈場に莊麗なる寺院を創建し、帝の博愛の結果は苟くも司祭豫言者神子の足跡を印せる各地點に及びき。贖身の原始的紀念を回想せんと熱心なる希望は太西洋より東方諸國

に至るまで踵ぎ來る巡拜者の群をジェルサレムに牽引せり。年の輕信と近き改宗の熱烈の情とを合せしが如き皇后ヘレナの例は巡拜者の敬神に權威を加へぬ。古の智識光榮の紀念す可き場を訪ひし聖者英雄はその地の天稟の感應を自白し、聖家の前に跪く基督教徒はその澄澗たる信仰と熱烈なる敬虔とを神靈の直接の威力に歸す。ジェルサレムに於ける僧侶の熱心は、恐らくその貪婪は、斯る有利の參拜を増進せり。疑なき口碑によりて記憶す可き各事件の舞臺を定めき。基督の受難に用ひられし機器を示せり、基督の手脚胸側を貫きし釘鎗頭上に冠らせし荆冠繫がれし柱、而して羅馬軍隊の旗面に基督教の徽象を掲げし皇帝の世に發掘されし受難の十字架等是なり。この異常の保存時を得し發見に必要なりと見らるゝ斯る不思議は異論なく漸く世に流傳せり。更生祭の日曜に嚴肅に拜觀せしむる眞の十字架はジェルサレム卑沙に保管され、卑沙獨りその小斷片を與へて巡拜者の好事的熱心を満足せしむれば、巡拜者は黄金珠玉を以て之を購ひ誇りに各各自の郷國に齎し去る。然れどもこの有利の商賣は直に盡く可け

れば不可思議なる此木は生長の秘密力を有しその實質常に滅じながらなほ完全不壞なりきと想像するを便とす。靈地の威力と不斷の不思議の信仰とは道德並に信仰の上に或有利なる影響を生じ得べく期待されけん。されど、嘗にジェルサレム市街に事務享樂の紛擾踵出するのみならず、聖府の民も奸淫偷盜崇像毒殺人等所有不徳の種類に馴れしことは、宗教史家の最尊敬すべき者も尙且否む能はざりき。ジェルサレム教會の富昌名聞はアリウス正教兩派の候補者の野心を煽り、寂後聖徒の號を以て飾られしキールの徳はその宗教的威嚴の獲得よりも寧ろ行使に發せり。ジュリアンの虚榮野心はジェルサレム神廟の前代の壯觀を復興せんと志す。永劫破壊の宣言モセス法の全體に對して宣達せられきとは基督教徒の確説する所なれば、詭辯の天子はその企畫の成功を豫言の信仰天啓の眞理に對抗する公明なる異議と爲さんと欲せり。帝は猶太教會の精神的崇拜を悦ばずと雖もモセスの制法を承認す。猶太の地方的國民的神祇は唯神祇の數を増殖せんことを希ふ一多神教徒によりて衷心より歡迎せらる。

ジュリアンの流血的犠牲を嗜むの太しきは奉獻祭に二萬二千頭の牡牛と十
 二萬頭の羊を上つりしソロモンの敬神と競はんとす。斯る考慮は帝の企
 畫を左右せしも、波斯役の地遠く勝敗不定の事案は性急なる帝をして直接
 に緊要なる利益を妨げ得ず。直にモリヤ山嶺に堂々たる神廟を造築し
 て附近のカルヴリー丘上の復活寺の莊嚴を奪はんとし、僧侶の階級を組織
 して對手たる基督教の術策を看破し野心に頓頓せしめんとし、多數の猶太
 殖民を招致してその峻烈なる狂熱を以て異教政府の敵對方策を助けしめ
 ん否之が豫備となさんと欲せり。帝の友人中皇帝及友人の名が相容れざ
 る莫しとせば、ジュリアンによりて第一位に推されしは有徳博學のアリピウ
 スなり。アリピウスの仁慈は嚴正なる正義と男らしき剛氣とを兼ね不列
 顛の政治に才能を揮ふ間にサッポオの小詩の調和柔慢を模する文藻あり。
 帝が最不用意の輕佻をも最眞摯なる商議をも腹藏なく吐露する此宰
 臣は善美を盡くして、ジュルサレム神廟を復興す可き重大の命を受け、その精
 勵はパレスタイン太守の勤勉なる援助を要して之を得たり。猶太族は偉

神廟復興の絶望
 神に與て
 絶望する

大なる救主の召命に應じて帝國の全州より祖先の聖山に應集し、その傲慢
 なる捷利はジュルサレムの基督教徒を驚かし怒らしき。神廟再建の希望は
 何の時代に於てもイスラエルの子孫の至情なり。此幸福の日々逢遇して
 男子は慾を忘れ婦人は弱を忘れ銀の鋤鶴嘴は富豪の虚榮によりて寄附
 され、塵土は絹紫の衣を以て撒ばる。何れの財囊も寛大なる寄進に開かれ、
 如何なる手も神聖なる勞役を分擔し、大皇帝の聖旨は全民族の熱誠により
 て實行されたり。

されど當時權力と熱誠との共同作業も功を爲さず、今や麻詞末教の一觀
 宇の地と化せる猶太神廟の地はなほ荒廢の光景に在り。僅にジュリアンの
 一生の最後の六月に企てられし熱心なる造營の中絶は恐らく皇帝の不在
 と殂落基督教治世の新令によりて説明されむ。然るに基督教徒は此記憶
 す可き對抗に於て宗教の名譽が或奇蹟によりて防がれきとの敬虔なる自
 然的所期を娛しめり。地震大風地裂が神廟の新基礎を顛覆せしことは多
 少の差異あれど當時の尊重す可き證據によりて證せらる。ミランの卑涉

アムプローズがセオドシウス皇帝に致せし書牘はこの事を記して猶太族の峻烈なる憤怒を買ひ、雄辯なるクリソストムも之を記してアンチオク會議の長老連の記憶に訴へ、グレゴリー・ナジアンゼンは同年内にこの神異を公にせり。就中グレゴリーは此異常の事件は不信者も争ふなしと大膽に公言し、その確認は奇異にもアマミアヌスマルセリヌスの拒み難き立證によりて確定さる。君王の偏見を受けずしてその徳を慕へる此哲學的將軍は自作の公明なる現代史中に、エルサレム神廟の再建を妨げし異變を載せたり。曰く、「アリピウスが州太守の援助を得て精勤工事を督するに當り、恐ろしき火球基礎に近く爆出する度々、役夫を燒燬して場に近かしめず、かくして頑強に之を遠地に驅逐し、終に計畫を中止せしめたり」と。斯る記事は信仰の心を滿悦せしめ、輕浮の心を驚かす可し。されど哲學者は更に公平なる知識的觀察者の原始的證據を要す。この緊要の際に何等か自然の奇事起りて實在的奇蹟の結果を生ぜしならむ。而してこの光榮ある事件はエルサレム僧侶の敬虔なる方便と基督教世界の敏活なる信用とによりて

速に改作され鋪張され、二十年を経て神學的論争を念頭に置かざる羅馬の一史家をして莊重なる奇蹟を以てその著作を飾らしめけむ。

四 ジュリアン治下の基督教徒

猶太神廟の復興は窃に基督教寺院の荒廢と關係す。ジュリアンは一般赦免が己の正義より出でしか仁惠より生ぜしかを論ぜず、尙信教の自由を維持せり。帝は生涯の最大切なる目的を謬れる不幸なる基督教徒を憐むと稱するも、此憐愍は輕侮によりて貶され、輕侮は憎惡によりて烈しく、ジュリアンの感情は一び君主の唇より出づる時は深創を負はすに起る嘲笑的機智の調に現はる。基督教徒は救世主の名を負ひて光榮となすを知る帝は、之に抗するに名譽少きガリレイ派の稱を以てし、人間には嫌ふ可く神祇には厭ふ可き狂妄の一派なるガリレイ派の愚によりて帝國は滅亡に漸せるを公言し、狂疾者は時としては暴療法を以て治す可きを公令に暗示せり。宗教感念の差によりて、臣民の一部は眷顧友情を得るに反して、他の一部は

信教自由
下に不存
平すの

唯帝の正義は従順なる臣民に拒まれずとの普通一般の恩澤に浴し得る程に偏狭なる差別はジュリアンの心に入れり。専壓の主義によりて帝はコンスタンチン父子が基督教會に許るせし公租免除の恩典を自己の教派の高僧に許るせり。幾多の方便勞力を以て建設せし基督教僧侶の名譽特權の傲慢なる組織は蕩平され、遺言寄進の希望は嚴法を以て停止され、僧侶は臣民中の最後最賤の階級に投ぜらる。細流の大望貪婪を制止するに必要と認められし斯る規程は後間もなく正教派の君王によりて亦摸倣せられき。細流が政策によりて獲得しさては迷信によりて濫用せし特殊の權能は國教の僧侶に限られざるを得ず。然れども立法者の意は不公平と感情とを免れず、ジュリアンの政策は基督教徒を世人の眼底に尊く見せつる世俗的名譽と利益とを悉く剝奪するを目的とせり。

基督教徒の學堂禁止

基督教徒に文法修辭を教ゆるを禁ぜし法は當に正當峻烈なる非難を受く可し。この偏頗壓制の手段を正しとせる帝の本心はその生涯奴隸の穢黷、諛人の稱賛を得可し。ジュリアンは希臘の言語宗教に混同して用ひられ

し一辭の曖昧なる意義を濫用し、默信の功徳を揚ぐる徒は學問の利益を要求し享受するに適せずと爲し、ホマーデモスゼネスの神祇を推尊するを拒む輩はガリレー派の教會中に路可馬太の註釋に没頭して可なりとせり。羅馬世界の總ての城市にて、少年の教育は文法修辭の師に托せられ、その師は有司によりて擇ばれ、國費を支給され、幾多の利得名譽ある特權を有す。ジュリアンの令は醫師及あらゆる技藝家をも含み、自候補者の准許を保留せる皇帝は基督教徒の最博學なる者をも法律によりて誘惑處罰するの權を有す。更に頑強なる教師の自辭去して異教派の詭辯者流敵なき教界を確立するや、ジュリアンは天下の少年をして自由に公學堂に就かしめ、由て以てその和心裏に文學と偶像教の印象とを遺す可しとなせり。若基督教少青年の大部分にして自己の狐疑若しくば父兄の逡巡によりてこの危険なる教育法を受くるを躊躇せば、同時に教育の恩澤を斷念せざるを得ず。ジュリアンは斯くして數年の間に基督教會は原始的質撲に復す可く、當世の辯學の十分なる股分を有せる神學者の後には、自派の教義の眞理を

擁護し多神教の幾缺點を暴露する能力なき盲目無智の妄信徒によりて繼承さる可しと期待しき。

基督教徒の社会的地位

基督教徒の富力智力権力の利を奪ふはジュリアンの目的にして企圖たりしこと疑なし。然も信用利得の所有職掌より驅逐するの不公平は、ある積極的法令の直接の結果よりも寧ろその一般政策の結果たりしが如し。特に優超の者は自ある異常の除外例に屬す可きも、基督教徒有司の大部分は漸次に國家軍隊州吏の地位を失へり。その未來の候補者たる希望は、正義戦鬪の劍を用ひるは基督教徒に不合法なりとの意を示して、偶像崇拜の徵象を以て陣營政廳を衛る帝の不公平なる宣告によりて絶へたり。政府の権力は祖先の宗教に熱中せる異教徒に委任せられ、帝の撰擇は屢卜算の術によりて定まれば、その最神祇の意に適へりと爲す嬖寵も未必ずしも人間の稱賛を得ず。敵黨の治政の下に在りて基督教徒は苦しむ所多く、恐るゝ所は更に多し。ジュリアンの性情は殘虐を惡む、世界の衆目に露す名聲の懸念は哲學的皇帝をして近く自制定せし正義寛容の法を敢て侵犯せしめ

異教神廟の復興に基督教徒の處罰

す。然れども地方の有司は名聲の少き地位に在り。隨意的權力を行使するに當りて此徒は皇帝の命令よりも寧ろ其意中を肘度し、殉道の名譽を得せしむるを許さざる教徒に對して敢て秘密の壓制を行ふ。自己の名に於て行はるゝ不正を力及ぶかぎり隱蔽する皇帝は、有司の處置に對して温和なる譴責と物質的賞賜とを以て眞意を表せり。
有司が用ふる最功果ある壓制の機關は、基督教徒をして前代にその破壊せる神廟に十分なる償報を爲さしむる法令なり。勝ち誇れる基督教徒の熱烈は必ずしも常に官權の裁可を待たず、特權を恃める卑劣は屢大衆を率ゐて暗黒なる君王の城壘を攻撃破壊したりき。皇帝僧侶の領邑を増大せし公收の地は明白に處分され容易に恢復されき。而も此等の土地に異教崇拜の遺墟に基督教徒は屢自己の宗教的建築を設けしかば、神廟再建の爲にはまづ此寺院の撤廢を要すれば、一派は帝の暴命を嘆き罵るとともに他派は帝の正義敬神を稱揚せり。土地の清められし後夷平されし建築基督教徒の用に歸せし裝飾の代價は巨額の負債と無れり。侵害者は此積

債を支辨するの力なくまた其意なく、立法者の公平は平等適宜の酌量を以て兩造を緩和するに足らず。至帝國殊に東方はジュリアンの苛法の爲に混亂し、異教の有司は熱心と報復とに急にして羅馬法律特殊の峻勵を濫用して資財なき債務者には其身體を以て代へしむ。前代にアレクサンドロスの卑劣マルクは説教よりは有効なる武力を用ひて宣教に努めき。是に於て有司はその破壊せる一神廟の全價格を要求し、その貧窮を知るや最廉の代償の約を以て唯卑劣の不撓の精神を屈せんとす。乃老僧を執へ責め髻を抜き赤裸々となして肌を塗り網に盛りて空際に懸け、毒蟲の刺し叙利亞の烈日の照らすに任す。此高處よりマルクはなほ自己の罪を光榮とし刑者の怒を罵りしが終に刑吏の手より救はれ神の捷利を樂しむ可く放たれき。アリウス派はこの敬虔なる懺悔者の徳を稱へ、加特加派はその連縁を要求し、耻辱の侮恨を受け得し異教徒は斯る無用の殘虐を再びせず。ジュリアンは其命を

q、アレクサンドロスマタレスタンともいふ、エメサ(ヘムス)とエビフアニア(ハマト)の兩地より各十六哩の地點に在り。叙利亞王セレウコス・ニカトルの建置に係るといふ。

ダフネの神廟と聖林

釋せり、而もアレクサンドロスの卑劣はジュリアンの年少を助けしと雖も、後人は帝の仁慈を稱するよりも負義を罪す可し。

アンチオクを距る五哩、叙利亞のマセドニア朝諸王は異教世界の崇敬の最麗境の一をアポロン神に寄せたりき。光耀の神の爲に莊麗なる廟宇を造營し、黄金珠玉を飾り希臘藝術の精妙を盡くせる宏大の殿堂中に殆ど充實する巨神像を立つ。神像は身を屈し手に黄金杯を持ちて酒を地に澆ぐ、その狀宛ら冷に美しきダフネを我腕に與へよと聖き母に懇求するが如し、蓋し此地はこの小説によりて尊く、叙利亞の詩伯はベネウス河畔よりこの戀愛譚をオロンテス河畔に移したればなり。アンチオクに移りし王家は希臘の古式禮を模したり。デルフィの神託と眞正名聲を競ふ豫言の流はダフネのカスタリ噴泉より流出す。附近の野にエリスより驕ひ來りし特權を以て設けら

r、このオリムピア・ジュピトルの神像は高六十呎、則、約一千人の人體を合せし大さあり。
s、カスターリ泉に沈める木葉にて未來の運命を知るを得となす。醫術アンデーリによればこは化學的作用によりて容易に行はれ得る一欺術なりとぞ。

れし一競馬場あり、市費を以てオリムピア競技を行ひ、毎年公共遊樂の費三萬磅に達す。巡拜者と觀客と此處に集住して何時しか神廟附近にダフネの一村を成し、地方城邑の名を得ざるも昌盛之と競ふ。神廟村落を圍みて周十哩に亘る月桂扁柏の密林ありて盛夏と雖も涼蔭をなす。諸丘阜より湧出する清流千條地に綠を飾り大氣を清め、清音妙香人に快く平和の森林は健康享樂奢安戀愛の境たり。快樂宗教の形を借りて不知不識に男性的の堅徳をも溶す此肉感的天國の誘惑は將軍哲學者の賢くも避くる所なれど、ダフネの森はなほ數世に亘りて内外人の崇敬を受け、聖域の特權は歴代皇帝の恩惠によりて擴大し、世と與に新粉飾は神廟の莊嚴を加へたり。

ジュリアンが毎年の例祭にダフネのアポロに詣づるや、その心は熱心と性急との最高潮に達す。その活躍する想像には犧牲の、灌禮の、燒香の盛觀、無邪思の徵象たる白衣を纏へる少年處女の長き行列、無數の大眾の紛擾せる會合を描けり。然るに基督教の治世以來アンチオクの熱誠は他の方面に向へり。胖りし牡牛の百頭の富有なる城市によりて産土神に捧げらるゝ

ペピラスの遺骸

代りに、此廢頽せる神廟の蒼面孤獨の住者たる一僧侶によりて唯一羽の鵝を見し皇帝は嘆息せり。祭壇は荒れて神託は默し、靈地は基督教の流傳と葬儀とを以て瀆されたり。ペピラスデキウス帝の迫害によりて獄死せるアンチオクの卑沙家中に眠りて後百年その遺骸は亞皇ガルス命によりてダフネの林中に移され、その上に壯嚴なる一寺建立され、寺僧の資とその卑沙の脚下に永眠せんと希ふアンチオクの基督教徒の埋葬費との爲に神域の一部は奪はれ、アポロ神の祀僧は恐れ、憤れる信徒と與に退去せり。異教の運命を復興する他の革命の起るや、聖ペピラス寺は破壊せられ、叙利亞諸王の敬神によりて建立されし腐れゆく建築の上に新建築は加へらる。而もジュリアンの最初の緊切なる注意は、太く虚偽若しくは教熱の聲を壓伏し去りたる生死の基督教徒の手より、侵されし神明を救ふに在り。冒瀆の域を古式によりて淨祓し、埋屍を取除き、基督教會の司宰をして聖ペピラスの遺骸をアンチオク城中の古家に復せしむ。此際基督教徒の熱心は反對政府の猜忌を和ぐる温從の態度を缺きたり。無數の衆は、最、偶像と偶像

ダフネ神廟の回祿

信者とを凌辱せるダフネの頌歌を高唱して、バビラスの遺骸を搬ぶ高車に追従し迎接す。聖徒の歸府は一種の凱旋にて此凱旋は忿恚を掩ふ皇帝の宗教に對する侮蔑なり。此無分別なる行爲の終りし夜、ダフネの神廟火を失してアポロの神像は焼亡し廟壁は無残なる廢墟として遺れり。アンチオクの基督教徒は宗教的確信を以て此聖バビラスの有力なる代訴が天の雷火を妄信の廟屋に下せしなりと爲せしが、ジュリアンは罪惡か奇蹟か孰かを信ず可き境遇に陥り、證述なけれども嫌疑を以て、直にダフネの回祿をガレリ教派の報復に歸せり。この犯罪は充分立證されしが如く代償を要求し、ジュリアンの命によりてアンチオク伽藍の門戸を鎖し資財を公收せり。紛擾放火さては寺院の資財隠蔽の罪ある犯人を發見する爲に幾多の僧侶を拷掠し、一不勤斯比得セオドレトは東方法廷の宣告によりて斬首せられき。而も帝はその輕斷を責め、實盛執かは知らず、臣僚の不用意なる熱心が迫害の不名譽を以て治世を汚すを嘆きぬ。

クアンチオの慘禍

有司の熱心はジュリアンの皺面によりて直に止められしも、國父自黨魁と

宣すれば、民間の憤怒は容易に靜まらず。ジュリアンの公翰は、一舉にガレレイ派の靈域を破壊せる叙里亞の神聖なる諸城市の敬神忠君を褒め、その神祇の凌辱に報復するに當りて君王の命する所よりも過激なりしを責むること輕し。ガザ、アスカロン、ケザレア、ヘリオポリス等にて異教徒がその昌隆の勢を濫用して毫も憚らず悔ゆる莫きを傳へし宗教家の譴誶は、帝のこの不完全なる告白によりて立證さるゝが如し。異教徒の殘忍を行ふや對敵は唯一死によりて拷掠を免がれしこと、その寸斷されし死屍の街上を牽行かるゝや、厨人は鐵串を以て、怒婦は紡輪竿を以て串刺せしこと、斯くの如きは所在皆然り、斯る殘忍なる暴行の後基督教の僧侶處女の臟腑は燕麥と混へて府中の不淨の動物に投與されしこと。宗教的狂妄のかゝる光景は人性の最卑しく厭ふ可き畫面なれども、アレキサンドリアの虐殺は事實の正確と犠牲の尊貴と埃及首都の壯大とによりて更に一層の注意を引けり。

埃及に暴威を振ふ

出身地か教育の地か、カッパドキア人の綽號を得しジョージはシリシアのエ

ビファニアなる一晒布店に生れたり。此卑賤より出で、食客の技倆によりて立身せり、その諂諛せる諸恩主は爲に軍隊に鹹豕の肉を供給する有利の職を得せしむ。その職既に卑しきを彼は更に不名譽にせり。偽囁誘惑の卑劣手段を盡くして富を積みしが、その醜行甚しきに及びて法の迫及より逃走するの已むなきに至れり。名譽を蓄財の犠牲に供せる後、眞意か假意か、身をアリウス派に投じ、學問を愛せしか街ひしか歴史、修辭、哲學、神學の貴籍を蒐輯し、宛も時流を追ひしためにカッパトキアのジョージはアサナシウスの後任に上れり。新大卑涉の入府は蠻狄の征服にして、その君臨中は時として殘虐貪婪に汚されざる莫し。アレキサンドリア埃及の加特力教徒は天性教育ともに迫害に適せし一虐主に委せられしが、彼はその大教區の各種の民を不公平の手を以て壓抑せり。埃及の教正は尊き地位を誇りながら尙卑賤の出身に相應せる不徳を敢てせり。確

七、ジョージ害に遭ひし後、ジュリアンは屢命を下してその書庫の保存を命じ奴隸の隠蔽を罰せり。帝はその典藉蒐輯の功を褒め、カッパドキアにて研學の際にはその中より若干の記録を借覽抄録せり。

石食鹽紙薪等の不正なる専推を行ひてアレキサンドリア商民を貧窮させ一大信徒の精神的師父を以て密告摘發の惡む可き術を爲せり。建置の大王が後繼諸主たるトレミー家及羅馬列帝に土地の永久的領有權を遺せりとの無根據の口實を設けて府中の全家屋に課せしその租賦は市民の決して忘れ得ず許し得ざる所なり。自由と特赦との希望を以て之に諂諛せる異教徒はその貪婪を煽り傲慢なる教正は何時までか斯る靈地の存在を赦す可きと怒號して府中の富める神廟を掠略せり。コンスタンチウスの世に府民の忿怒否寧ろその正義の爲に外に逐はれ、後國家の文武兩權を以てその地位を復せし時も激烈なる反抗なきを得ざりき。ジュリアンの即位をアレキサンドリアに報ぜる使は大卑涉の失脚を宣せり、三六一年十一月三十日。ジョージは從順なる二宰相、伯狄オドルス、鑄錢局長ドラコンチウスと與に不名譽にも鐵鎖に繋がれて民獄に引かる。二十四日の後、十二月二十四日、迷信的群衆の憤怒は法律手續の形式的迂遠に耐へ得ずして、獄を脅かし、神人の敵はその殘忍なる凌辱に死せり。大卑涉と兩夥の死屍は駱駝背

上に載せられて府中街上を引かれしが、此際アサナシウス黨の動かざりしは宗教的忍辱の輝ける一例なり。惡漢の屍骸を海に投じ、暴徒の領袖は基督教徒の敬神に飽けり先人と同じく教敵の手に罰せられし此殉道者の未來の名譽を停止す可しとの意を宣言せり。異教徒の懸念は正しかりしも其細心は効なかりき。大卑沙の死はその生前の記憶を塗抹せり。アサナシウスの對敵はアリウス派には尊く且神聖にして、此等信徒の外見上の改宗は加特力教會の懷裡にその崇敬を生ぜり。此厭ふ可き外人は時と處とのあらゆる事情を偽りて殉道者、聖徒、基督教の英雄の假面を得、不名譽なるカッパドキアのジョージは軍事俠勇頭等、動爵士の恩主として有名なる英國の聖ジョージと變形されたりき。

u、カッパドキアのジョージが聖ジョージとなりしとは絶對的確實ならぬも極めて事實に近し。その歐洲殊に英國に名聲を博せしは十字軍以來のことなり。

エデッサの動亂

ジュリアンはアレキサンドリア擾亂の報を得しと略同時に、富貴なるアリウス黨派がヴレンチウス派の弱きを凌ぎ規律ある國家に於て處罰なきを得ざる動亂を作せりとのエデッサよりの飛報を得たり。怒れる帝は緩慢な

る法律の形式を待たずして勅旨をエデッサの有司に下し、教會の全資財を公收し、金錢を兵士に頒ち土地を領土に加へしが、此專制の行爲は極めて偏狹なる反語によりて増大せらる。ジュリアン曰ふ、朕は自ガリレイ派の眞友たり。彼奴の尊奉する法は天國を貧者に約す、彼等朕の助によりて現世的資財より免れたれば、更に精進して立德濟度の路を進み得ん。注意せよと、益眞摯の調を以て、卿等如何に朕の忍耐仁慈を侵干せしかを注意せよ。若し斯る紛亂續出せば朕は臣民の罪を有司に報ゆ可し。卿等は嘗に公没放謫を恐れずまた將に火と劍とを恐る可きの理あらむと。アレキサンドリアの擾亂が一層慘澹なる危険性を帯びしは疑なきも、一卑沙が異教徒の手に殞れしにて、ジュリアンの公牘はその行政の偏倚の好證據を供せり。帝のアレキサンドリア府民に對する咎責には敬意温情を存し、此際その希臘人の後たるを證する温厚寛容の態度を失ひしを嘆けり。眞摯に府民が正義人情の法則を犯せしを責めしも、またその久しくカッパドキアのジョージの横虐に耐へ來りしを縷述せり。帝は賢明精勵の政府は臣民の無禮を罪

すべしとの主義を認むるも、アレキサンドリアの建造者亞歷山入王と城隍神セラピストを回想して、自友情を感じる此有罪の府城に自由なる特赦を許せり。

アサナの復讐

アレキサンドリアの紛擾鎮靜するや(三六二年二月二十一日)アサナシウスは民衆歡呼の裡に、久しく無價値の對敵に奪はれし舊地位に復し、その老熟なる民情を煽搖せずして之を緩和するに努めき、その宣教的努力は單に埃及に限らず。基督教世界の情勢はその活潑なる心に訴へ、アサナシウスの年齢功勳名聲は此危機に際して宗教的獨裁官の職を彼に取らしめき。西方多數の卑劣が無智か不本意かりミニ告白に賛同して以來未三年ならず。彼徒は正教の同胞の時ならぬ剛毅を嘆き信じ而も恐れき、若しその誇負にして信仰より強からしめば、身を俗界に墮す可き受刑の辱を受けんよりはアリウス派に降りしならん。同時に神格の合一差別に關する内部的異議は加特力教師間に若干の擾因となり、此哲學的爭議の發展は希臘羅旬兩教會の公然の最後分離を招く可く見へぬ。アサナシウスの出席によ

アサナの放逐

りて總會の權威を得し特別會議によりて、不用意に誤失に陥りし卑劣は過去の誤失に就きて何等形式的承認を要せず、また學說教義に就きて何等詳細の論を要せず、唯ニケア會議の信條に賛同するといふ簡易なる條件にて、教會に復歸し得たり。この有利なる方法に對する埃及及教正の提案は、ゴル西班牙伊太利希臘の僧侶の承認する所にして、若干の熱心者の反對にも拘らず、共敵に對する畏怖は基督教徒の平和調和を増進せり。埃及及教正の熱練と努力とは、皇帝の對敵勅旨によりて(三六二年十月二十三日)和平の攪亂さるゝ前に、靜安の時季を利用せり。基督教徒を侮慢せる皇帝は眞摯深重の憎惡を以てアサナシウスの名譽を加へき。彼一人の爲に少くとも従前の宣言の精神と相容れざる任意的差別を設けき。放逐より召還されしガレイ派は此一般赦免によりて各自の本寺に復し得ずとの意見にて、皇帝の裁斷を以て幾びも罰せられし罪人が法律の威嚴を汚し、君王の命を待たずしてアレキサンドリアの大主教の地位を僭奪せしに驚けり。想像されし犯罪を罰して帝は再びアサナシウスを府城より放逐し、

この正義の行は、大に敬虔なる民衆の心を得可しと想へり。而るにアレキサンドリア府民懇願の切なる、忽帝をして其大多數は基督教徒たり基督教徒の大多數は虐待されし教正に固く歸信せることを知らしめき。而之を知るや帝は勅旨を撤回せずして、却りてアサナシウス放逐令を全埃及に及ぼす。群民の熱誠は更に帝の不安を加へ、紛擾多き府城の首領に大膽にして民望ある魁帥を置くを危険となし、その憤怒の辭は帝がアサナシウスの勇と能とに對する意見を漏せり。而も埃及統領エクヂシウスは細心か怠慢か宣旨の實施を延滞せしが、嚴責を蒙るに及びて終に起てり。ジェリアン曰く、假令卿他の事案に就きての奏報を怠るも、神祇の敵たるアサナシウスに對する行動を報ずるは、少くも卿の責務なり。朕の意を卿に致せるや既に久し。朕大セラピスの祀に誓ふ、十二月中にアサナシウスにしてアレキサンドリアより否埃及より去らずんば、卿の政府の吏は黄金百磅の罰金に處せらる可し。卿は朕の性を知る、朕は罪するを晩し、而も赦すことの尙晩きを。此震翰には帝の自筆になれる前文ありて曰く、あらゆる神祇

基督教徒の報復の應

祇に對せる輕侮は朕をして悲み且怒らしむ。朕の見る所聞く所何事かはアサナシウスの全埃及より放逐されしより快からむ。惡む可き惡漢。朕の治世に於て高位の希臘淑女の若干に洗禮せしは、彼が爲なりと。アサナシウスの死は明に命ぜられず、然れども埃及統領は怒れる君王の命令に及ばざるよりは過ぎたるを安全とせり。大卑沙は巧に漢中の寺院に遁れ、その慣用の妙術を以て敵の模索を避け、ガレリ一派の全毒はアサナシウスの一身に在りと極言せし、皇帝の死灰の上に捷利を得可く存命したりき。予はジェリアンが迫害の罪若しくは誹なくして其實を收めんとせし權謀を忠實に描出せんと力めたり。然れども若し狂妄の大精神にして有徳の皇帝の心情を錯用せしとせば、基督教徒の實際の受難は人間の感情と宗教の熱烈とによりて煽搖され増大されしを同時に自白せざるを得ず。福音の原始的本義の特色たる、溫良謙讓はその後繼者によりて追慕せらるるも模倣されず、今や四十年來帝國の政權を有せる基督教徒は、聖徒獨り地上に君臨するの權ありと信じて、昌隆の不徳を敢てせり。そのコンスタン

チンの眷寵によりて得し所をジュリアンの敵視に遭ひて失ふや、縮流は最殘苛なる專虐として嘆き、偶像信者異教徒の自由なる特赦は正教派の愁怨の標的たりき。既に右司の敢てせざる暴行は民衆の熱烈によりて尙行はる。ペシヌスにてキベレ神の祭壇は皇帝の面前にて殆んど顛へされ、カッパドキアのケザレアにては異教徒に遺存されし唯一の異拜處たる運命神の廟は擾民の爲に壞たる。斯る時神祇の光榮を感じる皇帝は正義の發動を止め得じ。況や教唆煽亂を以て罰ぜらる可き狂妄の輩が却りて殉道者の名譽を受くるを見ては其心豈深く憤らざらむ。當時基督教の臣民はジュリアンの對敵の企圖を確信すれば、その猜忌的懸念を以て視れば政府の所有情勢は悉く皆多少の不平疑念の原因たらざる莫し。帝國臣民の大多數を占むる基督教徒は普通の法律によるも處刑を受くるもの屢次たらむ。然るにその同胞は事案の真相を問はずして、その無辜をいひその要求を聴き、判官の峻勵を以て直に不公平なる宗教的迫害に歸す。現下の苦難既に耐へ難きも、是將に來らんとする不幸の輕微なる發端のみとなせり。ジュリアン

は殘忍權謀の暴君、唯波斯役より捷ちて歸るまで報復の實行を躊躇するのみと、基督教徒は思へり。乃一び外敵に捷たば帝は直に詐伴僞善の假面を脱し、圓戲場は隱者卑劣の血を流し、信仰を固執する基督教徒は自然と社會との公共の恩恵を剝奪さる可しと豫期せり。背教皇帝の名聲を損ずる所有誹謗は皇敵の畏怖憎惡によりて輕忽に信ぜられ、その喧囂は義務として尊重す可く利害として稱揚す可き帝王の心を怒らしむ。天の裁判に任せらるゝ不敬虔の暴君に對する唯一の武訴は愁訴と涙なりと教徒は公言せり。而も屈服は既に弱きが故に非ず、人間の不完全なる状態にては主義に存する疾病は迫害によりて盡くされ得との執拗なる決意を抱けり。ジュリアンの熱心が何程までその善心仁慈を左右し得しかは究め難しと雖も、若し眞摯に教會の力と精神とを詳察すれば、帝は基督教を絶滅し得る前に先づ帝國を内亂の慘禍に投ぜざるを得じとは予輩の所斷なり。

第十章 斯征討、チグリス渡河、退軍と殂落、ジョギアンの繼承、屈辱的講和

一、ジュリアンの東征

「諸亞皇」作
ジュリアン

「諸亞皇」と題するジュリアンの哲學的小説は上代機智の最快き教訓的作
品の一なり。自由平等なるサツルナリ

アの期間に、ロミユルスは宴を設けて己を
同列と見るオリムプスの神祇と自己の
~~~~~  
の祭日にて、十二月十七、十八、十九の  
三日に亘り、放縱を擅にす。帝國時代  
には祭期一週日に及べり。

武功的臣民世界勝國の民衆に君臨する羅馬の帝王とを請待せり。神祇各  
その位に従ひて着座し、帝王の卓は空中高く太陰の下座に在り。神祇人間  
の社會を汚せし暴君虐主は頑固なるネメシスの爲にタルタルの深壑に抛  
下せらる。餘れる諸亞皇相繼ぎて座席に進むに、その過ぐるに従ひて各人

の不徳過失を性悪くも指摘するはバッカナルの假面の下に哲學者の智を藏  
して笑へる老道徳家シレヌスなり。宴終るやマーキユリーはジュピターの命  
を承けて功勳優秀の者に天冠を授く。ジュリアス・シーザー、オーガスタス、ト  
ラジャン、マークス・アントニウスは最顯著なる候補として撰ばれ、柔弱なるコ  
ンスタンチンも亦此名譽の競争より排除されず、大亞歷山は羅馬の英雄と  
光榮の賭物を争ふ可く召さる。候補は各自の功勳を陳述するを許されし  
が、マルクスの謙讓なる沈黙は傲慢なる競敵の巧妙なる演述よりも神意に  
適へり。恐る可き競争の判官が心情を驗査し行爲の源泉を審覈するに至  
りて畫廊皇帝の優越は益々明白となれり。亞歷山、シーザー、オーガスタス  
トラジャン、コンスタンチンは皆面を赭くしてその功業の緊切なる目的は名  
聞權力さては享樂に在りしことを白状せしが、神祇も亦敬愛の眼を以て皇  
位に在りて哲學を實踐し人間の不完全なる状態に在りて天神の徳性を模  
せんとせし有徳の皇帝を見たり。此快き速作(ジュリアンのケーザー)の價  
値は作者の地位によりて加はる。自由に歴世諸帝の徳否を描ける皇帝は



ジュリアンの波ス親征

その毎行に自己の行爲の褒貶を托せり。

冷静なる回想の時は、ジュリアンはアントニウスの有益有利の盛徳を推重したるも、その大望は亞歴山の光榮に煽られ、また賢者の尊敬と群民の稱賛とを併せ得んと欲す。神身の力最活動を好む年齢に當り、日耳曼戰役の經驗に本きその成効に動かされて、帝は更に莊大記憶に値する武勳を立て、其治世を飾らんと決せり(三六二年)。印度の大陸より錫蘭の海島より東方の使節は、恭しく羅馬の紫袍に禮せり。西方の諸民は平和戰役兩時ともにジュリアンの個人的徳性を敬畏せり。帝はゴス戰捷の利獲を蔑視し、禿納江上の狄族がその威名を恐れそのスレースイルリアの境上を固めし新巖砦を恐れて訂約を破らざる可きに満足せり。その武を用う可きはキルス、アルタザークゼスの後繼のみ。よりて帝は波斯を征服して久しく羅馬の威嚴に抗敵せし傲慢なる國民を驅逐せんと決せり。波斯王は、コンスタンチウスの後繼は性格太く先帝と異なりを聞くや、平和の商議に就きてある術數的の否寧る眞摯の提案を爲さんとせり。而もメソポタミア諸城市の

アンチオクの帝の反感

焔煙荒廢の裡に決して平和の商議を爲さずと揚言し、親波斯廷に臨まんに使節の用あらんやと侮蔑の笑を漏せるジュリアンの決心は、サポルの倨傲を驚かしぬ。帝の性急は征討の準備を督促せり。將軍を任じ大軍を徴し、コンスタンチノブルを發せるジュリアンが小亞細亞諸州を経てアンチオクに着せしは、先帝の殞後約八ヶ月に在り。その波斯侵入の熱望を妨げしものは必須已むなく國務神祇の崇拜を復興する熱心、ゴール軍の勞疲を恢復し東方諸軍の訓練士氣を鼓舞する爲に冬陣を利用す可しとの謀臣の忠言なりき。君王の急忙を嘲りその躊躇を誹る民衆の中にジュリアンはアンチオクに駐りて翌春を待ちたり。

ジュリアンにして自己と東方都城との個人的關係が君民相互の満足を生ずと自負せんには、自己の性情とアンチオクの民風とを誤想せるものなり。氣候の温暖は住民をして安靜殷富に心酔せしめ、希臘の生々しき放縱と叙里亞の世襲的柔慢とを混じ、流行は唯一の法則たり、享樂は唯一の慾求たり、美衣珍味はアンチオク府民の唯一の特色たり。奢侈の術は名譽を買ひ眞



摯と男性的徳行とは嘲笑を以て迎へられ、婦徳を軽んじ老齢を侮るは此東洋大都の一般の弊風を示す。觀物は叙利亞人の好尚否寧耽溺にして、最熟練なる技術者を附近より招聘し、歳入の若干を公共遊戯の費に投じ、演劇園戯場の盛大を以てアンチオクの幸福とし、光榮と爲す。斯る光榮を厭ひ斯る幸福を感じざる帝王の疎野なる風非は直に風雅の臣民に厭はれ、婦人の如き東洋人はジュリアンが常に維持し時に粧ふ峻嚴簡素に倣ふ可くもあらず、また之を稱す可くもあらず。古風に據りて神祇の名譽の爲に擧ぐる祭祀の日は、ジュリアンが哲學的峻烈を緩むる唯一の機會にして、またアンチオクの叙利亞人が享樂の煽惑を拒む唯一の時日なり。府民の多數はその祖先の始めて發明せる基督名W.クリスチヤニスムの光榮を有し、その宗教の道德的訓戒に従はざるも教義を固執す。アンチオク教會は異端分派の禍を蒙りしも、メレチウスとパウリヌスとの流を汲めるアリウス、アサナシウス派はともに共敵に對する敬虔なる憎惡を以て鼓舞されき。

W、アンチオク府民は基督の頭字 O E コンスタンチウスの頭字 Kappa などを用う。

饑饉と帝の處置

幾多の宗派を愛せし皇帝の後繼にして而も其敵たるジュリアンの性格に對して、斯く最強き偏見を懷きしに、聖パピラスの移骨は背教者の一身に對して許し難き反抗を激成せり。迷信的侮蔑を以て、コンスタンチノブルよりアンチオクに至るまで帝の過る所は饑饉之に伴へりと嘆き、饑民の不平は不注意なる救濟法によりて益大なり。季節の不良は叙利亞の收穫に影響し、アンチオク市上の麵包の價は穀物の缺乏に比例して騰貴せるに、その幾部は專賣によりて犯さる。この不均衡の争に於て——甲は土地の所産を自家の専有財産として要求すれば乙は有利なる商品と視、第三者は日常生活の必需品となす——仲介者の所有利益は無力なる消費者の頭上に積加す。その境遇の困難は性急の爲に増し、懸念の爲に加はり、物資缺乏の畏怖は漸次に饑饉の光景を呈し來る。アンチオクの富豪が獸鳥肉の不廉を嘆くや、ジュリアンは節約なる一部市は酒油麵包の一定の供給を以て満足す可きを宣言せしが、人民生活の爲に物資を供給するは君王の義務なるを認めき。よりにて帝は法を立て、穀價を一定する極めて危険にして疑は



しき方策を取てせり。帝は令して凶年には豊年になき廉價を以て穀を賣らしめ、ヒエラポリス、カルキスさては埃及の

x年の豊凶に應じて金一片に穀粉の五、十、十五モヂイを賣るに定む。一モヂイは英吉利の約二ガロンなれば、わが五升内外ならむ。

倉庫より四十二萬二千モヂイを市場に轉輸して、率先法令の範を示す。結果は豫想すべく、果然事實に現れき。帝の穀は巨商の占買する所となり、地主則有穀者は府中への供給を絶ち、市場に現れし少額は不法の高價にて賣らる。而も帝は猶政策の非を悟らずして民間の怨嗟を負義の私語となし、自兄ガルスに似ざるもその頑迷に肖しことをアンチオクに知らしめき。府議官の抗議は唯帝の不撓の心を激せるのみ。帝は恐らく地を有し穀を商ふ議官は自禍根を醸せりとの説を信じて、その愁訴は個人的利害より出で公共的義務よりせずと解しけむ。最富貴なる二百の府民より成れる議官の全部は衛兵を附せられて宮中へ獄裡に送られ、日没前に各家に歸るを許されしも、帝は斯く容易に他に許せる赦免を自得能はず。同じ愁訴不平は叙里亚希臘人の機智輕佻によりて盛に流布され、放縱なる惡魔

都民の不平に對す敵

祭日の間、皇帝の法律宗教私行その髻をさへ嘲笑する俚語は市街に満ち、有司の黙認と群集の喝采とは益アンチオクの氣勢を昂む。斯る民衆の侮蔑はソクラテスの門生をも餘りに冒し過ぐるも、感覺敏に全權を有せる皇帝は情を抑へて報復を拒みき。暴君は何の差別もなくアンチオク全府民の生命財産を處罰し得べく、怯懦なる叙里亚人は忍んで忠誠なるゴール軍の放恣貪婪殘忍に屈從せざるを得じ。更に温厚なる命令も東洋の此大都の名譽と特權とを剝奪し得んに、ジュリアンの廷臣は否その臣民と雖も恐らく共和國家の最高位者の威嚴を維持する正常の行爲として稱賛したらん。然るにジュリアンは個人的輕侮に報復する爲に國家の權威を濫用否施用せずして、他の君王の多く爲し難き報答の消極的方法を以て自満足せり。帝は諷刺讒謗を受けし返報として、辱の敵と題せる一篇を草し、自己の過失を嘲笑的に自白し、アンチオクの放縱怯懦の風俗を嚴峻に諷刺せり。この勅答は宮門に公示されき、ミソポゴンの一篇は今に至るまでジュリアンの憤怨機智仁慈無分別の奇異なる紀念として遺れり。帝は笑を粧へども赦す能



はざりき、心中の輕侮を露はせしが、その報復は唯斯る臣民に適せる一州守の任命を以て満足せり。負義の都城を永久に棄て、次の冬をシリシアのタルススに過すの決意を宣せり。

詭辯學者  
リバニウス

されどアンチオクにもなほジュリアンの説によれば國中の不徳愚蒙を補ひ得る高德才略の一府民ありき。詭辯學者リバニウス(三一四乃至三九〇年頃)はこの東洋の都城に生れ、ニケア、ニコメチア、コンスタンチノブル、雅典等に修辭演説の術を教へて後餘命をアンチオクに送れり。やわが希臘の年少は屢その門を叩き、時に八十を過ぎ、帝。

しその門弟は比類なき師を稱揚し、その對敵の猜忌の爲に諸處に流轉せるは偶自家の優越を誇るリバニウスの説を證せり。ジュリアンの諸師は決してその敵の講筵に侍する勿れと戒められたれば、年少皇子の好奇心は遮られて燃え、竊にこの危険なる詭辯學者の著述を得て能くその文辭に摸し、漸く其直門中の最勞せる者に凌駕せり。かくてジュリアンは位に即くや、頑齡なほ希臘至醇の好尚習風宗教を保持せる叙里亞の詭辯學者に歸服し賞賜する

の意急なり。帝の豫想は嬖寵の細心なる自誇によりて増せり。幾人かコンスタンチノブルの宮門に集到せるも、リバニウスは之に倣はずして靜にアンチオクに止りて帝の至るを待ち、冷然として宮廷に遠り、見る毎に正式の招待を要し、帝をして一臣従の從服を令し得るも一友侶の敬慕を要せしむる必要なる教を君王に授けたり。如何なる時代の詭辯學者も出自運命の偶發的差別を蔑視し、若しくは蔑視するが如く粧ひて、自己の多く享け得し心神の優越を以て貴しと爲せり。ジュリアンは皇帝の紫綺を飾る宮廷の稱揚を輕んずるものから、その眷遇を拒みその爲人を愛しその名聲を揚げその紀念を重んずる獨立の一哲學者の推稱教訓自由羨望を愛するを深し。リバニウスの大著は現に存せり、その大部分は言語の學を研めし演説者の無用の遊戯文字、當代と交渉なくしてトロイ戰役雅典共和政等のみ念頭に置ける閑居先生の著述なり。而も時としてはこの想像的高地より下り來りて、各種の精細なる通信あり、當代の盛を稱し、大膽に公私生活の惡弊を

、その書牘二千に近く、リバニウス一流の妙文にて、今世に傳はれり。



論じ、ジュリアン、セオドシウスに對してアンチオクの爲に辯ぜり。遺存を欲して佚亡するはあらゆる古代の事物に對する憾なるに、リバニウスにはその天才を神聖にせる宗教學問の存せるこそ却りて笑止なれ。このジュリアンの友は基督教の興隆を見て輕侮し、現世の昌榮をも暗くする其頑迷固陋は何等の光榮と幸福とに浴する希望をも得ざりき。

### 二、征軍の成功

ジュリアンの軍事的性急は翌春を待ちて進發を促せり、帝は決して還らじと誓ひし地境まで送り來りしアンチオクの議官を輕侮咎責を以て遣り歸せり、(三六三年三月五日)。困難なる進軍二日、第三日にベレア即アレppoに達せしに此地の議官は殆んど皆基督教徒にして、冷然たる形式的恭敬を以て異教徒背教者たる帝の徵召に應ぜり。ベレアの最名譽ある一市民の子は利害の爲か自覺よりか帝と同教に歸せしを以て父母の怒に觸れて廢嫡されき。帝父子を共に宴に招きて自その間に坐して和解を謀りしも効なく、

### 皇師の東征

老基督教徒は冷然として臣民の性質と義務とを沒却せる如きにぞ、帝終に少年に向ひて曰へり、朕の爲に父を失へる卿は朕を觀て父とせよと。ヒエラポリスを距る約二十哩、扁柏の森林に在る小邑バトネにては帝は稍歡待を得たり。祖神アポロ、ジュピターを信ぜりと見ゆるバトネ邑民は禮を守りて嚴肅なる犠牲の式を行ひしが、ジュリアンの眞摯なる敬神はその紛擾に犯され、帝は直に祭壇より上る煙の敬神に出でずして、諂諛の香を放つを見き。幾代かヒエラポリスの城市を神聖にせし莊嚴なる古神廟は廢絶既に年あり、優に三千に超ゆる祀僧を食ひ得し富は今や傾かんとせり。されどコンスタンチウス、ガルスがヒエラポリスを横ぎりて其家に宿せる時堅固なる信仰を以て兩帝に對抗せし一哲學者一友人と相擁するを得てジュリアンは満足せり。軍務の繁家書の忙に處してジュリアンの熱心は生々として變ぜず。今や緊要困難の戰を前にして帝は益々意を最瑣末なる兆瑞に用ひ、卜算の法を用ひて之より將來に關する何等かの智識を得んとせり。帝はまた此地に至るまで優渥なる書牘をリバニウスに與へてアンチオクの詭



辯學者にその天才と温情とを致せり。

ヒエラポリスは殆んどユフラテス河岸に在れば羅馬軍の集合地點となり、軍は豫め作りし舟橋によりて直に河を渡る。ジュリアンの性僻をして先帝の如くあらしめば、此年の活動的時季をサモサタの圓戲場若しくはエデッサの寺院に徒消したらむ。而もコンスタンチウスの代に亞歷山大王を模範とせる勇武の皇帝は何の躊躇もなくヒエラポリスを距る八十哩なるメソポタミアの古城市カレーに入れり。城中の太陰廟はジュリアン敬神の念を牽きしも、数日の滯留は主として波斯役の大準備に費さる。征略の秘策は此に至るまで帝の胸裏に藏されしが、カレーは二大進路の分岐點なれば、チギリス方面に向ふ可きかユフラテス河谷に出づべきかを茲に明にせざるを得ず。帝は宗室プロコピウスと嚮に埃及公たりしセバスチアンに三萬の軍を分ち授け、ニシピスに進みて、そのチギリス路に出づる前に敵の逆擊妄侵を防がしむ。爾後の行動は兩將の方略に委せしも、帝の意は火と劍とを以てメデア、アチア、ベネ地方を荒せしちユフラテス河岸を進む帝と

帝の方畧

アルメニアの反覆

略同時にクテシフォン城下に到着して波斯王都の攻圍に合す可きを期待せり。この良策の成効は大部分自國の安全を危うせずして四千の騎軍一萬の歩兵を發して羅馬軍を援助し得るアルメニア王の有力なる應援に繫れり。然るにアルメニア王アルサケス・チラススの庸弱にして大チリダテスの雄偉なきこと先王コスロエスよりも太しく、小膽なる王は冒險と光榮との何等の企圖をも厭へば、怯懦怠慢を飾るに

ル、コレンのモセスのアルメニア史によれば、この王の即位はコンスタンチウス帝の十七年(三五四年)なり。

宗教と恩義との禮儀ある口實を以てせり。王はコンスタンチウスの手より統領アブラギウスの女オリムピアスを娶りしこと、コンスタンス帝の許婚たりし一女の縁は一狄王の威嚴を高めしことを忘れずと爲す。チラススは基督教を奉じ基督教民に君臨すれば、良心利害執よりするも、教會の破滅を齎す可き捷利に加擔し得ずと爲す。チラススの反覆は、アルメニア王をその奴とし神祇の敵とするジュリアンの不用意によりて加はる。勅旨の傲慢に威嚇的なる口調は、附庸隸屬の地位に在りしも尙東方の君王羅馬の

第二節 征軍の成功



對敵たりしアルサケス家の王統たりと自覺せるアルメニア王の潛藏せし  
憤怒を覺ましき。

皇師の部  
譽と進啓

ジュリアンの兵略は巧にサポルの偵察を欺き注意を避くるに適せり。軍  
はニシピス、チグリス河方面に向ふと見せて忽ち右に轉じ、カレ一の平坦不  
毛の野を横ぎり、第三日に昔マセドニア諸王がニケフオウム、則ちカレニク  
ムの堅城を築きしユフラテス河岸に達す。これよりユフラテス河の曲折  
に沿ひて進むこと九十哩に過ぎ、アンチオクを發して以來約一ヶ月にして  
羅馬領の極盡頭サーケシウムの城塔を望む。ジュリアンの軍は羅馬帝王が  
波斯征討に用ひし最大軍にして、精銳實に六萬五千。羅馬北狄歩騎の老兵  
を各州より簡拔し、忠勇を以て鳴るゴールの勇兵は其敬慕せる帝王の位と  
身とを衛り、莫大なるスキシアの應援軍は地名も位置も知らざる遠地を征  
略すべく異りし氣候より殆んど別世界より至り、峻烈なるジュリアンが自號  
令して而も定例の資給を與へざる亞刺伯の流族即サラセンの幾部族は略  
奪と戰鬪を愛してまた帝旗の下に集へり。羅馬軍の運動に供し必需に應

ぜる一千一百隻の艦隊はユフラテスの大江を掩ふ。艦隊の武力は五十隻  
の戰船と、時に或は船橋の用を爲す同数の平底船とより成り、その餘は或は  
木材を以て組織し或は獸皮を以て掩ひ、武器機械用具糧餉を載す。ジュリア  
ンの警戒的仁心は兵士の爲に酸食乾麵包の多量を用意せしも酒類を禁じ、  
軍の直後に隨跟せんとせし多數の駱駝の長列を禁ぜり。チポラス河はサ  
ーケシウムに於てユフラテス河に合す。進軍嗽叭の響につれて羅馬軍は  
四月七日兩敵國の境界を限る此小流を渡れり。古の軍陣の法は軍中の  
演説を要し、ジュリアンは機會毎にその雄辯を揮へり。帝は祖先の不撓の勇  
武光榮の凱旋を例として士氣を鼓舞し、波斯の不遜を巧に説きて軍衆の憤  
を發し、この不信の國民を絶滅せざれば一命を共和國家の爲に抛たんとす  
る自己の決意に倣はしむ。その雄辯を助くるに各兵に銀一百三十片の賚  
賜を以てし、チポラスの橋を斷ちて安全の道たゞ決死の勇に在るを自覺せ  
しむ。而も帝の細心なる亞刺伯族の侵寇絶へざる遠境を防がしめんとて  
サーケシウムに四千の兵を留め、この堅城の衛戍を一萬に満たせり。

第二節 征軍の成功



羅馬軍は敏活多謀の敵の地域に入るや三路に分れ進む。歩兵の中堅則  
 全軍の中堅は中央に備へて總帥并クトルの令を奉じ、右には勇將ネッタ數  
 軍に將としてユフラテスの河岸に沿ひ艦隊を見て進み、左翼は騎軍にして  
 ホルミスダス、アリンセウスその將たり。ホルミスダスの奇異なる冒險譚  
 は特記するに足る。ホルミスダスは波斯の一皇子にして薩贊朝の宗室た  
 りしが、サボル幼時の内亂に獄を脱して大コンスタンチンの廷に投じ、始は  
 哀を新主に求めしに後には爲に尊重せられ、忠誠を以て羅馬の武職に任じ、  
 基督教徒なるもその本國に壓抑されし一臣民は最恐る可き敵たり得るを  
 竊に通告したり。これ羅馬の三軍なり。軍の先鋒には一千五百の輕兵を  
 引率せるリシリアヌスありて、その敏活能く最遠の動靜を探り最捷に敵の  
 消息を知り得。後陣の將はガライフスとオスローエネ公セクンヂヌス  
 なり。必要と誇示との爲に各隊は間隔を置きたれば、全軍の延長約十哩に  
 亘る。ジュリアンの常地位は中軍の先陣に在るも、將軍としてよりも皇帝と  
 しての職責上、その出現が羅馬軍の行進を促進し保護するに必要なる毎に、

一隊の輕騎を引率して前後左右翼に馳せ廻る。その横斷するチポラス河  
 よりアッシリアの耕野に至る地方は亞刺比亞砂漠の一部と覺しく、人工の極  
 限を盡くしても遂に改良し得ざる乾燥不毛の曠野たり。ジュリアンは約七  
 百年前少キルスの踏破せる所之に伴隨せし聖勇ゼノフンのその遠征を記  
 せし所を今進行せり。「地方は阿兒蘇の野にして海なり、何等かの灌木蘆荻  
 あれば則ち香氣を帯ぶるも、一樹の眼を遮る莫し。漠裏に棲めるは鴉駝鳥  
 羚の羊野驢のみ、行軍の疲勞は狩獵の娛樂を以て慰めらる」と。鬆漫なる漠  
 地砂塵は屢風に吹かれて起ちて雲と蔽ひ、ジュリアンの兵衆の多數は帳幕と  
 與に忽に不慮の颯風に捲かれて地に作る。  
 メソポタミアの沙原は漠中の羚羊野驢に委棄せらるると雖も、ユフラテス  
 河岸と處々の河中島には住民多き市邑あり。亞刺伯の一酋の居地たるア  
 ンナー即アナソの市は河中の小島なる自然の壘壁に據りて二條の長街を  
 爲し、河の兩岸に二場の饒野を有せり。勇敢なるアナソの民は將に羅馬皇  
 帝の行進を扼せんずる氣勢を示せしが、皇子ホルミスダスの綏撫と水陸大



軍の畏怖とは之を止めたり。乃ちジュリアンの憐を乞ひて之を得たり。帝は之を叙利亞のカルキスに近き有利の地に移しその守ブセウスに高位を授けたり。然もシルサの堅壁は攻圍の威嚇を蔑視し帝をして波斯の内地を定むるの口この地は捷主の凱旋を拒まざる可しとの悔慢の約を甘諾するの已むきに終らしむ。抵抗の不能にして降伏を欲せざる平城の民は風を望んで遁れ鹵獲糧餉の充てる家屋はジュリアンの軍に占領され若干の婦人は悔なく罰なく爲に虐殺されき。行進の間スレナス、則ち波斯の將軍有名なるガッサン族の君酋マレク、ロドサケスは始終皇帝の四邊に彷徨出沒して所有漂泊者を遮り所有支分隊を攻撃し勇武なるホルミスダスすら既に危くして僅に其手を免る。而も狄兵は終に擧擯され日を追ひて地理は騎軍の行動に不便となり羅馬軍はマセプラクタに達して昔アッシリア王がメチア族の侵寇を防ぎし廢城の遺墟を見る。斯くしてジュリアン遠征の序幕は約半月を費して予輩はサーケンウム城よりマセプラクタ城に至るまで約三百哩と推算す。

アッシリ

チグリス河より彼方メチアの山地に及ぶアッシリアの沃土はマセプラクタの故城よりユフラテス、チグリス、兩河相合して波斯灣に朝するバスラ地方まで約四百哩にして、兩河の間は廣處も五十哩を出でずバグダッド、バビロンにては二十五哩に逼る河間の地なれば特にメソポタミアの稱あり。多大の勞を用ひずして軟地に墾てる無數の人工運河は兩河を連ねてアッシリアの平野を截斷せり。斯る人工運河の用は多く且大なり。兩河の孰か漲溢すればその漲水を他河に移し、また漸次に支流小流を爲して乾燥の土壤を濕し降雨の缺を補ひ平時には來往通商の便を通じ堤坊は輒く決潰す可ければ戦時には水を漑ぎて敵軍の進路を遮り得可し。自然はアッシリアの土壤氣候に最美の資の或物葡萄、櫛櫛、無花果の類を拒むと雖も、人間生活の必須食物殊に小麦、燕麥は無盡藏の豐饒にて農人一粒を地に蒔きて二三百粒を收むると珍しからず。地の面は無数の椰子樹林を以て點綴され、耕蹠の土人はその幹葉汁菓を巧に用ひて三百六十種の用を爲す。その他各種の工藝、特に革麻の業は幾多の人民の工を煩はして假令外人の手に行はる



も外國互市品の重貨たり。バビロンは今や王室の公苑と化せるも、この舊都の遺墟に近く、幾多の新市邑起りバビロニア土壤の特製品たる天日に乾せし煉瓦を以て壘み土澁青を以て固めし多数の家屋あり。キルスの後裔細亞に君臨せる間、アッシリア一州の所産は能く大王宮廷の一年の食物の三分の一を支へ、四大邑は王の印度嶽を養ひ、八百の種馬千六百の牝馬は州費を以て絶へず王厩の爲に飼はれ、州藩王に致す一日の租税は銀一ブッセルとなせば、予輩はアッシリアの年租を百二十萬磅に超ゆと算定し得可し。

アッシリアの野は今や三六三年五月ジュリアンによりて戦鬪の慘禍を蒙り、哲學者は傲慢なる君王が羅馬諸州に加へたる劫略残忍をその無辜の臣民に酬ひき。戦慄せるアッシリア人は河流を援助とし自ら國土を荒殘す。道路は行く可からず、洪水は陣營を浸し、ジュリアンの軍最困苦を喫するもの數日。而も危難に當るが如く、勞役に耐へ、君主の精神を以て自奮起せる軍隊の忍耐は、所有障害を排せり。堤防を漸次に修理し、漲水を故道に歸へし、椰子林を伐採して道路の破壊を補繕し、氣腕を浮筏に繋ぎて橋梁となして大

アツシリアの  
ペリサポルの  
攻圍

江を渡る。アツシリアの二城市は羅馬皇帝の軍に抗せんとしてともに峻罰を蒙れり。クテシフンの王居を距ること五十哩なるペリサポル、則、アンバルは州中第二の都會にして、城大に民多く壘高くして重壁を備へ、ユフラテス河を帯びて守兵勇なり。ホルミスダスの勸降は輕侮を以て斥けられ、波斯皇子の耳は宗室の身を以て敵を導きて國王國家に敵する正當の誹謗を聞けり。アツシリア人は勇氣と熟練とを以て忠誠を助けしが、破城槌の一撃城角を破るや急に退きて内城に嬰守す。ジュリアンの軍城中に募進し、所上有軍事的嗜慾を逞しうせし後、火をペリサポルに縦ち、煙れる家屋の廢墟の上、に機械を置いて本城を攻撃す。かくて互に絶間なく矢石を飛して對抗を持し、大弩投石車を有せる羅馬軍の強は地勢を占めし城軍の利と相當る。而も最高壘牆と相當る陷城井樓の造らるゝや、偉大なる動樓の光景は抵抗の望を絶ちて城兵の膽を寒からしめ、ジュリアンがペリサポル城下に現れし後、唯

b、ヘレポリスは初デメトリウス・ポリタラテスがサラミスの攻撃に用ひ、各面九十キユビトの高さ四十五キユビトの幅なる方樓にて高さ八キユビトの四輪車を用ひて動かす、樓は九層をなし、運



二日にして城降る。般昌なりし城民中、僅に残りし男女二千五百の退去を許し、穀類武器精良の器什を納めし倉庫の半は軍中に分配し、半は公用に保存し、其他無用の物貨は或は焼亡し或はユフラテス河中に投じ、アマダの辱をベリサボルマオガマルの全滅に雪げり。

十六の大城樓一深壕磚瓦土瀝青の二重堅壁の防備を有せるマオガマルマオガマルは波斯國都を距る十一哩、一都市といはんよりも寧國都の防城として建設されしが如し。斯る要鎮を背後に残さんを恐れし帝は直にその攻撃の爲に羅馬軍を三分せり。ギクトルは騎軍と重甲歩兵とを將てチグリス河畔クテシフオンの郊外に至るまでの地方を清むるの命を受く。ジュリアンは親攻圍を令し、全力を城壁に對して設けし攻城機に用ふるが如く粧ひて、實は兵衆を城中に入るゝ妙計を爲せり。ネフツダ、ダガラ、イフス命を奉じて、若干の距離より塹壕を鑿ち、漸次に延長して城壕に及び、土石を以て壕を埋め、

マオガマルの攻圍

工兵を督して城壁の下に墜道を鑿り、木柱を以て之を支へ、三隊を簡拔して單縦列を作して暗々たる穴中より進む。ジュリアンはその間守兵の注意を引くため喧騒して總攻撃の態度を示す。波斯軍城上より望見して、捷利の歌を唱へサボルの光榮を歌ひ、難攻のマオガマルチアを取る前に皇帝はオルムスドの星宮に召さる可しと爲せり。

○、オルムスドまたオルムツドは波斯の兩元神教にて、光、善、生々の神なり。

而も市は既に落ちぬ。歴史は孔穴より敵の棄てし樓中への先登者の名を傳ふ。先を競ひしために穴路は自廣まり千五百の敵は早くも城裡に在り。喫驚せる守軍は城壁と與に安全の最後の希望を抛ち、城門は忽破れ開け、士衆の報復は逸樂貪婪を繼にせざれば虐殺を逞くせり。降伏の約を請ひし城將は後數日皇子ホルミスダスに不遜の言をなし、を以て燔殺され、華皆は夷げられて、嘗て茲にマオガマルマオガマル城市の存せし一遺迹を留めず。波斯國都の附近には東方大王の奢侈自尊を満足さす所有所産を以て精巧に粉飾せる三離宮あり。チグリス河畔の名園は波斯の風尙にて花卉湧泉蔭多き歩道の齋整を施し、特殊の公苑



には君王狩獵の巨費を以て維持さるゝ熊獅野猪を養ひしに、今や死經荒れて猛獸は兵衆の飛槍に死し、サボルの宮居は羅馬皇帝の一念に烏有に歸す。文明時代の細心と文雅とが敵國君王の間に生ぜし禮讓はジュリアンの此際知らざりし所若しくは顧みざりし所なり。されど予輩の心は此暴行に對して何等痛恨の情を感じず。希臘の一枝匠の手に成りし簡單なる一裸像も蠻人の勞を集めし此粗野にして高價なる宮園の全部よりも眞價あり、一宮殿の荒廢は一茅舎の燒亡よりも悲しむ可しとせば、予輩の感情は人性の不幸に對して甚しく評價を悞れりと謂ふ可し。

動的  
風  
丰  
行  
人  
の  
個  
人  
的  
の  
風  
動

ジュリアンは波斯人の畏怖憎惡の目標たり、この國の畫家は口裡猛火を吐く怒れる獅子を以て自國の征服者を表せり。されど其友人兵衆には此哲學的英雄は更に愛す可き光を以て見へ、帝徳の表現その最後の最活動的時代に若くは莫し。帝は敢て力めずまた殆んど報賞なくして節制嚴格の常習的性能を發揮せり。その神心の全部に亘れる人爲的智能の命するまゝに最自然的肉慾の耽溺を峻拒せり。逸樂の民をして所有肉感的嗜欲の満

悦を求めしむるアッシリアの暖氣に、此青年の捷主は清白侵し得ざる操行を保ち、好事の念によりてすら未曾て囚中の美人を見しことあらず。戀愛の誘惑に抗せると同じ堅實の心はまた能く戰役の困苦に耐へき。羅馬軍の平坦汎水の地方を横ぎるや、その皇帝は徒歩陣頭に立ちて進み、士衆と勞を與にして其努力を勵ます。所有有益の勞役にジュリアンの手は敏活に働き、紫袍は濡れ汚れて宛然最賤卒の套衣に異ならず。二回の攻圍は後世の改善せる戦法にては細慮なる一將軍によりても多く行はれざる帝の個人的勇猛を示す機會を作れり。帝は危を顧みずしてペリサボルの城前に立ち、兵士を指揮して鐵門を撞破せしめ、身上に雨下する矢石の爲に殆んど瘡れんとしき。また帝のマオガマルチアの外壁を檢するや、愛國の二波斯兵ありて忽然白刃を揮ひて突撃せしに、帝は楯を上げて之を拒ぎ、一撃の下に一敵を斬つて落す。有徳の君王の尊敬は之を受く可き臣従の報賞にして、ジュリアンが個人的功徳より生ずる權威は帝をして上世的訓練の精勵を復活強行せしめ得。スレナスと戦ひて名譽を捨て、旌旗を抛ちし三騎士を死に



處し、マオガマルチアの先登兵に解圍冠を授けき。ペリサボル攻圍の後、僅に銀百斤の資賜を得て高聲に不平を鳴らせし軍衆の貪婪は帝の意に觸れたり。帝の

a、ジュリアンかその史家の古典に通ぜざりしならむ。此際には當に先登冠を授く可く、解圍冠は城の圍を解きし者に授く可きなり。先登冠(ミュラル・クラウン)は先登者を賞する金冠なり。

正當なる輕悔は能く羅馬人の莊重雄剛のに辭現はる。曰く「富は爾曹の望む所か、その富は波斯人の掌裡に在り、此豐沃なる國土の掠略を爾曹の勇氣訓練の賞賜と爲さむ。朕に聽け、昔斯る莫大の寶貨を有せし羅馬共和國は今や貧窮廢殘に陥れり、是わが諸皇が庸弱の宰臣に聽從して黄金を以て狄蠻の靜平を購ひし爲なり。歳入は空しく城市は荒れ州縣は衰へき。朕自わが先王より受け得し唯一の遺産は無畏の精神のみ。朕にして所有眞の利得は此精神に存するを知る限古の有徳の時代に於てフプリシウスの光榮となされし此名譽の貧窮を認承して恥づる莫し。爾曹にして天の聲と主帥の言とに聽かば、此光榮此徳は亦爾曹のものたらむ。然も若し爾曹尙敢て固執して古き動亂の恥づ可き例を新に追はんと欲せば、進め、人間の第

オクテシフの地理地方

一位を占むる皇帝なれば朕は立ちて一死を待たん、毎時偶發の熱に左右され得可き浮生何ぞや。朕にして爾曹に號令するに足らずは、今や爾曹の裡に朕は誇りて且快くいはん、其處に幾多の將帥ありて功徳經驗よく最重大の戦役に耐へん。朕が悔るなく恐るゝなく私人の境に退隠し得るは朕が治世の情勢なり。帝の最温健なる決意は羅馬軍の一齊の喝采愉悅せる從順を以て應へられ、皆その英雄的君王の旗下に戦ふ限捷利の疑なきを公言せり。「斯くして朕は波斯を羈扼に屈し得ん、斯くして朕は共和國家の國力と壯大とを復し得ん、斯る希望は實にジュリアンの誓言たりき、帝の屢口に於る此種の保證は士氣を振作せり。名譽の愛は帝の精神の熱烈なる情なりしが、マオガマルチアの廢墟を踏むに及びて始めて自いへり、「吾曹は今やアンチオクの詭辯學者の爲に若干の材料を遺り得ん」と。

ジュリアンの成効的勇氣は總ての障害を排してクテシフの門に迫るに至れり。而も波斯國都の陥落否その攻圍すらなほ遠し、帝の大膽熱練の行動の舞臺たる地方の知識なくしてはその軍事的進退を明にし難し。バグ



ダッドの南二十哩、チグリス河の東岸に、旅人はジュリアン時代に一大都城たりしクテシフォン宮殿の若干の廢墟を見ん。之に近きセレウキアの名と譽とは永しへに滅びぬ、その希臘殖民の僅に残れる一部はアッシリアの言語風俗と與にコチエといへる原始的稱呼を得たり。コチエはチグリスの西岸に在れしを自クテシフンの郊外として見られ、予輩はその舟橋を以て連結されども想像し得。その合同せる部分はアルモダイン、則、兩市城の通俗的名稱を生ず、これ東洋人の薩贊朝の冬都に名くる所にして、波斯國都の全周は河流高壁近き難き沼澤を以て固めらる。セレウキアの廢墟に近くジュリアンは陣を布き、壕を掘り壘を設けて多數の勇敢なるコチエ戍兵の襲撃に備ふ。地肥沃にして羅馬軍は飲水秣料多く、軍の行動を妨げ得る諸堡壘は若干の抵抗の後その勇に服せり。ユフラテス河に浮びし艦隊は通航自在なる水路によりて都城の下を距る遠からざる處にチグリス河に出づ可し。若し此船舶にしてナハルマルチャの名を負へる王室運河を航せんには艦隊とジュリアンの軍はコチエによりて中斷さる可く、チグリスの急流に逆ひて敵都の

羅馬水師の移河

中を進まば羅馬水師は全滅を免れず。帝その難を知りて策を講ず。帝はトラジアンを行軍を仔細に學びたれば、好戦の先王がコチエを右にして都城の上流にナハルマルチャの水を導く新運河を鑿ちしを、忽に想起せり。よりて農民に問ひて殆んど廢絶せるその舊蹟を探知し、兵士の勞力によりて直にその開鑿を企て、堤坊を築きてナハルマルチャの水を堰きて新河床に移し、羅馬艦隊は之によりてチグリスに移りしかば、その轉航を脅さんとてクテシフンの波斯人が建設せる障害物は効空し。

羅馬軍をしてチグリス河を渡らしむる勞作は前者より勞少きも危険多し。河幅は廣く水流は急に岸坡は峻しく、加ふるに對岸の壘砦には重甲の兵精妙の射手リベニウスの異常なる鋪張に據れば、一野の穀物一隊の羅馬軍をも輒く蹂躪し得る大象より成る大軍あり。斯る敵を前にしては架橋は至難なれば、直にその機會を待ちし皇帝は着手の瞬間までもその計畫を敵にも我軍にも否我將校にすら秘したり。輜重の状態を檢すと假言して漸次に八十船の搭載物を卸し、陽にある秘密の行動を命ぜる特別隊に一號令



の下に直に武器を執りて起つを命ず。帝は自信の笑を以て心中の不安を隠し、コチエの壁下に軍事的競技を行ひて敵兵を樂しましむ。終日快樂に暮れて晚餐畢るや、直に帝は諸將を帳中に召し、夜に乗じてチグリスを渡るとを告ぐ。諸將愕きて言なかりしが、老齡經驗のサルストの細心を以て謀むるや、皆之を助く。然るに帝は征服と安全とは此一舉に在り、敵衆は漸次に加はるも滅するなし、躊躇彌久は河幅を盛めず、峻坡を平げずと爲して聽かず。令忽下りて衆直に應ず。衆中最性急なる者直に躍りて、最岸に近き五船に上る力を盡くして橈を操ると數分既に影を暗中に没す。烽火對岸に起る、是明に先登の船上らんとして敵に燒かるゝを知りし帝は、極難を轉じて勝兆となす。乃呼んで曰く、わが兵既に彼岸に在り、見よかの豫定の信號を急げその勇を助けしめよと。大艦隊の合同急促の行動は急流を亂りて早くもチグリスの東岸に達し、火を消して冒險なる先登隊を救ひ得たり。峻嶮なる岸坡の難は甲冑の重と夜險の暗とに加はる。矢石砲火は隙もなく頭上に雨下せしも、攻軍奮鬪岸に攀ぢ壘に上れり。衆對等の地位

クテシオの捷

を得るや、輕兵を以て攻撃を指揮せるジュリアンは、暗熟老練の眼を輝かし、ホマーの訓言によりて最勇敢なる兵士を前後に配し、皇軍の總喇叭は戰鬪の號を吹けり。喊聲を擧げし羅馬軍は軍樂の調に合せて歩武を進め、巨大なる飛槍を投げ、白刃を揮ひて外軍に肉薄す。全戰鬪は約十二時間に互れり。波斯軍の漸退はその主將とスレナスとの恥づ可き例によりて紛亂せる潰走と變ず。乃追ひてクテシオン城門に殺到せり、若し矢に中りて重傷を受けし井クトルが不幸功を成さずば危からんとて其妄進を止めざりせば、捷軍は此時門内に蹙進し得たらむ。その方にて羅馬軍の失は僅に七十五人と爲すに敵屍の野に横りし者二千五百、甚しきは六千といふ。東軍陣中の富侈によりて鹵獲の如何なりしかは想ふ可く、多量の金銀精巧の武器、馬具、銀の寢床、卓子等。捷帝は勇武を賞して若干の名譽ある賞賜、文冠、先登冠、海軍冠を賜はれり、蓋し是帝が然り恐らく獨り帝が、亞細亞の富より尊しと思惟せる所なり。嚴肅なる犠牲は戰の神に捧げられしが、犠牲の外見は最不祥の事を脅せり、而もジュリアンは直に曖昧ならざる徵候により



ジュリアンの境遇

て今や昌隆の期に達せるを發見せり。  
 戦後二日(三六三年七月)禁衛軍、ジヨリアン、ヘルクリウス軍、其他全軍の三分の二はチダリス河を渡れり。波斯軍がクテシフォン城上より附近の荒廢を俯瞰する時、ジュリアンは幾びか不安の眼を擧げて北方を望み、自捷利を得て深くクテシフォンに入りしが如く、兩將セバスタアン、プロコピウスの軍も亦同じ勇氣と努力とを以て進來す可きを確信せり、然るに羅馬軍より應援軍の撤退を許したる、否、恐らく之を命じたる、アルメニア王の詐略と、公事の爲に何等の計畫をも實行し得ざる兩將軍の不和とは、帝の期待を破れり。この必要なる後援の希望絶ゆるや、帝は軍議を催し、充分の論議を盡くせる後、クテシフンの攻圍は無益有害の舉なりと爲す諸將の意見を聽許せり。既にジュリアン以前三び圍まれて陥りしこの都城が如何なる守備の術を施してか、勇武熟達の將帥を戴き、船舶糧食破城機械を具備せる六萬の羅馬軍に對して難攻不落なりしやは、予輩の容易に考へ得ざる所なり。然れどもジュリアンの名譽を愛し、艱苦を恐れざる性情より見て、決して採るに足らざる

帝の講和の峻拒

る想像的障害の爲に挫折せりとは思ひ得ず。帝はクテシフンの圍を止めし其時平和的商議の最、迎合せる提案を頑然として斥けたり。久しくコンスタンチウスの緩慢なる自負に馴れしサボルは其後繼者の大膽なる精勵に驚けり。印度スキシアの邊陲に至るまでも州藩王は兵を募り速に大王に入援す可きの命を受けしが、その準備は遅く、その行動は緩く、サボル未兵を出すに及ばずしてアシリアの侵略宮殿の荒廢チダリス河上の勇兵の戦死等悲報踵ぎ至る。大王の自尊は塵中に落ち、地に坐して食し憂愁梳らす。恐らく王は國土の一半を擧げて他の一半の安泰を購ふをも拒まざりけむ。王は平和條約を結びて悦んで羅馬捷帝の忠誠なる隸屬的同盟となりけむ。位階あり親任ある一宰臣は私事に托して竊にホルミスダスの膝を抱き、皇帝の御前に引接せんことを哀願す。薩贊朝の皇子は、誇言にや聽きし人情にや動きし、出身の情にやよりけむ地位の務をや重んじけむ、亦波斯の不幸を絶ち羅馬の捷利を確むる有利の一方策を爲さんとせり。而も自己にも國家にも共に不幸に、亞歷山大大王がダリウスの提案を拒絶せしを



記憶せるわが英雄の頑強に驚きぬ。ジュリアンは安全和平の希望が軍隊の熱心を冷さんを恐れて、ホルミスダスが竊にサポルの宰臣を遣り還し、この危険なる傾向を陣中より隠蔽せんことを切望せり。

### 三、困却、退軍、ジュリアンの殞落

ジュリアンの名譽と利害とは帝のクテシフスの不落城下に滞留するを許さず、城に嬰りて守れる外人に野に出で、戦はんことを挑むや、城兵は若し帝勇を奮はんと欲せば大王の軍に會す可きを答ふ。帝は不遜を許して提言を聴けり。ユフラテス、チグリス河畔に止まらず、亞歷山の遺圖を學びて深く内地に入り、恐らくアルベラの野に對敵と亞細亞帝國の爭奪を決せばやと志せり。ジュリアンの寛量、は自國の爲に危嶮虚偽耻辱多き任務に當れる波斯の一貴人の權略によりて稱賛され且僞負されき。信頼せる部下の一行と與に帝の陣に來り、その遭遇せし凌辱を告げ、サポルの殘虐國民の怨嗟王國の虚弱を舖張し、自羅馬軍の東道の主人たらんと請ふ。最合理的

帝の決死  
船の燒却

の疑點はホルミスダスの智識と經驗とによりて提起されしも其効なく、輕信なるジュリアンは叛逆者を擁して、人間の意見にては細心を難じ安全を危くするが如き急命を發するに至る。帝は多大の勞と財と血とを費して五百哩以上を輸送し來りし全水師を唯一時間に破壊し、車載して行軍に伴ひ渡河の船橋と爲す可き十二隻或は多くも二十二隻の小船を存し、兵衆の爲に二十日の糧を裹み、以外の物資はチグリス河に泊せる千一百隻の船舶と併せて一炬に附す。基督教の卑劣グレゴリー、オীগアスチンは之を刺りて背教者の狂妄自神裁の宣言を實行せりと爲す。恐らく軍事に就きては價値少きその記事は、親しく燒却を目撃し軍中の私語を耳聞せる經驗ある一將校の冷靜なる判斷によりて確證せらる。されどまたジュリアンの決志を正しと爲し得る或公明にして恐らく堅實なる理由なきに非ず。ユフラテス河の航行はバビロン以上に溯り得ず、チグリスの溯江はオピスより上に出でず。オピスは羅馬陣を距ること遠からねば、數處に自然と人工との瀑瀾ある此急流に大艦隊を溯江せしむるは、無用不可能の計畫としてジュリ



アンに拋棄されざる能はず。帆若しくは槳の力は足らず、急流に逆らひては船を曳くを要す、二萬卒の勞力は此倦怠なる奴隸的勞役に盡く、若し羅馬軍にしてチグリス河畔に沿ひて進まん乎、その主帥の天才若しくは運命に價する何等の企畫を得ずして歸るの外なからむ。之に反して若し須く内地に進入す可しとせんか、艦隊物資の燒亡は、クテシフォン門内より突出し得可き多數の兵衆の手より此高價の鹵獲を奪ひ得る唯一の方策たり。若しジュリアンの軍にして捷利を收めんには、兵衆の退軍の希望を絶ちて死か捷利かの孰かを取らしめし此英雄の行爲と其勇斷とは今も尙予輩の贊嘆する所たりしならむ。

近世の行軍を煩はす扱ひ難き大砲車輛の行列は大部分羅馬の軍陣には知られず。されど何の時代を論ぜず、六萬人の糧餉は細心なる將帥の最緊要なる留心の一たる可く、斯る糧餉は自國より得ざれば之を敵地に仰がざる可からず。ジュリアン假令チグリス河の交通を持続しアッシリアの征服地との連絡を有せりとも、ユフラテスの河水漲溢し無數の昆蟲天を掩ふ季

糧料の缺

節に、荒掠されし一州豈能く定期に巨額の供給をなし得んや。敵地の觀は之に比して有望なり。チグリス河とメチア山地との間に横はる廣大の地帯は村落城市多く、大部分は耕作の法進歩せる饒地なり。ジュリアン以爲く銅と金との二大説服力を兼備せる捷主は土人の畏怖と貪欲とによりて豊富なる糧料を得るに難からずと。然るに羅馬軍の近づくやこの豊富の光景は忽ち一掃せり。その向ふ所住民は皆野を荒して城に入り、家畜は追ひ去られ草穀は燒却され、ジュリアンの行進を遮りし煙焰を鎮消すれば、後には唯煙れる赤地を見る。此絶望的ながら有効の防禦術は貧困よりも獨立を尊重する人民の熱心のみよるか、或は國安の爲には人民の撰擇の自由を許さざる專制政府の峻棘に出づ。今や波斯人の熱誠と從順とはサポルの號令と相應じ、羅馬皇帝は幾もなくその掌裡に消費し行く糧响の缺乏を見る可く。その未全く盡きざるの前に急に正しく進まば帝は尙エクパタナ若しくばスサの富みて強からざる城市に達し得可かりしも、道路の不案内と嚮導の詐偽とは此最後の資源を絶ちき。羅馬軍はバグダッドの東方野



中に彷徨すること數日、巧に之を係跡に懸けし波斯の反應者は早くも遁れ去り、その從兵は拷掠によりて始めて隱謀の實を吐けり。久しくジュリアンの心を樂しませしヒルカニア印度の夢の如き征服は今や其心を窘しめき。自己の不用意より全軍の不幸を招きしを知るや、帝は神人執よりも満足の應報を得ずして安全と成効の希望とを平衡するに惱みし、後終に唯一の方策として決せるは、チグリス河方面に急進して羅馬の君權を認むる豐沃なる友州コルヅエネの境に到達して全軍を救ふに在りき。波斯王位を顛覆せんとの大希望を以てチャボラスの小流を渡りてより僅に十又七日六月十六日、喪心せる軍隊は退却の信號に従へり。

却 皇師の退

羅馬軍の其地に至る間、數團の波斯騎兵ありて、或は散開し或は密集して遠方より輕侮し、輕く前軍を犯す。されど此支隊には更に一大軍の後援あり、わが軍の先頭チグリス河に向ふや、否塵雲、忽、平野に起る。今や安全に速に退却せんをのみ思へる羅馬軍は、此恐る可き光景を見ても、是野驢の群に非ざれば、則、與黨の亞刺伯族の近づくものと爲せり。よりにて留まり

且 戦ひ且 退く

て帳を張り營を布きしが終夜警を絶たず、曉天に至りて見れば既に波斯軍の圍中へ落つ。その軍は唯敵の先陣と覺しく、地位名聲ある將軍メラネスの令する重甲射手象兵の本軍直に踵ぎ至る。兩皇子と主要なる藩王亦之に加はり、聲言と所期とは、徐につぎ來らんとするサボル軍の強大を誇張す。行進を續けながら集散する羅馬部隊の長き開展は、地形の差異に従ひて幾度か敵に利便を與へたり。波斯軍は幾度か犇き懸りてその度毎に激しく撃退さる。殆んど此戰鬪の名となれるマロンガの戰は、波斯王の眼底には恐らく同價値に見られけん若干の藩王と巨象とを損ぜり。斯る壯大の戦利は羅馬軍にも亦相應の損害なくして得可からず。若干の名ある將士は傷き死せり。危きを見ては必ず率先して部下の勇を鼓吹する皇帝は親しく戰鬪に加はりて勇を奮へり。尙羅馬軍の中堅と安全とを爲せる攻守武器の重は有效なる長き追撃を爲し得ざるに、東方の騎軍は迅速に如何なる方向にも槍を飛ばし箭を放つ熱練あれば、急奔快走の時より恐ろしきは莫し。されど羅馬軍の爲に最確なる避け難き失は時候なりき。ゴ

第三節 困却、退軍、ジュリアンの殂落



一ル日耳曼の寒地に馴れし老兵宿率はアッシリアの夏の炎暑に疲れ、その勇氣は且行き且闕ふに盡き、行進は敏活なる敵前に遅く危険なる退却の爲に意に任せず、供給減するに従ひ毎日毎時羅馬陣中の糧餉の價値は加はれり。餓へたる一兵卒も尙且否むが如き粗食に常に満足せるジュリアンは皇家の糧と與に護民官將軍の馬匹より節し得る所を軍中に預つ。而も此薄弱なる應急は唯不幸の感を加ふるのみ帝國の境上に達するの前悉く饑餓か敵刃に死す可しとの暗愴たる憂色は羅馬軍を掩ひ來れり。

帝の驚夢

ジュリアンは殆んど耐へ難き窮境に苦しみながらも尙夜深くして學を講じ想を練る。短き睡に眼を閉づる時帝の心は痛みき帝國の精靈頭と幾多の角上に葬往を蒙りて出現し徐ろに帝帳より出で去るを見て夢魂驚く。乃寢床を起ちて外に出で中宵の夜氣に勞神を安めんとすれば天空一座の隕星ありて倏忽として光を失ふ。ジュリアン戰神の譴怒を見しと爲し之をツスカンヘルスビセスの術に詢ふに、皆帝の

e、エトルリアに起りし神興のト占術にしてツスカンの聖者タルクイテウススの古典によりて瑞兆吉凶を判するなり。

帝の負傷

行動を禁絶す可きを言へり。されば此際必要と理性とは迷信よりも重し。喇叭の響は天明を告ぐ。軍は丘阜の地を進み丘阜は私に波斯軍に占據さる。ジュリアンは完全なる將軍の熟練と注意とを以て先陣に進みしに、後軍俄に襲はるゝの報に愕く。天暑くして帝は甲冑を脱せしが之を聞くや扈從の一人より楯を奪ひ急に投衆を揮きて後軍に赴き救ふ。而も前鋒また急を告げて帝前に走る。その軍中を馳する時左翼中央忽に波斯の騎軍象軍に攻撃されて殆んど潰へんとせしが、輕兵時に應じて至り巧に騎後象脚を利して奮闘して忽に之を破る。敵は走れり、所有危急に先んずるジュリアンは發射ともに追撃を勵ます。彼此の混亂に離散潰裂せる近衛は震へながら無畏の君王にその甲を貫かざるを注意して危に臨まざらんを諫む。その聲畢らず一陣の槍箭走れる敵騎より雨の如く注ぐ。一槍飛んで腕肌を削りて肋を貫き肝中に止まる。ジュリアン之を抜かんとせしに槍刃に觸れて手指落ち、失神して馬より墜つ。近衛走り救ひ傷きし皇帝を徐に地上に起し、戰塵を避けて附近の帳裏に移す。悲報は隊より隊に傳



はりしが、愁哀は勇氣を鼓し報復を思はしむ。慘澹たる惡戰を續けて夜に入りて止む。波斯軍はわが左翼の攻撃に利を得て、宰臣アナトリウスを斬り、殆んど獲んとせし統領サルストを逸せしも、若干の名を爲せり。而も全局に於ては東軍の不利にして、戰場より敗走し、兩將マラネス、ノホルダテス、五十人の貴族、藩王勇士の無数を失ひたれば、若しジュリアンにして殞落せずば、羅馬軍の成功は一箇の決勝的捷利と化したりけむ。

帝の遺訓

血を失ひて失神せしジュリアンが漸く氣力を復するや、始めて口にせし最初の語は、勇武の精神を表せり。(三六三年六月二十六日) 帝は馬を呼び武器を呼び、再び戰場に馳せんとしき。残れる勢力は痛ましき努力によりて、痍を癒せし醫は近づく死象を認む。恐る可きその瞬時も、帝は英雄たり聖者たる強固の性情を失はず。その最後の東征に従ひし哲學者等は、ジュリアンの帳を以てソクラテスの獄に比す。義務友情さては好事のために其床頭を圍繞せし諸人は、哀愁を帯びて死せんとする帝の告別の辭を敬聽せり。「友よ、戦友よ、朕が最後は今來れり、準備ある負債者の如く悦んで自然の

要求を償還せむ。朕は哲學によりて、靈魂の如何に肉體より優れしか、その離脱の悲しきよりも寧ろ悦しきかを知る。朕は宗教によりて、早き死は敬信の報賞たるを知り、徳性と勇氣とを以て、今まで維持せし人格を汚すの憂なからしむる此痛撃を神祇の恩恵として受く。朕は死して悔なし、牛きて罪なかりし如く。朕は私生涯の清白を回顧すれば、樂しく、神力の發露たる君主權の朕の掌裡に純潔なりしを、確言し得。專制の誘惑的破壊的訓言を排して、朕は蒼生の幸福を政治の宗旨とせり。細慮正義温厚の法を實踐して、事を天意に任せき。平和が國利と相容るゝかぎり、朕の商量の目的たりと雖も、國家の聲を聽まして、朕に兵を把るを命ずるや、命を鋒鏑に殞すを豫知するも、朕は卜算の術を以て之を知る、親ら戰鬪の危難を冒せり。今や朕をして暴君の残忍にも謀徒の毒刃にも疾病の苦惱にも死せざらしめし、永劫不滅の神に謝す。神は朕に名譽の行進中に、莊麗光榮の別離を與ふ、運命の打撃に哀求し回避するは、無理にしてまた陋醜なり。——言はんと欲する所多きも、氣力は衰へぬ、死の近きを感じず——朕意ありて、皇帝推選に就きて